椿姫純恋華

玉紀　直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
椿姫純恋華

【Ｎコード】
Ｎ４６０３Ｔ

【作者名】
玉紀　直

【あらすじ】

人を切り裂くような冷たいナイフのような男、辻川財閥の若き総帥、辻川　総司。
彼が心惹かれたのは、気は強いが特逸した美しさで名高い「葉山の椿姫」　こと、老舗大企業の娘、葉山　椿だった。
しかし彼女は、かたくなに総司の求婚を拒み続ける。
椿は、決して叶う事のない恋に、心を痛め続けていたのだ……。
椿の花のように脆く崩れ落ちてしまいそうな純愛を胸に秘める彼

女。

その華の心を手に入れようとする彼。

すれ違いと誤解。

恋に不慣れな二人が織り成す、『純恋』じれったい恋物語です。

椿姫・1　『出会い』

「その足をおどけなさい！」

出会いは最悪だった……。

「何という事をなさいますの?！　切花にだってささやかな命があります！　足元に落ちていたからと言って、踏みつけて良い物ではありませんわ!！」

他人に逆らわれた事も、意見された事も、彼は一度だって無い。
常に彼のやる事は正しく。
常に彼は、“その世界”の中心であったからだ。

だが今、その彼に意見する一人の少女が目の前にいる。

「お前。名はなんと言う」

彼、辻川総司（つじかわつかさ）は少女を睨み付ける。
その双眸の冷たさに、周囲は震え上がった。

この美しい少女は、きっと泣き出してしまうだろう。
それどころか、総司にぶたれてしまうかもしれない。

先代の事故死のせいもあり、若干二十歳の時に“辻川財閥”という大財閥の総帥となった彼は、今二十二歳。
天才的な才能を持って、この全組織の実権を握る男だ。

「目で人を殺しながら仕事をする」　そう例えられ、人の身を切り裂くナイフのような目をした男。辻川総司。
彼は、“人間”という生き物に容赦をしない男だ。例え女性であろうと、自分の意にそぐわないと解かれば、平気で手を上げてしまう。

まさかこんな所で面倒に巻き込まれるとは思っても見なかった。
だから彼はこんな所へは来たくは無かったのだ。
企業間の新年パーティーなどという面倒な所へ。
会場へ入る道を先導していた秘書が、出入り口のフラワーテーブルに飾ってあった花瓶に引っ掛かりそれを落としてしまった。花瓶こそ床の絨毯に助けられ割れはしなかったが、いっぱいに飾られていた花と水が総司の足元にまで散乱した。
その切花の一つを、総司が踏んでしまったのだ。
その時、総司にその声は浴びせられた。
「その足をおどけなさい！」　と。

「人に訊ねる前に、ご自分が名乗るのが礼儀ではございませんの？」
少女は泣かなかった。
総司に冷たい視線を向けられようと、睨み付けられようと、少しの怯みも見せない。
総司が踏みつけた花を庇い、彼の足元に屈み込みながら、真っ直ぐに彼を睨み返したのだ。
そんな彼女は、パーティー会場の片隅で噂の的にされていた。

「“椿姫”ですわよ。ほら」
「まぁ、怖い。あの辻川様に意見なさるなんて」
「あんなにお美しいのに、気がお強いというのは噂だけでは有りませんのね」

「“葉山の椿姫”といえば、……有名ですもの」

老舗大企業。葉山製薬の娘。葉山椿（はやまつばき）は、この時、まだ十七歳。

その特逸した美しさで、常に噂の的にされている少女だ。

容姿的にも家柄的にも申し分のない彼女。すでに彼女には、十五歳の頃から様々な名家企業一族からの縁談が舞い込み、それが絶える事が無いという。

今日彼女がここへ来たのは、本来参加するはずだった兄の代理。

彼女とて、本当はこんな所へ来たくは無かった。

睨み付けられながらもその目を真っ直ぐに見据え返してくる椿から、総司は目が離せなくなった。そして、いきなり椿の腕をグッと掴み、無理矢理引き上げ立たせたのだ。

椿自身も驚いたが、見ていた誰もが総司の行動に驚き息を呑む。

会場内の誰もが、椿は総司に頬の一発でも叩かれてしまうだろう。

そう思ったのだ。

いきなり引きずり上げるように立たされ、椿はバランスを取れずにその身を崩しそうになる。しかし総司が素早くその腰に腕を回し、彼女を抱きとめた。

腕を掴まれ、腰を抱かれ、会ったばかりの男性と身体が密着するという、人前で晒すにはあまりにも恥ずかしい恰好。椿のような年頃の少女なら、真っ赤になって慌てて離れてしまうだろう。

しかし驚いた事に、彼女は顔色ひとつ変える事もなくまだ彼を睨み付けている。

目と鼻の先にある、彼の顔を。

「辻川総司と申します」

そんな椿の目を見詰めたまま、総司は落ち着いた口調で言った。

「ご婦人に対して、失礼を致しました。不作法をお許し下さい」

“あの”辻川の総帥が詫びている。
それも、自分より年下の少女に。
総司を知っている者は、誰もがこの信じられない事態に言葉を失った。

「葉山椿です」
相手が名乗ったのだ。自分も名乗るのが礼儀。とばかりに椿も名乗るが、すぐに頬を染めやっと総司から目を逸らした。
「……離して……頂けますか？」
初めて会った男性に抱き寄せられている恰好が、椿だって恥ずかしくなかった訳ではない。しかし、身体に触れられた事を恥ずかしがったりすると「男性は余計に調子に乗る」という思い込みがある椿は、馬鹿にされないようにと必死で我慢をしたのだ。

「失礼致しました。椿さん」
総司はそう言って椿の身体から腕を離すと、そのまま彼女の右手を静かにとり、手の甲に唇をつけるという敬愛の態度をとった。
椿は少々驚いたが、女性への敬意をはらっている男性にいつまでも冷たい態度をとるのも失礼だろう。彼女もその表情を微笑みに変えて、敬意を表した。

「こちらこそ。辻川の御当主様に対して、大変失礼致しました」
見目麗しいという言葉は、彼女の為にあるのかもしれない。
その姿は、あまりにも艶やかな椿の花のように美しく、総司の心を惹きつけた。

清らかで美しい椿の華。
その華を前に、総司は激しく心を奪われたのだ。

椿姫・1　『出会い』（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
この度は『椿姫純恋華』　に目を留めて頂き、誠に有難うございます。
こちらの作品は、Ｒ１５の警告が入っていますが、しばらくそういった表現は出て来ません。
ええ。なんたって焦れ焦れしてもらう予定なので。（笑）
ですので、その方面が苦手な方にも、しばらくは安心してお読み頂けるかと思います。

時代背景的には、現代よりは少々昔になります。（昭和）
ですので、いささか古い表現なども出て来ますがどうぞご了承くださいね。
主人公の椿さんも貞淑で古風な女性ですので、最近にはあまり見かけないその辺りの感覚もお楽しみ頂けると嬉しいです。

男性の想いを受け止めながら、徐々に花開いてゆく椿の華を、二人の純恋の行方と共に、御一緒に見守って下さい。

どうぞ宜しくお願いします。

椿姫・2　『兄』

「だから行きたくなかった、と言っているのです！」
椿はまるで、駄々っ子のように声を荒げた。
「お兄様は自分勝手ですわ！　元々はお兄様のお役目でしょう？　それを、直前になって私に行かせるなんて！」
椿は気が強い。物事にハッキリとした正直な娘だ。ゆえに彼女は、物怖じ、という物をあまりしない。
その証拠に……。
今彼女は、とんでもない相手に口ごたえをしているのだ。

「父と母に叱られたからといって、私に当たるな。椿」
彼女の目の前に居る青年は、読んでいた本を膝に落とし、安楽椅子に深くもたれ掛かる。
彼女は今、この青年の目の前に立ち、両手を腰に当てて苦情を言い放っていたのだ。
「お前が責めを受けたのは、お前の性格が原因だ。器量は良いのだからその気の強さをもう少し意識して抑えれば良いだけの話ではないのか？」
青年はちょっとからかうように毒を吐く。もちろん椿は、ムッと眉を寄せた。

「お兄様みたいな“鉄仮面”に言われたくはありませんわ！」

一騒動あった新年パーティーの翌日。日曜日という事で屋敷に居た椿は、同じく大学が休みらしく、サンルームでくつろいでいた兄を見つけ、朝の挨拶もそこそこに昨日の愚痴を早口で彼にぶつけた。

椿は昨夜、パーティーで辻川財閥の総帥に生意気とも取られる態度を取った事を両親に叱られたのだ。

周囲が息を呑んだ緊迫劇の後、お互いに自己紹介をし合った総司と椿。その後、「椿さんとお話をさせて下さい」という申し出を総司に受けた椿は、会場のロビーラウンジで総司と三十分ほど二人きりにされ、他愛もない話をした。

自分の娘が辻川の総帥に誘いを受けた。

両親はその栄誉に浮かれあがり、これはもしかしたら椿を気に入って目をかけてもらえるかもしれない、というところにまで思いは及ぶ。

そしてその思いを増幅させるかのように、帰り際、総司は再び椿の手の甲に敬愛の証を示し、こう言ったのだ。

「宜しければ、明日の日曜日にでも当家へいらっしゃいませんか？椿さんとは、もっとお話がしたい」

それも、彼のお付きの人間でさえ見た事がないような柔らかな表情で。

しかし……。

「明日は兄に、勉強を教えて頂く約束がありますの。申し訳ございません」

平然とそう言い放ち頭を下げ、ドレスの裾を翻して、椿は総司に背を向けたのだ。

……これに、両親が怒らないはずは無かった……。

「私のせいではないだろう？　椿」

怒る椿をなだめる彼は、彼女の兄。

葉山一（はやまはじめ）。この葉山家の長男であり、家業とする葉山製薬の跡取りだ。

椿の四つ年上で、今二十一歳。大学三年。大学を卒業後はもちろん会社へ役付き入社をし、父と共に会社を支えていく予定だ。

この椿の兄だ。もちろん、容姿端麗、眉目秀麗を絵にしたような男だが、どうも一は人間に興味が無いらしく、あまり感情を表に出さない。ゆえに、大学の仲間内で付いた仇名が“鉄仮面”だ。

そんな仇名を付けられては文句の一つも言いたくなるはずなのだが、その仇名を付けた相手は彼の幼馴染。人間無関心の彼が唯一親友と認めている男なので、もちろん文句を言ったりした事は無い。

「辻川の御当主に誘いを受けたのだと聞いたぞ？　それをキチンと受けなかったから、父と母に叱られたのだろう？　何故『行く』と返事をしなかったのだ？」

「だ、だって、お兄様が、今日は勉強を教えてくださる……って」

椿はちょっと赤くなって言い淀んだ。

「私が教えてやるなどいつでも出来る事だ。一日中勉強をしている訳でもない。午後からでも伺う、と言っておけば良かっただろう？」

「いっ、いやですっ。だって……」

「だって？」

いつも言いたい事をハッキリと言う妹が妙に言い淀む。珍しい態度を前に一は少々興味が出たらしい。彼にしては非常に珍しいニヤニヤとした表情で椅子から身を乗り出し、椿の顔を見上げた。

「おっ、お兄様はお忙しいから、いつでも教えて頂ける訳ではありませんし……」

「いつも教えてやるほど、お前は勉強が出来ない訳ではない。勉強など私が教えなくても充分にできる妹だ。勉学に対する応用力は女にしておくには惜しいくらいだぞ」

「そ……、それでもっ……」

椿は言葉が続かない。明らかに言い訳だからだ。
今日家から出たくない理由。決定的な理由が、彼女にはある。

「久し振りなので……。ご挨拶がしたくて」
「ん？」
椿は言い辛そうに、どこか恥じらいを見せながら、その名を口にする。

「……大介さん、今日もいらっしゃる、って、お聞きしましたから……」

名前を口にするだけで薄っすらと染まってゆく頬を、彼女は抑える事が出来なかった。

椿姫・3　『初恋』

「だぁ～れだっ」
爽やかで楽しげな声と共に、遮られる視界。
「ひゃっっ……」
椿が出したとは思えないような小さく可愛らしい悲鳴を上げて、目をふさがれた彼女はビクッと身体を震わせた。
彼女とは思えないような……。冗談ではなく、いつもの強気な彼女からは想像も付かないくらい可愛らしい声だったのだ。
そんな妹を目の前で見てしまった一は、これもまた彼らしくない大きな声で笑い出した。
「何だ？　椿！　なんと言う声を出している？！」
そんな悲鳴を上げてしまった自分も恥ずかしいが、そんな事で大笑いをする兄にも腹が立つ。いや、それよりも彼女は、そんな悲鳴を上げさせる原因を作った人物に腹が立つ。
「その手をお離しなさい！　女性に対して失礼ですよ！」
椿は高らかに叱咤の声を上げながら自分の目をふさいだ手をパシッと撥ね退け、くるりと振り返った。

しかし彼女は振り返った瞬間、叱咤の言葉を出した口を一直線に結び、赤くなって固まったのだ。

「元気だねぇ？　椿ちゃん」
椿の目をふさいだ張本人が、ニコニコしながら立っている。
爽やかな、人懐っこい笑顔で。
「でも、意外に力強いんだね？　叩かれた手、結構痛いよ」
少々恨みがましそうな目で椿を見る青年は、撥ね退けられた手を

垂らし、軽く左右に振る。
「だっ、だってっ……、大介さんがいきなりそんな事をするからっっ」
椿は動揺して口ごもる。“彼女らしくない”がまたひとつ。
そんな“彼女らしくない”行動を起こさせた青年。光野大介（こうのだいすけ）は、口ごもる椿を見ながら、ニコッと笑った。

「ごめんね」
人懐っこい、どこか可愛らしくも見える笑顔で笑いながら、大介は椿の頭を撫でる。
「だって、椿ちゃん、何か怒ってたみたいだからさ」
「だ、だからって、いっ、いきなりこんな事をされたら、驚くではありませんかっっ」
「そうだね。ごめんね」
大介はクスクス笑いながら少し身を屈め、椿の頭を優しく撫で続けた。

目の前で優しく笑い、頭を撫でてくれている大介。
椿は自分の顔どころか耳まで熱くなってくるのを感じて、顔は大介へ向けたまま、視線だけを下へ落とした。

大介は一と同い年の幼馴染だ。
一の幼馴染、という事は、椿の、でもあるが、やはり男と女の場合では違う。
学校もクラスもずっと同じという事もあって、当然だが大介は一と居る方が多い。椿が大介に会えるのは、大抵、彼が一の所に遊びに来ている時や、家族ぐるみの付き合いをしている時だけだ。
真面目で優しく、人当たりもいい。幼い頃から大人達の評価も良く、人を気軽に寄せ付けない一とさえ上手く付き合える大介。

そんな彼に、椿は幼い頃から憧れていた。

椿の、初恋なのだ。

もちろん、そんな椿の想いを、大介は知らない。……恐らく。

「おっ、おにいさまっっ、いつまで笑っていらっしゃるのっっ！」

妹らしくない姿を二つも見たせいか、鉄仮面のクセに実は笑い上戸である、という隠れた顔を持つ一の笑いは止まらない。椅子の背を両手で握り、顔を伏せながら肩を震わせ笑い続けている。

「おっ、お前がっ、そんなに慌てるなんてなっっ、……有難う大介っ、実に楽しい物が見られたっっ」

「おにぃさまっっ」

（あなたの笑い転げる姿の方が、何百倍も珍しいですっっ！！）

椿は声を大にして叫びたい。ついでに、声を大にして「女性を笑い者にするのは失礼です！」と叱ってやりたい！

しかし……。

自分のすぐ後ろに、大介が居る。

……そんな、あまり慎ましやかとは思えない事は、恥ずかしくて出来ない……。

「椿ちゃんっ」

呼びかける声と共に、椿の肩にポンッと手が置かれる。叱りつけてやろうかと口を開きかけていた彼女の口の中に、大介はぽいっと何かを放り込んだ。

「んっ……？！」

椿は何を入れられたのかと、驚いて両手で口をふさいだ。

「美味しいよ。もっと食べる？」

そう言いながら大介が顔の横に持ってきたのは、ドーナツ型の銀プレートに入ったカラフルなチョコレートだった。
「何だ？　大介、それは」
大介が見慣れないものを出したので、一は興味を引かれたらしい。笑うのを止めて、身を乗り出した。
「ここへ来る前さ、駄菓子屋さんで買ってきたんだ。“わなげチョコ”」
大介が椿の口の中に入れたのは、その中のひとつ、ピンク色のチョコレートだ。
「珍しいな。私にもくれ」
一が手を出すと、大介は苦笑いをしながら一の傍へ寄って行き、その手の上にプチップチッとアルミを弾いてチョコレートを落としていった。
「しょうがないなぁ。お坊ちゃんは駄菓子屋なんて入った事無いんだろ？」
「ないっ」
照れもせずキッパリと答える。それも真面目な顔で。
一はこういう男だ。
口に入れたチョコが意外に気に入ったのか、一は更に手を出すが、大介にペシッと叩かれた。
「ダメッ、あとは僕と椿ちゃんのっ」
一を相手にしている時は眉を寄せ、大介は椿を見るとニコッと笑う。彼の表情に見惚れていた椿は、相変わらず赤くなったまま首を左右に振った。
「あ……、いえ、私は……」
「遠慮しないで。美味しかったでしょう？　ほら、手、出してっ」
椿の手を掴み、彼女の手にチョコを落としていく。
「椿ちゃんには、このピンク色、全部あげるからね」
ニコッと笑う大介の笑顔が、椿の中に染み込んでいく。
口の中に残ったチョコの余韻のように、甘く甘く広がっていく。

しかし、この甘い余韻は、次の瞬間に苦い物に変わった。
「しかし、大介がこんな物を買っているのは初めて見たぞ」
「うん……、あのさ、エリちゃんが好きなんだ。今日も、後で買って行ってあげようと思って」
楽しそうな、嬉しそうな大介の声に、椿の身体は固まる。

「チョコが好きなんだよね。バレンタインにさ、手作りしてくれるって言うんだけど、自分で材料全部食べちゃったらナシっ、とかって言うんだ。酷いだろ？」
ちょっと照れくさそうな笑顔を見せる大介。
大好きな彼の笑顔であるはずなのに、その笑顔を、椿は見る事ができない。

手に落とされたチョコレートを見ながら、椿は切ない思いに捉われる。

大介には、心に決めた女性が居る。

椿の恋は、叶うものではないのだ……。

椿姫・4　『再会』

「は……、葉山様っ！　すぐ学長室へっ！！」

私立西海女子学園高等部。生粋のお嬢様学校であるここは、良家の子女ばかりが通う事で有名だが、同時に学力の高さにも定評がある。

その中でも椿は、常にトップを維持している生徒だ。

とにかくそんな学園の中、おしとやかで礼儀正しい才女が集うこの学園内で、大きな声を出しながら廊下を走っている者などいない。

しかし今、椿を呼びに教室へやってきたこの事務員は、事務室から椿がいる二年一組まで小走りでやってきた上に、大声を上げて椿を呼んだ。

これが目立たないはずも無い。

「学長室？　何故ですか？」

自分の席から立ち上がり、教室の前ドアで慌てている事務の女性へ声をかける。

「葉山様に、ご面会なんです」

「私に？」

（何だろう？　こんな、学校にまで面会に来る様な人が居ただろうか？）

父親の会社の人間が伝言を持って来る事もあるが、それでも学長室にまでは通される事は無いだろう。いいとこ、学園の五階に設けられている、保護者や運転手用の控え室までくらいだ。

ゆっくりとした歩調で歩み寄ってきた椿に、事務の女性はコソッと耳打ちをした。

「……つ、辻川財閥の……、御当主様が……」
「え？」
椿は驚きと共に、長いまつ毛を数回しぱたかせた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

学長室、と言うより、学長室から続き部屋になっている応接室に、辻川財閥の総帥は通されたらしい。
学長室へ入ると、流石に慌てた学長が椿の手を取り応接室までエスコートした。
成績優秀、品行方正。学園の代表と言っても過言ではない“葉山の椿姫”だ。何故、辻川財閥などという所から総帥が面会に来ているのかは解からないが、何かあっては一大事だ。
学長は応接室の中まで付き添おうとしたが、椿は笑顔でそれを断った。
「大丈夫ですわ学長様。ご心配なさらないで下さい。辻川様は先日パーティーで知り合った方です。とても礼儀正しい紳士でいらっしゃいますわ」
そう言って微笑みながらエスコートの手を外し、椿は一人、応接室へ入っていった。

「ごきげんよう。椿さん」
そこに座っていた辻川総司は、とても機嫌が良かった。
それは、パーティーの時でも聞けなかったほどの明るい声と明るい笑顔が全てを物語っている。その笑顔は、彼の後ろに控えている会社の秘書、及び辻川家で総司のお付きをしている者でさえ驚いてしまうような笑顔だったのだ。

応接室の大きな一人掛け用の椅子に座り、総司は満面の笑顔で椿を迎えた。

「ごきげんよう。辻川様」

椿は両手を前で揃え、背まで伸ばされたストレートの美しい髪を乱す事も無く、綺麗なお辞儀をした。

「先日のパーティーでは、楽しい時間を有難うございました。あの後、せっかくお誘いを頂きましたのに、失礼をしてしまいまして申し訳ありません」

ゆっくりと身体を伸ばし、顔を総司に向け、椿はニッコリと微笑む。

「お誘い頂き光栄で嬉しかったのですが、恥ずかしくてつい兄を引き合いに出してしまいました。ご気分を害してはいないかと心配しておりましたのよ」

もちろんだが、社交辞令だ。

総司の誘いを断った事を、両親はとても気にかけていた。

その事にフォローを入れつつ、椿は総司の機嫌をとったのだ。

しかし、その社交辞令は総司には通じない。椿がパーティーの時でさえ見られなかったような素敵な笑顔を見せてくれた事で、彼女に惹かれ始めている彼の心は盛り上がってしまったのだから。

「この近くに仕事で来たのですが、あなたの事を思い出し、どうしても会いたくなって来てしまいました。先日はいきなり女性を家へ誘うなどと、考えると失礼な事をしてしまった。申し訳ありません」

後ろに控えている秘書とお付きは冷や汗が出る。

（総司様が……、謝っている？）

「会いたいのなら私が出向くべきだった。今度、葉山のお宅へお伺

いしても良いだろうか？」

（……え？）

椿は何処と無く自分の立場がおかしくなりかけている事に、少しだけ気付いた……。

椿姫・5　『日課』

「ごきげんよう。お仕事の方は如何ですか？」
毎日同じ台詞を繰り返していると、そのうちにその人の顔を見ただけで言葉が出るようになってしまう。
たとえ、顔を見たら違う事を言おうと構えていても、その人の顔を見た瞬間に口が動いてしまうのだ。
それはまるで、店に客が入って来ると、意識しなくても「いらっしゃいませ」　と言葉が出てしまう店員にも似ている。

しかし、彼女は“店員”ではない。
だが、毎日同じ台詞を繰り返している。
――この半年間。

「今日は英国の企業と大切な話し合いが有ります。その会議に出る前に、是非、椿さんの顔が見たかった」
革張りの大きな椅子に脚を組んで座り、両手をその脚の上で組み合わせながら、総司はにこやかな表情を椿へと向けた。
「まぁ。そんな大切なお仕事がおありになるのに。こんな所へ来ている場合ではないのでは？」
椿は心配そうな表情を作り、小首を傾げてみせる。
その仕草は妙に可愛らしく、彼の気持ちを刺激した。そのせいか、返す言葉にも力が入る。
「いいえ。とんでもない。椿さんのように美しい女性を見てからの方が、仕事にも張り合いが出るというものです」
「まぁ。有難うございます」
椿の心配そうな表情が笑顔に変わる。彼女が喜んだと思ったのか、

総司の気持ちはより一層盛り上がった。

（張り合い……はいいけれど、よくもこう毎日続くものだわ……）

椿は笑顔の裏で溜息を付く。

総司と顔を合わせているここは、椿が通う学校。私立西海女子学園高等部の学長室、そこに隣接した応接室だ。

椿はこの半年間、毎日学長室へ通っている。

何故か……。

辻川財閥総帥の辻川総司が、毎日彼女に会いに来るからだ。

それは、授業中であったり、休み時間であったり、はたまた昼食中であったり色々だが、とにかく彼は毎日来る。

短い時で二、三分。長い時で三十分。とにかく椿に会いに来るのだ。

仕事の合間を縫って何とか時間を作り会いに来るのだろう。時々、彼の後ろに控えている秘書が、チラッ、チラッ、と時計を気にしながら泣きそうな顔をしている事がある。

「そうだ。お兄様に宜しくお伝え下さい。三十分ほどですが、昨日はお話しをさせて頂いてとても楽しかった」

今日もあまり時間は無いのだろう。何処と無く後ろに控えている秘書がソワソワしているのが解かった。

「今までは顔を合わせても挨拶をする程度でしたが、帝王学に実に素晴らしい自論をお持ちだ。またゆっくりとお話がしたい」

「伝えておきますわ」

人を寄せ付けない雰囲気を持つ者同士、どうやらウマは合うらしい。総司は一のひとつ年上だが、椿の兄という事もあり、「お兄様」と呼び、一に敬意をはらう。

総司は学校へ顔を出し始めた半年前から、自宅である葉山家にも足しげく通っている。仕事の都合が付く時は毎日。付かなくても、

訪問が三日と空いた事はない。
葉山家にまで訪れた日は、一日に二度、椿は総司の相手をさせられている事になるだろう。

「男性を無下に扱うものではない」　両親の言いつけも有って、椿は取り敢えず当たり障り無く、知人程度のお付き合いをしている。
しかし解からないのは何故こうも足しげく自分の元へ通ってくるのか……だ。

総司は誰が見ても「容姿端麗」　という言葉が当てはまる、整った容姿を持ち合わせている。――まぁ、椿に言わせてしまえば、「お兄様の方が上です」　との事なのだが。その辺の見解は、意外に彼女がブラコンであるところから来ているのかもしれない。
おまけに、天下の辻川財閥の総帥だ。「目で人を殺しながら仕事をする」　と言われているくらい仕事も出来る。
近寄ってくる女性。近寄りたい女性。チャンスさえあれば、手を付けて欲しがっている女性は沢山居るだろう。いくら性格に難有りでも、女に困る身分ではないのだ。
そうすると、自分の元へ足しげく通って来る意味が解からない。

（――もしかして、手なずけて“何とかしよう”とか思っているんじゃ……）

などと、心密かに“貞操の危機”を感じたりもする。
椿とてもう十八歳だ。経験は無くとも男性が考えている事くらいは解かる。
だが、椿の身体目当てならば、彼は半年間も日課のように椿に会いに来る必要など無い。

「今日も、時間が出来たら葉山のお宅へ伺おうと思うのだが……。

良いだろうか？」
「まぁ。良いか、なんて。辻川様の訪問をお断り出来る人が居るのなら、お目にかかりたいですわ」
「おや？　歓迎しては頂けないのかな？」
「大歓迎です」
椿は最上の作り笑顔で、にっこりと笑ってみせる。

天下の辻川。
そう。
もしも彼に、椿の貞操目当て、などという不純な動機があるのなら、自分の地位を利用して押し倒してしまえば済む事なのだ。
彼に逆らえる者など、居ないのだから。
しかし彼は、それをしない。

（――じゃぁ、どうして私のところに通って来るの……？）

椿姫・6　『時間』

「どうだ？　時間が空いただろう？」
文句は言わせない。刺すように睨み上げたその目は語る。
「次のアポまで、一時間の余裕がある。つまり私は、一時間自分の好きなように時間が使える。という訳だ」
総司はデスクから立ち上がり、目の前に立つ三人の秘書を一瞥した。
「お前達が言ったのだろう？　仕事中に無理矢理空き時間を作られては困る、と。だから私は仕事と仕事の間に空き時間を作っただけだ」

そう。総司の秘書達は困っていたのだ。
総司が椿の元へ毎日通うようになってから、ただでさえ詰まっている仕事が更に詰まる。
秘書達はそれを詰めて移動して、やり繰りするのが大変なのだ。
昼は学校。夕方もしくは夜に葉山家。

もしかしたら、仕事よりも一生懸命なのかもしれないと思ってしまうくらい。
いや、総司は恐ろしく仕事が出来る男だ。
中学を卒業後、すぐにアメリカへ留学し、飛び級であっという間に大学卒業資格まで取った。
十八の時には日本に戻り、前総帥と共に財閥組織を動かし、二十歳でこの辻川財閥を一手に継いだ男だ。
その総司が、仕事以上に情熱を燃やしている。
高校三年生の少女に、毎日会いに行く事に夢中なのだ。

総司だってまだ二十三歳だ。若いのだから女性に夢中になるのは良い。だが、それが仕事のスケジュールに無理を与えているとなれば話は別だろう。

椿の元へ通い始めて半年目。

秘書達はついに総司へ嘆願した。

仕事中にプライベートの時間を組み入れるのはやめてくれ。と。

辻川総司に意見するなど、下手をすれば殴られるどころか仕事をクビになったうえ、この先の就職先を断たれても不思議は無い。

しかし総司はそんな事はしなかった。

黙々と仕事を片付け、この詰まったスケジュールの中で見事この夕方に一時間という空きを作ったのだ。

次の仕事まで、一時間の余裕がある。

この時間を何に使おうと、それは総司の自由だ。

もちろん三人の秘書も何も言えなかった。

「車を用意しろ」

総司はデスクの前に回り、秘書達の前を風のように通り過ぎる。

車で何処へ向かうのか、訊かずとも解かる。

総司が通り過ぎた後、かまいたちにでも遭ったかの様な空気の痛さを感じながら、秘書達は車の用意に走った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

毎日会いたい。

朝でも昼でも夜でも。

彼女に会いたくて堪らない。

総司は車に乗り込みながら、椿へ胸の思いを馳せる。

こんなにも、女性に夢中になった事などない。

女性など、求めなくても傍に居る者だと思っていた。

引き寄せたい時に手を伸ばせば、簡単に腕の中へ入ってくるものだと思っていたのだ。

でも、彼女は違う。

初めて出会ったあの日、あの聡明な瞳で彼を睨み付けた。

睨み付けられた事など無い彼を、怯む事無く睨み上げ、意見した少女。

あの目に、総司は魅せられ、惹き込まれたのだ。

「椿姫か……」

（うまい事を言ったものだ。正に彼女は、凛と咲き誇る椿の花にとても良く似ている）

総司は毎日見ても飽きる事が無い彼女の美しさを思い出し、その口元をほころばせた。

「急げよ。せっかく作った時間がもったいない……」

運転手を急かしながら、目は窓の外を、心は椿の姿を追う。

椿の華を、この手に取りたくて堪らない。

この手の中で、艶やかに咲かせてみたい、と彼は思わずには居られない。

彼が、こんなにも女性を気に掛けるのは、生まれて初めてなのだ……。

椿姫・7　『本音』

「なぁ、椿ちゃん、まだ帰ってきてないの？」
部屋へ入ってくるなりそう訊いてきた大介を、一は首を傾げ怪訝な顔で見た。
「何だ、大介。お前は椿目当てでウチへ来ているのか？　彼女に言いつけるぞ」
「やめてくれよー。やだなぁ」
他人ならちょっとビクついてしまいそうな、一の怪訝な目も何のその。大介は軽くかわして、手に持っていた茶色の紙袋を顔の前で振ってみせる。
「お土産買ってきたから、あげようと思ってたんだけどさ」
「土産？」
「うん」
大介はニコッと笑うと、土産などという珍しい物を持参した幼馴染を不思議そうに眺める一の前で、その包みを開け始める。
ガッシリとしたイタリア製ローテーブルのガラス天板の上に、そこには似つかわしくないような物が袋の中から姿を露わした。

「……何だ？　これは」
一の顔が更に怪訝さを増す。
「駄菓子屋さんのパイプチョコ。ほらっ、一にもやるっ」
パイプの形をした柔らかい容器に中に、トロッとしたチョコレートが入っているお菓子だ。駄菓子屋でよく見る商品だが、もちろん一は知らない。
椅子に腰掛け、脚を組んでいた一の膝に、その未体験の食物がポトッと落ちる。一はそれを指で摘んでしげしげと眺めた。

「大分前にさ、わなげチョコを珍しそうに食べていた顔が可愛かったなぁ、って思い出しちゃって。こんなのも知らないんだろうなぁって思ってさ。買ってきたんだ」
「私の妹は、珍しい物を食べていなくても可愛いぞ」
真面目な顔でそう言う一は、何だかんだとからかっても、椿をとても可愛がっている兄だ。
「だからさー、その可愛い顔が見たくてさ。何だか、椿ちゃんが可愛い顔して笑っていると、嬉しいんだよ僕」
「で？　その顔を見る為に、餌を用意してきたって訳か？」
「たとえが悪いよ、一」
（犬や猫じゃないんだから！）
一の例えに呆れつつ、大介は椿が聞いたら泣いてしまいそうな台詞をその口から出した。
「僕は兄弟が居ないからさ。本当に椿ちゃんは妹みたいで可愛いんだよ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お帰りなさい。椿さん」
（――この人……。また来ている）
「椿さん！　ご挨拶は？！」
（――そうおっしゃられましてもお母様……。私、午前中も学校でこの方とお会いしていますのよ？）
「ごきげんよう。辻川様」

不平不満は心の中で呟き、椿はにっこりと微笑む。
客間で母を話し相手にくつろいでいた総司の姿を見て、椿は正直、挨拶をするのも面倒だった。

毎日毎日やって来る総司。
それも家と学校両方に。もちろん今日だって、午前中に十分間だけ学校で顔を合わせているのだ。
家へ帰ってきて迎えの車から降りた瞬間、椿は思わず足が止まった。
立派な黒塗りのベンツが、当然のように玄関前に停まっていたからだ。
（やっぱり、また来ているわ）
少々予想はしていたので、諦めの気持ちも入ってはいたのだが……。

「制服のままお相手させて頂くのも失礼ですもの。着替えてまいります。お待ち頂けるかしら」
そう言いながら、椿は後ろに控える秘書を見る。時々腕時計を見はするが黙って立っているところを見ると、今日は少し時間に余裕があるようだ。
それでも椿は、にっこり笑って牽制した。
「お待ち頂けないようでしたら……」
（――帰っても良いですよ……）
その微笑みは語る。

「いいえ。一時間でも二時間でも、お待ちしていますよ」
にっこりと微笑み返して応える総司。
「私のお相手をして頂ける前のお着替えに、一時間もかけて頂けるなど、この上ない幸せですよ。それだけ私に心を掛けてくれている

証拠だ」

（――ちゃんと戻っていらっしゃるまで、待っていますよ）

その微笑みは語り返す。

一時間待つ、と聞いて、後ろの秘書は一瞬驚いた顔をするが、実際は着替えに一時間など掛からないだろう。

「解かりました。殿方をお待たせする失礼を、お許し下さいませ」

椿は笑顔で頭を下げる。下げた瞬間、その美しい表情はムッと渋い顔に変わるが、再び顔を上げた時、それは再度微笑みに変わっていた。

危なっかしくて見ていられない、とでも言いたげな母親にちょっと会釈をして、椿は客間を出る。

口には出さないが両親は「もしかしたら椿が辻川様の花嫁候補に入っているのでは……」という思いがあるようだ。これだけ足しげく通って来るのだ。そう思うのも無理はないだろう。

「変に期待されても……困るわよ」

椿は正直、気が重い……。

「失礼な娘で、本当に申し訳ありません」
母親は取り繕うように笑顔を作り、総司に詫びた。
「お待たせしているというのに、また更にお待たせするような事を」
総司が気分を害しているのではないかと、母親はおろおろする。
制服だって言ってみれば学生の正装だ。あのままここへ座って総司の相手をしたとて、何の不都合も無いだろう。
それをわざわざ「着替えてくる」と言って、再び待たせるような事をしたのだから。
しかし、それを不安に思う母親に、総司は軽く笑って見せる。
「いいえ。お気になさらず。私は少しも気になどしてはおりませんよ。少しくらい待たされるほうが、会えた時の喜びも増すという物です」
総司の言葉に、母親は胸を撫で下ろした。ここまで好意的にしてもらえると、「椿が辻川様の花嫁候補になっているのでは？」という思いも更に大きくなってしまいそうだ。
遠回しに訊ねてみようかとも思うのだが、もしこれが単に彼の気まぐれ等だとしたら、かえって失礼に当たってしまう。
訊きたいが訊けない。娘を持つ母親としては気になって仕方がないところだ。

「ひとつ……、お訊きしたいのですが……」
総司は背もたれに凭れ掛かると、胸の上で両手を組み、何となく気になっていた事を訊ねた。
「先ほどこちらへ来た時、見知らぬ青年を見かけました。ご子息ではないでしょうし、使用人風でもなかった。……彼は、どなたですか？」

「それならきっと、一の親友ですわ。同じ大学なので、よく家にも来るのですよ」
「お兄様のご親友？　少々タイプが違うご親友をお持ちだ。どちらかといえば穏やかな雰囲気の青年でしたが……」
総司は客間に通される間、階段からジッと自分を見ていた青年を思い出していた。
自分もそうだが、一にも冷たい雰囲気の取っ付きにくさがある。しかし、外見の雰囲気からあの青年には無かった。

（“あの”兄上に、あんな、ちょっと押したら倒れてしまいそうなヤワそうな男が、親友で居られる物なのだろうか？）

自分の事を棚に上げて、少々総司は失礼な事を考える。
総司が見たのは、間違いなく大介だろう。それを察した母親は、口元に手を当てて小さく笑った。
「幼馴染ですのよ。気心が知れているとでも言うのでしょうか？大介さんも息子には物怖じするところが無くて、とっても良い方ですわ。本当。あの息子と付き合っていけるのですもの。大人しい方ですけど、芯の強い方だと思っていますのよ」
母親の話から、青年が「大介」という名前である事を知った総司は、その名を気にはしていない素振りで頭の中へ焼付けた。

「では……椿さんの、幼馴染でもあるわけだ・・…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ああ……面倒……」
総司が聞いたら落胆してしまいそうな言葉を呟きながら、椿は部

屋へ戻るために階段を上り始めた。
今日は学校で出された課題をこなしたら、購入したが読んでいなかった新書に手を付けようかと思っていたのだ。しかしこれから、約一時間程度は総司の相手で潰れるだろう。
そう思うと気が重い。
椿は別に、総司を嫌っている訳ではない。
他から恐れられ、一見本当に怖い雰囲気のある総司だが、椿と居る時はいつも紳士的だ。
話も楽しいし、色々と気も遣ってくれる。十代の後半に外国で留学生活をしていたせいか、女性に対する扱いは見事な物だ。

（見かけより、決して冷たい人じゃないわ。特に「怖い」　と思った事も無いし。気難しくて怖い雰囲気なら、お兄様の方が上よ。きっと）

なんだかんだ言っても“兄贔屓”の椿。こんな方面でも兄を総司の上に置くが、果たして上に置かれて嬉しい比較なのかどうかは謎だろう。

嫌っては居ないのに何故気が重いのか……。
それは、総司が何故自分の元に通って来ているのかが、いまいち良く解からないからだ。

――女性に怒鳴られたのは、初めてです。

椿は始めて会った日、総司が自分に言った言葉を思い出す。
考えてみれば総司に意見出来る女性など居ないだろうし、それどころか女性が怒鳴りつけるなど、天地がひっくり返っても考えられない事だったに違いない。

言うなれば、椿は初めてそれをした女性、という事になる。
（辻川様は、そんな私が物珍しいだけよ。初めて口答えをした私を、面白そうだと思っているだけ……）
「だからって……。毎日は……」
階段を上りきり、椿はハァッと大きな溜息をついた。

椿姫・9　『恨み言』

「どうしたの？」
「きゃっ！」
椿は反射的に小さな悲鳴を上げて、一歩足を引いた。溜息が出てしまうような気分で階段を上がりきったところで、いきなり何者かが彼女の顔を覗き込んだのだ。
総司の事を考えながら歩いていたので、椿も少々呆っとしていたし、足元を見ながら階段を上がっていたので、上りきった場所に誰かが立っていた事に気が付けなかった。
「階段上がって疲れたの？　ダメだぞ。まだ高校生だろ？」
そう言って背筋を伸ばし、椿に笑顔を向けたのは大介だった。
「だ……大介さん……」
少々憂鬱になりかかっていたところへ、いきなり恋焦がれる男性の出現。椿の心臓は跳ね上がり、頬の温度も上がる。
普通ならばもちろん、大介に会えて嬉しい。しかし椿は、逆に不安に襲われた。
（いつから見ていたのだろう？）
溜息をついてしまったところはもちろん見ていただろう。つまらなそうにしている顔を見られてしまった。変な表情はしていなかっただろうか？

「ど……どうしたのですか？　平日の夕方に……。お珍しいっっ」
よりによって大介が来ている時にそんな顔をしてしまっていた事が、椿は少々悔しい。
「あれ？　来ちゃダメ？」
動揺を顔に出さないようにと頑張る椿に、大介は笑顔で揚げ足を

取る。

「来てはいけないなんて、言ってはいませんっ。もぅっ、いつからそんな意地悪な事をおっしゃるようになったのですか？　それともお兄様の意地悪がうつったのかしら？」

椿は特に一を「意地悪だ」と本気で思っている訳ではない。大好きな兄だからこそ、ついつい利いてしまう「憎まれ口」というやつだ。

しかし大介は、椿が気分を悪くしたのかと思い「ごめんごめん」と苦笑いをして、彼女の頭をポンポンッと叩くように撫でた。

その心地良さに、思わず椿の表情が緩む。

一もよく椿を子供扱いして、同じように頭をポンポンッと撫でる事がある。その時も照れくさいような嬉しさを感じるが、それとはまた違う、胸が高鳴る心地良さ。

それはやはり、思いを寄せる男性に触れられた事から来る物なのだろう。

「ごめんね。こんな事したら怒られちゃうね？　子供扱いしているみたいで。椿ちゃんだって、もう高校三年生なのに」

「別に、怒りません……」

赤くなる頬を隠す為に横を向くが、結局は横顔を見られているので隠した事にはならないだろう。

怒らないとは言うものの、そろそろ本当に「子供扱い」は嫌がる年頃だ。特に彼女は女性なのだし失礼かもしれない。そう思った大介は手を引っ込めた。

（もう少し……。撫でていて欲しかったかも……）

椿は少しだけ、胸の中で我侭を呟いた。

「大介さんがいらっしゃっているという事は、お兄様もお帰りになっているのかしら?」
「一かい？　ああ。部屋の方にいるよ。僕はちょっと書庫を覗きに来たんだ」
「そうですか。ごゆっくり」
何気なくそう答えるが、椿の心は違う思いで渦巻き、ついには叫び声を上げる。

（辻川様！　どうして貴方、今日ここへいらっしゃっているの？！　せっかく大介さんがいらっしゃっているこの日に！　ああっ！　私も大介さんと一緒に書庫へ行きたい！！）

しかし、不可能だ。
今、客間では、椿が戻るのを「今か今か」　と待ちわびる総司がいるのだ。
ここで彼女が大介に着いて書庫へ行く訳にはいかない。

（学校でもお会いしたのに！　もぅ！　何だってこう毎日家にまでいらっしゃるのかしら?!）

大介と一緒に居られない事を悲観するより先に、その原因となっている総司を、椿は恨む。
椿の恨みのオーラで、客間の総司に寒気が走ったかどうかは定かではない。

「ところでさ、椿ちゃん」
大介は急に小声になると、その必要も無いのに口の横に手を添えて、コソコソ話をするような形を作る。
「さっき僕ね、どことなく雰囲気が一に似た男の人が客間に入って

行くのを見たんだけど……」
それは恐らく総司の事だろう。大介の口から総司の存在を出されて、椿はドキッとした。
「あの人ってさ、椿ちゃんの彼氏？」
（……かっ、彼氏って！　大介さん？！）

椿姫・１０　『誤解』

「ち……、違います！！」

もしもこの状況を総司が見たのなら、きっと彼は切なくなってしまったに違いない。

あの総司を悲しい気分にさせてしまうくらい、この時の椿が取った否定の態度は大きかったのだ。

その否定はあまりにも大袈裟で、訊いた大介本人がキョトンっとしてしまったほど……。

――椿ちゃんの、彼氏？

（違います！　違います！　違います、大介さん！　彼はただ、自分を怒ってくれた珍しい女を物珍しげに追いかけてくる、とても珍しい方だ、というだけです！）

少々失礼な言い回しを感じつつ、椿は心の中で叫ぶ。

大介はキョトンとした顔を笑顔に変え、クスクス笑い出した。

「違うのかい？　随分と立派な人だったよ？　秘書みたいな人を後ろに従えてさ。絶対そうだと思ったのに」

大介の口調に嫌味なところはない。椿だって大介が意地悪ではなく、純粋に質問してきたのだろうと言う事は解かっている。

そんなに必死になって否定しなくても良いだろうとは思うが、よりによって総司の事を誤解した上、大介が「彼氏？」　などと訊いてきたのだ。否定の態度も大きくなるだろう。

椿だって女の子だ。心に想い秘めている相手にそんな事を言われては悲しくなってしまう。

「どうして、そう思うのですか？」

立派な身なりの青年ならば、一の知人だと思ってもおかしくは無いはずだ。

何処か不安そうに椿が訊くと、大介の答えはすぐに返ってきた。

「ん、実はね、椿ちゃんのお母さんが『椿ももうすぐ戻りますから』って言ってるのを聞いちゃったんだ。ちょうど階段の所で見たんだけどさ。一瞬、あの男の人に睨まれた様な気がしてドキッとしたなぁ。でも、一よりは強面じゃないね。彼」

さりげなく親友をからかい、それから大介の声は少々沈んだ、

「それに……、椿ちゃんも、もぅ十八歳だし……」

その声は遠慮気味なトーンを含み、彼が持ついつもの明るさを感じさせない。

「女の子だし。もうそろそろ、そういった将来の相手を決められてもおかしくない歳なんだろうな……って思って。でも、椿ちゃんは綺麗だし器量良しだし、きっと、立派なお家にお嫁に行くんだろうね」

椿は言葉が出てこなかった。

声を出そうとしたら、確実にその声は震えてしまいそうだ。

椿だって、解かっている。

葉山家は、代々続く製薬会社を営む家系。老舗大企業というような安定した肩書きを持つ家だ。

そんな家に生まれたからには、それなりの目的を持って、それなりの家へ嫁がされる。そんな事は、幼い頃から椿自身が自覚している事なのだ。

――きっと、立派な家にお嫁に行くんだろうね。

しかし、その事実を大介の口から聞かされると、とても胸が痛い。

好きな人の口から、自分がお嫁に行く話をされる。

それが、どんなに辛い哀しみを伴うものか……。

しかし椿が辛い思いをしても、大介を責める事は出来ない。無理も無い事なのだ。大介は椿の気持ちなど知らないのだから。

さっき口にした、「きっと立派な家に……」という言葉だって、彼女を褒める意味で口にしただけだ。

大介には、すでに心に決めた人が居る。

それも、出会ってから三年目になる今年の春、大介はその女性と婚約まで交わしてしまった。

どんなに想っても、その想いは通じる物ではないし、自分の立場から言っても、そんな事をしてはいけない。

仮に「好きだ」　と告白しても、手を差し伸べてくれる人ではない。

そんな事、椿は痛いくらいに解かっている。

しかし……。

その事実を大介の口から聞かされるのは、とても悲しく辛い。

椿はだんだんと泣きたい気分になってきた。

「お嫁になんて……行きません」

幼い頃から、優しくて明るい大介が大好きだった。

ずっと、ずっと、好きだったのに……。

どうして自分はそれを口に出してはいけないのだろう?

口に出来ていれば、もしかしたら想いを受け取ってもらえていたかもしれないのに。

それが出来なかったばっかりに、いつの間にか自分が好きな人は、

本当に手の届かない、届いてはいけない人になってしまったのだ。

胸の中に湧き上がる、悔しさと切なさ。

その思いは、椿に口にしてはいけない言葉を、口にさせた。

「私は、大介さんが好きです。……だから、お嫁になんて、行きません……」

椿姫・11　『告白』

「僕も椿ちゃんが好きだよ」
その答えは、予想出来た答えだった。
そして、その次に来る言葉も。
「僕は兄弟が居ないから、椿ちゃんは本当に可愛いと思うし」
そう言って、椿の想い人はにっこりと柔らかい微笑をくれる。
優しく、罪の無い笑顔で。
「本当に、椿ちゃんみたいな妹が居たら鼻が高いね」

何よりも例えられたくない物に椿を例えてしまった大介は、それによって、彼女がどれだけ傷付いてしまったのかに気付けない。

“妹”好きな人に、一番例えられたくは無い者ではないだろうか。
大介を見ていたらあまりにも切なくて、その切なさに負けて出てしまった告白。「大介さんが好きです」
しかし、それに対して冒頭のような答えが返ってくるであろう事は、椿にも察しは付いていた。

「たまにさ、一が羨ましいよ。一と椿ちゃんは、何だかんだ言ってもとても仲が良いし。僕もあんな風に椿ちゃんに文句言われたりして、もっと仲良くなりたいって思うもんね」
「私は……仲良くさせて頂いているつもりですが……」
本当はもっともっと仲良くしたい、という気持ちはある。しかし、椿の性格上ベタベタする訳にもいかない。
「仲良く……、させて頂いているつもりなので……。『好きだ』と言わせて頂いたのですが……」
そんな言い訳はしなくても良いのに、椿は少々歯切れ悪く、先ほ

どの告白の言い訳をした。
自分は真面目に告白したのだが、とても軽くかわされてしまったせいか、何となく告白してしまった事が気恥ずかしいのだ。

大介は両膝に手を置くと、ちょっと屈んで正面から椿の顔を見た。真正面に大介の顔が来て椿の鼓動は跳ね上がる。
「でも、お嫁さんには行ったほうが良いな。だって、椿ちゃんみたいな美人さんの遺伝子を途絶えさせるのはもったいないだろう？」
「いっ……、嫌ですわ大介さんっ。『遺伝子』　なんて言い方っ」
深読みしすぎの感もあるが、椿は真っ赤になって大介から顔を逸らした。
大介としては「子供を作る」　というような言い方より、「遺伝子」　と言ったほうが遠回しでお嬢様には良いのでは？　と思ったのだが、どうやら椿にはこれでも生々しかったようだ。
しかしこれ以上優しく言う例えが無い。大介は、根本的にこういう話を椿のような女の子にしてはいけないのだろうと自分自身に解決を着け、身体を伸ばしながら頭に手をやった。
「ごめんごめん。どうも僕は一や椿ちゃんのように上品な言い回しが出来なくてさ。嫌な気分になった？」
「……いいえ。そんな事はありません……」
正直なところ、大介の言動で不愉快になった事など一度もない。屈託無く、人当たりが良く。優しくて。真面目。
第一、「あの」　一と幼馴染として友達付き合いが出来るのだ。かなり出来た人間か、よっぽどの変人か、だろう。
椿的には、もちろん前論だが。

幼い頃からそうだった。大介と居ると、とても優しい気持になれる。
とても安らいだ気持になれる。
それはきっと、彼が持つ雰囲気から来る物なのだろう。

（……大介さんの婚約者の方も、同じように感じているのかしら）

そう考えてしまうと、椿はとても切なくなる。

大介の婚約者もきっと、彼と居ると優しい気持ちになれるのだろう。とても安らいだ気持ちになれるのだろう。

そんな大介が、とてもとても好きなのだろう。

大介といつも一緒に居られる女性。

自分が好きになった男性と、何の遠慮もしがらみも無く一緒に居られる。

それは、椿にとって、とても羨ましい事実だった。

椿には、そんな自由は無いのだから。

今だって、本当ならば大介のお供をして一緒に書庫まで行きたい。しかし、家の事や自分の立場を考えれば、椿はこれから総司の相手をしなければならないのだ。

椿はほんの少し、自分の身の上を恨んだ。

椿がいつまでも元気の無い複雑な表情をしているのを見て、自分が口にしてしまった「遺伝子」　のせいかと誤解した大介は、失礼かとは思いつつ、椿の頭をふんわりと撫でた。

「でも僕は、椿ちゃんが例え家の為に結婚するのだとしても、椿ちゃんが好きになれた人と結婚して欲しいな」

「え？」

大介の大きな手を頭に感じ、嬉しくなりながら椿は顔を上げる。

「少しでも好きになれた人と一緒に居られる方が、楽しいだろう？

だから、決められた人でもさ、“好きになれたら”結婚すれば良いんじゃないかな？　って思うんだ。もちろん、相手も椿ちゃんの事が好きである事が大前提だよ。――お互いが好きじゃなきゃ、一緒に居ても幸せじゃないもんね？」

椿姫・12　『失礼』

「すみません、辻川様！　本当に何とお詫びを申し上げて良いやら！」

一と椿の母、葉山麗子は、何度も深々と頭を下げた。

「こんなにもお待たせをして、その挙句、何のお相手も出来ず……」

麗子は言葉に詰まる。自分の娘が犯した無礼をどう繕ったら良い物か考えあぐねているのだ。

学校から帰った椿が、着替えると言って客間から姿を消し、すでに三十分が経っている。着替えなど十分程度で終えて来るだろうと思っていた総司だったが、それは甘い考えだったようだ。

「総司様……、そろそろ……」

秘書の焦った声が後ろから聞こえ、総司は自分に与えられた時間がもう無い事を悟った。これ以上ここに居る事は仕事に無理を与え、再び秘書達を悩ませてしまう事でしかない。

（まさか本当に着替えに一時間をかけるつもりだったのだろうか？　私が、着替え終わるまで一時間でも二時間でも待ちますと言った事を、真に受けたのではあるまいな？）

総司は少々苦笑いをしながら立ち上がった。

「申し訳ありませんが、仕事へ戻らなければならない時間になってしまったようです。椿さんとお話出来ないのは残念ですが、失礼させて頂きます」

これに驚いたのはもちろん麗子だった。戻って来るのが遅い椿を案じて、部屋まで呼びに行こうかと考えていた矢先だったのだから。

せっかく娘に会いに来てくれた男性。それも、「天下の辻川」と言われる辻川財閥の総帥。

娘にその人物の相手もさせず、帰してしまうという無礼。

「申し訳ございません。辻川様」

麗子は今日、数回目の謝罪を口にした。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

――例え決められた人でも、自分が好きになれたら、結婚すればいいと思うんだ。

笑顔で椿に向けられる大介の言葉は、重く重く、彼女の心に響いた。

――椿ちゃんが好きになれた人と、結婚して欲しいな。

椿が好きなのは大介だ。

しかし、いくら好きでも彼と結ばれるのは叶わぬ夢。

椿を気遣って出される言葉を、彼女は嬉しく感じながらも、どこか辛い気持ちで聞いていた。

「なんてね」

大介は照れくさそうに頭へ手を当て、軽く笑い声を上げる。

「偉そうでごめんね。一になんて聞かれたら、鼻で笑われちゃうよ」

「いいえ、そんなこと……」

椿は慌てて首を左右に振ってから、恥ずかしそうな微笑を大介に向けた。

「有難うございます、大介さん。そんな風に考えて頂けるなんて、とても嬉しいです」

大介に結婚の話を出されるのは辛いけれど、自分の事を気遣って考えてくれる気持ちがとても嬉しいのは確かだ。

切ないながらも、椿は幸せだった。

「椿さん？！」

その時、椿の背後に当たる階段の下から、母の慌てた事が聞こえた。

何だろうと後ろを振り返ると、階段の下で母が驚いた顔で自分を見上げる姿がある。そしてその前には、同じく立ち止まり椿を見上げる総司の姿。

総司の傍には、少々ソワソワした秘書も一緒だ。それを見て総司が仕事に戻る為に帰るのだ、と悟った椿は、一度大介を振り返り軽く頭を下げ、慌てて階段を下り始めた。

「辻川様？　……あの……、お帰りになるのですか？」

何という事だろう。大介との話に夢中で大分時間を使ってしまっていたようだ。総司はいつも仕事の合間などに出来た時間を使って椿に会いに来ているというのに、あまりにも待たせすぎてその時間が無くなってしまったのだろう。

「申し訳ありません……。私……」

総司の前へ進み出て困惑する椿を見て、彼は苦笑する。

着替えると言っていたはずの彼女はまだ制服姿。階段から見える二階の廊下に立っていたという事は、誰かと話しでもしていたのだろう。

一瞬椿から視線を逸らした総司は階段の上をチラッと見上げ、そこに一人の青年の姿を見つけた。そしてそこに立っている青年が、彼がここへ来た時に目にした、一と椿の幼馴染だという青年である

事を悟る。
　総司は大介の存在になど気付いてはいないかのように、椿へと微笑みかけた。
「いいえ、良いのですよ。こうして椿さんのお顔を拝見出来ただけで満足です。まぁ、本音を言えば少々残念ではありますが。……お話はまた、別の機会に……」
　謝る椿へそう告げると、総司は秘書に急かされながら葉山家を後にしたのだ。

　総司が乗った車を、椿は門の外まで見送った。

（私……、大変な失礼をしてしまったのではないのかしら……）

　不安な気持ちを、胸いっぱいに抱えながら。

椿姫・13　『訪問』

「総司様、夕食はどうなさいます？　総司様？」
二度ほど名前を呼ばれ、総司はやっと自分が呼ばれているのだという事に気付いた。
「あぁ、何だ？」
総司専用のベンツの後部座席で、流れる外の景色を眺めていた彼は、ルームミラーで自分の様子を伺い見ながら心配そうに声をかけてきた“お付き”が座る運転席へと目を向けた。
「夕食はどうされます？　食堂でされますか？　それともお部屋か書斎で？」
どうせ前の質問も聞いては居なかっただろう。そう感じた“お付き”の青年は、同じ意味の質問を繰り返す。
“お付き”とは、総司専用の従者のような者で、常に総司の命令で動く者たちの事だ。総司には、幼い頃から十人近くの“お付き”が付けられている。
今車を運転している青年もその一人。歳は総司よりも年上だが、主に移動の運転手を務めている、戸田という青年だ。
元気の無い表情をする主人を見て、戸田は総司の秘書から「今日は葉山家で空振りだった」という事を聞き、総司がご機嫌斜めじゃなきゃ良いけど……。と不安になっていた事を思い出す。
しかし、「ご機嫌斜め」それどころの話ではなかった。
総司は、彼らしくないくらい元気がない。
（葉山のご令嬢と話が出来なかったのが、そんなに応えているのだろうか？）

戸田が心の中で色々な詮索をしていると、総司は溜息交じりに返事を返す。
「食事はいらない。食欲が無い」
「しかし、秘書のほうから昼食をおとりになっていないと聞いています。時間は遅くなってしまいましたが夕食はおとり下さい。昨日も満足に食事をしていないではないですか」
戸田は少々咎めるような声を出した。

今日だけではないのだ。
総司はここ最近、食事の時間も惜しんで仕事を続けている。
朝から晩まで、ずっとだ。
そうして仕事を片付けて作った時間を、椿に会いに行く時間に当てている。

そんな努力を、椿は知らないのだが……。

「食欲が無い。気が向いたら食べる」
そう言って総司は、プイッと横を向き、窓の外に視線を戻す。
咎めるような声を出して総司の機嫌を損ねてしまったかな、と、戸田は諦め気味に溜息をついた。
これでは頼んでも夕食はとってもらえそうも無い。

（総司様が、こんなに女性に夢中になるなんて、初めてだな……）

時刻は二十一時。屋敷へ着いても、総司は書斎へ篭るのだろう。
片付けられる物を片付け、椿に会える時間を作るために。
いくらまだ若いとはいえ、こんな無理ばかりをしていたら身体に障る。せめて食事くらいは摂って欲しい。戸田がそう思い悩んでい

るうちに、屋敷の正門が見えてきた。
「おや？」
思わず声を上げてしまったのは、屋敷の前に見慣れない黒いＢＭＷが停まっていたからだ。
来客だろうか？　しかしそれなら中へ入れば良い事ではないか？
総司のベンツが近寄ってきたのを感じたのか、ＢＭＷの後部座席のドアが開き、一人の女性が降り立った。
何度かチラッと見た事があるその姿に、戸田は慌てた声を出す。
「つっ、総司様、総司様っっ！」
「何だ、戸田。みっともない。何を慌てて……」
戸田の慌てぶりに眉をひそめ前を向いた総司だが、戸田と同じく正門前に停まる車と、その車の前に立ち、総司のベンツを待つかのように視線を向けている女性を見て、思わず身を乗り出した。

「停めろ！　戸田！！」
言われなくても、すでに正門前。戸田が車を停めると、いつもはドアを開けてもらうまで待つというのに、総司は自分でドアを開け車の外へ飛び出した。

「椿さん？！」
慌てて飛び出した彼の前に立っていたのは、紛れも無く彼が恋焦がれる椿だったのだ。
（何故ここに……。いや、どうしてこんな時間に彼女がこんなところに立っているのだろう？）
総司は不思議に思うが、それと同時に椿がここに居る事が嬉しかった。
椿は、彼らしくない慌てようを見せる総司を特に笑う事も無く、逆に優しく微笑んで、綺麗な会釈をした。
「お仕事、お疲れ様でございます。辻川様」

「……椿さん……、貴女、どうしてここに……」
すると椿は顔を上げ、申し訳なさそうに総司を見たのだ。

「夕方は、大変失礼を致しました。せっかく来て頂いたのに、お相手もせずに帰らせてしまうなどと……。辻川様のご好意を無にしてしまうような事をしてしまいました事、本当に申し訳なく思っております」
「椿さん、まさか貴女、それを言う為にここへ……？」
夕方の事を持ち出した椿を「まさか」　の思いで見るが、その「まさか」　は大正解。椿はゆっくりと首を縦に振る。
「どうしても、直接お会いしてお詫びがしたかったのです」
「しかしこんな外で……。中へ入っていてくれれば良かったのに」
「辻川様に失礼をしたままの人間が、中へなどは入れませんわ」
「大体……、今日は早めですが、いつもはもっと仕事で帰りが遅くなる。ご連絡を頂ければ、もっと早く帰ってきたのに」
椿が自分に会いに来てくれた。
例えそれが「謝る為」　でも、総司の心は舞い上がった。
椿は首を左右に小さく振り、思い悩む儚い表情を持って無意識のうちに総司を魅了する。
「お帰りになるまでお待ちするつもりでした。……これ以上、私などの為に時間を割いて頂く訳には参りません。たとえ日付が変わろうとお待ちして、直接お詫びがしたかったのです」

そんな事を言われては、舞い上がるどころか興奮状態だ。
総司は、慎ましく身体の前で合わせられていた椿の両手を自分の手の中へ包み込むと、惹き込まれそうな彼女の目を見て笑った。

「では、お詫びとおっしゃるなら、少しだけ私にお付き合い頂けますか？　こんな所で女性を帰してしまっては、それこそ私が失礼だ。お茶の一杯だけ……、デザートもお付けしますが？　如何ですか？」

すると椿は、ニコッと笑って、やや鋭さの消えた総司の目を見詰め返した。

「お待ちしていたら少しお腹が空いてしまいました。デザートより軽食の方が嬉しいですわ」

ちょっと無邪気な笑顔を見せ、そう口に出す椿に総司はとても嬉しくなった。

「お任せ下さい。最高の物を用意させますよ」

椿の言葉に、喜んだのは総司だけではない。

そんな二人を見ていた戸田も、「これは、軽食なりとも食事を摂ってもらえそうだ」　と安堵したのだから。

椿姫・１４　『軽食』

「本当に、いつから待っていて下さったのですか？」
総司の質問に、椿は小さく肩を竦めて「フフッ」　と笑うだけだった。
またその仕草が、美しいイメージの椿にしてはとても可愛らしく、総司はさっきから彼女の仕草ひとつひとつから目が離せない。
「ナイショですっ」
ニッコリと微笑むその表情は、彼女が手に持った小さなサンドイッチさえも可愛らしく見せてしまう。

「夕方の失礼を詫びたいから」　と、椿が辻川邸の正門前で待っていてくれた事に、総司は豪く感動してしまった。
いつ帰って来るか分からない自分を、「帰ってくるまで」　と、中へも入らず、ずっと屋敷の外に停めた車の中で待っていてくれたのだ。
「待っていたらお腹が空いた」　という椿に合わせて、総司は軽食を用意させた。
自分こそあまり食欲は無かったが、食べる間だけでも“お詫び”に一緒にいてくれるのだ。食べない訳にはいかないだろう。

辻川邸の広い客間。この屋敷で数室ある客間の中で一番広く立派な部屋だ。
そこで総司と椿は二人きりで……。と、言いたいところだが、実際には飲み物を淹れ、食事の用意をする為に、お付きが三人ほど部屋の中に居る。

総司は、いつから椿が待っていてくれたのかを是非聞きたかった。
長く待たせてしまったのなら申し訳ないから、ではない。彼はとても嬉しかったのだ。「誰かが自分が帰ってくるのを待っていてくれた」という事が。
自己満足かもしれないが、恐らく椿が待っていてくれた時間が長ければ長いほど、その嬉しさは大きくなるだろう。意中の女性が、自分を待っていてくれたのだから……。
「どうしたら教えてくれますか？」
ティーカップを手に取りながら、総司は引き下がらない。
椿は指先で挟んでいた玉子サンドを、小さな唇の先で挟んだまま、自分と総司を隔てている大きく立派な象牙のテーブルの上に目を走らせた。
目の前には、スコーンやジャムやフルーツ。そしてお互いの目の前に、各個人用に用意されたサンドイッチ。
椿用の物は、総司より量も控えめでカットの仕方も小さい女性仕様だ。総司用はカットの仕方がやや大きめ。盛られた内容は、玉子サンドに野菜サンド。ローストビーフサンドなど。中身は同じ。
しかし、一つだけ違う事に椿は気付いた。

「それじゃぁ……」
椿は自分の皿から野菜サンドを一切れ取ると、身体を伸ばして総司の皿に置く。そして、総司の皿から同じ野菜サンドを一切れ取り上げた。
「ソレを食べたら、教えてあげます」
「……はぃ？」
総司は訳が分からず、目をぱちくりさせる。
同じサンドイッチ。違うのは大きさだけ。何があるというのだろう。
しかし総司は、椿が置いた分のサンドイッチを見てハッとした。

「辻川様は、トマトがお嫌いなのですか？」
「えっ……、あ……」
椿はニコッとしながら、総司の皿から取り上げた、総司用の野菜サンドを指で示す。
「私の野菜サンドにはトマトが入っていますわ。でも、辻川様の分には入っておりません。好き嫌いはいけません。辻川様、二十歳も過ぎていらっしゃるのですから」
「はぁ、まぁ、子供の頃から……あまり……」
総司はどうも気まずそうに口ごもる。
天下の辻川財閥総帥、「目で人を殺しながら仕事をこなす」とまで恐れられる辻川総司が、「トマトが苦手です」というのも、何とも間抜けな話ではないか？
「食べられない訳ではないのですが、……あまり、好きなほうではなくて……」
言い訳がましいと思いつつ、総司の口から出てくるのはどう聞いても“良い訳”だ。
「いけません。大人になってからの好き嫌いは、親になった時、子供にも影響を与える物なのですよ？　辻川様のお子様は、皆トマトがお嫌いになってしまうわ」
「……困りますか？」
「私だったら困ります。私はトマトが大好きですもの」
話の内容を深読みすると、何ともニヤケそうになってしまうが、椿にそんなだらしない顔を見せる訳にもいかない。第一お付きが三人も同じ部屋に居るのだ。意地でもいつもの自分と違う顔など見せる訳にはいかないではないか。
「そのサンドイッチを、ちゃんとトマトも含めて食べられたら、教えて差し上げます」
「そうですか……？」
総司は小さなサンドイッチを手に取り、中に挟まったプチトマト

ほどの大きさしかないトマトの欠片を睨み付けた。

正直、「嫌いだ」　と幼い頃に思い込んでから、十五年くらい口に入れた覚えは無い。

ずっとトマトを睨み付けている総司を見て、椿は立ち上がり身を乗り出した。

「何なら私、食べさせて差し上げましょうか？」

「いっ、いいえっっ、結構！」

本当なら「はい、是非！」　と言いたい所だ。しかし、お付きの目もあり、彼のプライドはそれを許さない。

総司は小さなパンの塊を一口で口の中に入れた。

トマトの味に耐えられなかったら、そのまま飲んでしまえ、そんな気持ちで一噛みする。

総司の口の動きが止まる。

その動作を見て、椿は微笑んだ。

「美味しいでしょう？」

笑い出してしまいたくなるくらい、決死の覚悟で噛んだ総司。

彼はまるで信じられない物を食べてしまったかのように口を動かし、ゴクリッと飲み込んだ。

「……美味しいです……」

我ながら呆然とした声を出してしまい、椿にクスッと笑われた。

「お小さい頃に『嫌いだ』　と決め付けて、どうせ今までお食べになった事など無かったのでしょう？　いつまでも味覚は子供ではありませんわ。子供の頃に嫌った物でも、大人になると美味しく感じるものです」

一度立ち上がった腰を下ろして、椿はちょっと申し訳なさそうな顔をする。

「騙してしまったみたいですが、お許しくださいませね？　辻川様はきっと注意を受けた事など無いのでしょうし、注意をする人も居なさそうですから。下手をすれば一生トマトの美味しさが分からないままになってしまいそうで……。生意気を言ってしまって、ごめんなさい」

「あ、いえ……、そんな……」

「最近、いらっしゃる度に思っていました。辻川様、ちょっとお痩せになったようですね？　お食事もそこそこにして、お仕事ばかりしていらっしゃるのではないのですか？　たとえ軽食でも、沢山食べて元気を付けて頂きたくて……。その為には、好き嫌いなんていけませんもの」

控えめに口に出す椿の話で、総司はやっと椿が「軽食が食べたい」と言ったのは、自分に付き合わせて食事を摂らせる為だった、という事に気付いた。

決して。自分が食べたいのではなく。総司の為に。

「有難うございます。……椿さん」

椿の心遣いが、総司はとても嬉しかった。

嬉しくて嬉しくて、椿への想いはどんどんと大きくなる一方だ。

そしてその想いは、彼に一つの決心をさせた。

椿に、プロポーズをしよう。……と。

椿姫・15　『帰宅』

「お帰り。椿」

家に帰った椿は、身体が震える位驚いた。

午前様になりそうな一歩手前の時間。葉山家へ戻った椿を出迎えたのは、兄の一だったのだ。

それも玄関を入ったすぐのところで、腕を組んで立っている。まるで今入ってくるのが解かっていたかのようだ。

結局辻川家には一時間以上もいて、長居をしてしまった。

椿と話し出した総司があまりにも楽しそうで、三十分か四十分で引き上げるつもりだった椿は、どうしても早々に「帰ります」の一言が口に出来なかったのだ。

「お兄様、どうし……」

一が出迎えてくれたのはとても嬉しいが、こんな時間に帰宅など、女性としてはしたないような気がして少々照れくさい。

どうしてこんな所に立っているのかを訊こうとした椿の横から、彼女を送ってここまでついて来た総司が口を出した。

「一さん、申し訳有りません。椿さんをこんな時間まで引き止めてしまって」

確かに良家の娘が帰宅をするような時間ではない。

総司は、椿が一に怒られてしまうとでも思ったのだろう。しかし一は、いつもは無表情なその顔に薄い微笑を作り、組んでいた腕を解いた。

「いいえ。元はといえば、失礼をしたのは椿のほうです。辻川様が謝られる事ではありませんよ」

「しかし……」
「ご安心下さい。帰宅時間の事で椿を叱る気などありません。叱らなければならないとすれば、貴方に失礼をしてしまった事くらいです」
「それはもう結構です。しばらく椿さんにお付き合い頂けて、私はとても楽しかった。お礼を言いたいくらいです」
「それは良かった」
そう言って更に一が微笑むと、納得してくれたと取ったのか、総司は椿の手を取り彼女を見詰めた。
「それでは椿さん。本当に楽しかった。有難う」
「いいえ。私の方こそ」
総司はニコッと笑い、手に取った椿の右手の甲に唇を寄せる。
「またいつか、貴女と楽しい時を過ごせる日を楽しみにしております」
そのまま敬愛の礼を示し、手を放すと一礼してドアの向こうへと消えた。

「お前が乗って行った車は帰ってきていたし、門の前にベンツが停まったのを見付けたのでな。多分お前が帰って来たのだろうと思ったのだ。どうだった？　辻川邸は」
一が再び腕を組み、椿を見ると、彼女は苦笑いをしながら玄関へ上がった。
「大きくて目が回りそう。絶対に迷子になるわ、あのお屋敷。客間まで通されたけれど、それだけで息切れがしそうな遠さよ」
それは少々大袈裟かもしれないが、敷地からしてもとにかく大きかった。
葉山家も大きいが、それの比ではない。正面から敷地内へ入って、屋敷前の正面ドアへ到着するまで車で五分はかかったような気がするのだ。

さすが、財閥……。その一言が、椿の正直な感想だろう。

「大介が、椿に謝りたいと言っていたぞ」

一の一言は、椿の苦笑いを消した。

「お客が来ていたのに、お前を引き止めてしまった。と言ってな。明日にでも、謝りに来ると言っていたよ」

「そんな……。大介さんのせいでは有りませんわ。私がのんびりとお話をさせて頂いていただけですもの」

椿はちょっと慌てた。大介に謝られるなどとんでもない。自分は彼と話が出来て、反対にとても楽しかったのだから。

「まぁとにかく、辻川様の気分を害さなくて良かったな。父上も安心される事だろう」

「え？」

椿は一瞬訊き返すが、すぐに口をつぐんだ。何と無く、自分が介入してはいけない分野のような気がしたのだ。

総司の気分と場合によっては、辻川側が葉山へ何らかの制裁を加える。そんな可能性が、無かった訳ではないのだろうから。

椿は改めて、自分がした失礼の重大性と、この兄にさえ気を遣わせる辻川財閥の権力に、冷汗を誘われた。

この件は一応の解決を見たが、これがきっかけで、総司の椿に対する想いは、止められない物に変わったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌日から二日間ほど、総司は椿の元を訪れなかった。

いつも通って来る人間が急に来なくなる。それは、どことなく妙な不安感を起こさせる物でもある。

仕事が忙しくなったのだろうか？　それともやはり先日の事が原因なのだろうか？

椿も心配にはなったが、何と無く自分から訊ねたりするのもおかしいような気がした。

「椿さん、すぐ客間の方へおいきなさい！」

母の麗子が、興奮した様子で椿へそう伝えに来たのは、総司が椿の元を訪れなくなって三日目の夜の事だった。

夕食後、部屋へ戻っていた椿の元へ麗子自らが彼女を呼びにきたのだ。

大切な来客の時に、挨拶へ行けと言われるのは良くある事だ。しかし、母自ら呼びに来るのは珍しい事だった。。

「失礼致します」

誰なのかは解からないが、一声かけてドアを開ける。

（まさか、またお見合い話では無いでしょうね？）

そう考えると少々ウンザリする。しかしそんな縁談話も、「辻川の総帥が、椿姫に目をかけている」　という噂のお陰で、最近パッタリと無くなっていた筈なのだが……。

軽く会釈をして顔を上げたその瞬間、椿は息を呑んだ。目の前に、視界全てを覆ってしまうほどの薔薇の花束が出現したのだ。

パタンッ……とドアが閉まり、あまりの驚きに、椿はドアに背をついて、茫然とその花束に見入ってしまった。

「ごきげんよう。椿さん」

そしてその花束が下がった所から顔を出したのは、総司だったのだ。

椿姫・16　『求婚』

「辻川様……」
椿は呆然とした声を出した。
突然現れた、視界を覆う赤い薔薇の花束。その薔薇が下がった所から顔を見せた総司。
あまりにも突飛な登場のしかたに、いつに無く彼の機嫌が良いという雰囲気が伺える。

「驚かれましたか？　申し訳有りません」
笑顔で謝罪をしながら、総司は両手いっぱいの花束を椿へと差し出す。
総司に花束を貰うのは初めてでは無い。家に来る時は大抵花束を抱えてくるのだから。
しかし今日の花束は特別大きかった。男である総司が両手で抱えていたのだ。椿の細腕では、両腕どころか胸の前に寄りかけなければ支えきれない大きさと重さだ。
「あ、有難うございます」
すぐにテーブルの上にでも置いてしまいたいが、それでも一度受け取るのが礼儀だろう。椿は両腕で抱き込む様に花束を受け取った。
ふわりっ、っと、何ともいえない薔薇の濃厚な香りが椿の鼻をくすぐる。思わずその香りに酔ってしまいそうな感覚に陥った時、その言葉は彼女の耳に響いた。

「結婚して下さい」

椿の動きは一瞬で止まる。

薔薇の香りに酔いかけていた気持ちも一気に醒めた。
今の声は総司だ。でも、総司が今の言葉を言ったのだろうか？
椿は解かりきった確認をする為に、総司を見上げた。

「あのパーティーでお会いした時から決めていました。私と結婚して下さい」

椿は切れ長の美しい目を数回瞬かせ、動揺しそうな気持を隠す為に、胸の下で抱えた花束に視線を落した。

（これは……プロポーズ？　辻川様が？　私に？）

――結婚して下さい。
総司の言葉が、クルクルと椿の頭の中で回る。
とてもではないが信じられないのだ。
総司が自分の元へ通って来るのを、もしかしたら自分をどうにかしようと下心があっての事では無いかと疑った事はあっても、まさか結婚を考えての事だとは思ってもみなかった。
椿は初対面の時に、総司に歯向かった娘だ。
総司のように身分もプライドも高い男が、そんな女を妻にしようなどとは思わないだろう。
椿に会いに来るのは、そんな自分に逆らう娘が面白いだけ。ずっとそう思っていた。

（今、返事をしなくてはいけないの？　こういう場合は、男性に恥をかかせてはいけない物なのだろうけど……）

どんなに礼儀作法を網羅していようと、プロポーズをされた時の作法までは習得してはいない。
戸惑う椿を見ながら、総司はクスッと笑った。

大きな花束を抱えた椿。
もちろん両手の自由は利かない。
それを利用するように、総司は椿の顎に指をかけ顔を上げさせると、戸惑いうっすらと頬を染めたその表情にしばし見惚れ、それから彼女の綺麗な唇に軽く自分の唇を合わせた。

見た目にも解かるくらい、大きく椿の身体が飛び上がるように震える。
その驚きは大きく、薔薇の花びらが数枚、床に落ちてしまったほどだ。

椿が驚いた事は総司にも伝わったはずなのに、彼は唇を離さない。
それは重ねるだけの行為でありながらも、相手の吐息と熱を感じる事が出来る丁寧な口付けだ。

しかし、男性と唇を重ねるなど、椿には初めての経験。
あまりにも突然の総司の行動に、椿は全身が固まってしまった。

「椿さん……」
唇を離しながら、総司は繰り返す。

「結婚して下さい。……私と」

椿姫・17　『拒絶』

「いきなり、失礼しました」
本当にすまないと思っているのかは不明だ。
しかし総司は、何の予告も無くいきなり椿の唇に触れた事を詫びた。
もっとも、本気になれば総司が何をしようと、椿には文句などは言えない。家柄の上下関係的に、総司は誰の責めも受けない位置に居るのだから。

そのせいだろう。彼には自信があった。
絶対に断られるはずなど無いという自信が。

「迷う事など無いでしょう？」
総司は、頬を染めて戸惑ったままで居る椿の顔を見詰めた。
いつもは凛とした態度で、美しい表情を見せてくれる彼女。
しかし今はどうだろう？
総司に受けた唇付(くちづ)けの一つで、身動きも出来なくなってしまっているではないか。今まで見た事も無い、美しく何処か可愛らしい表情に、総司は彼女から目が離せず見惚れたままだ。
「家同士で考えたって、これは滅多に無い良縁です。断る理由など無いはずですよ？　ご両親には先にお話をしておきました。とても喜んで下さいましたよ。後は貴女のお返事だけなのですが？」

辻川財閥総帥からの求婚だ。親が喜ばないはずは無い。
葉山側からしてみれば、もし椿が辻川へ嫁げば辻川財閥と親戚関係が出来る。そうなれば、企業としての安泰は約束されたようなも

の。
辻川側にしてみても、老舗大企業といわれ業績も安定している葉山製薬の娘となれば、何の問題も無いだろう。世間体的にも都合は良い。

「家？」
椿の表情が、ピクリッと動く。
「家の為なのですか？」
今まで見せていた可愛らしい表情が、徐々に訝しげなものに変わってきた。
眉を少しずつ吊り上げながら、椿は問う。
「家の為に？　私と？」

そこでやっと総司は、自分の言い方が少々いけなかった事に気付いた。
総司は椿が好きだ。
初めて会ったその瞬間に、椿に惹かれた。
何度も会い、話すうちに、その思いは募り、毎日椿の事しか考えられなくなった。
しかし、彼は昔から“人の下に出る”などという行為をした事が無い。自分が“望む”“望まない”に関わらず、周囲が全てを根回ししてくれるような身分だったのだから。
こういう場合は、自分の気持ちを先にハッキリと伝えるべきだろう。だが、それより先に、彼は「断られるはずが無い」　という当然の思い込みで、家同士の話しを出してしまった。

彼が椿を想っている事は間違いないのに。
これでは“気持ち”は伝わらない。

「もちろん。家の為だけなどでは……」

総司は言葉を訂正しようとした。しかし、すぐにそれは手遅れである事を悟る。

椿に渡した大きな薔薇の花束。それを彼女は、勢いを付けて彼の腕の中へ押し戻したのだ。

総司にも負けない、鋭い視線とともに。

「お断りします」

厳しい声。これは、初めて出会った時、総司を叱責した声、そして目だ。

「椿さん？」

今のは聞き間違いか？　まさか自分の言葉を利き入れない人間など居るはずがない。

総司の胸には、椿の拒絶を否定する思いが湧き上がってきた。

しかし、目の前の彼女の視線は、間違いなく彼を拒絶している。

「政略結婚の駒になど、なりたくはありません！」

椿姫・18　『決意』

「家の為に結婚するなんて……私は嫌です」
椿の言葉は、半分本気で、半分は嘘だった。
「家の為に……自分の気持ちも全て殺して、……そんな事」
一企業を代々営む家に産まれた女なのだ。
その家の為に、いつかは利害関係を持った男性の元へ嫁ぐ事になるだろう。そんな覚悟は幼い頃から有った。
それが、老舗大企業と謳われる家に産まれた女の運命だと、そう思って生きてきたのだから。

葉山と辻川の婚姻は、お互いこれ以上は無いというくらいの良縁。
もちろん椿は、家の事を考え、会社の将来を考えれば、すぐにでも「はい」　と快く返事をしなければならないのだ。
しかし、今の彼女の心の中には、ある言葉が渦巻いていた。

――椿ちゃんが好きになれた人と、結婚して欲しいな。

大介の言葉だ。
いずれは家の為に結婚をしなければならないだろう椿に、彼女を元気付けるためにかけられた、大介の言葉だ。

――好きになれた人と一緒に居る方が、楽しいし幸せだろう？

椿が本当に思いを寄せているのが自分だとも気付かずに、大介は彼女にそう言った。
決して大介と一緒に居られる事は無いのに。
大介と幸せになる事は不可能なのに。

――もちろん相手が、椿ちゃんの事を好きなのが大前提だよ？

椿の幸せを思った大介が彼女にかけた言葉は、彼女にとってとても残酷で、そして優しすぎる物だった。

幼馴染ながら、妹のように可愛がってきた椿への望み。

彼女が幸せになる為に、大介から出された、彼の希望。

――椿ちゃんが、好きになれた人と……。

「申し訳有りませんが、辻川様」

椿は総司を睨み付ける。その目は初めて出会った時と同じ、総司にも負けない鋭い物。

「貴方のお気持ちには、お応え出来ません」

総司の表情がピクリッと動く。

今までずっと優しく椿を見詰めていたその目は、世間で恐れられる、ナイフのような冷たさを覗かせた。

それは何故だったのか……。

自分の言う事に従わない、椿に対してか。

それとも、これから椿を自分に振り向かせるための決意だったのか。

――好きになれた人と、結婚して欲しいな。

（大介さん……。あなたよりも好きになれる人が現れるまで。私は、どなたの元へも参りません。私が好きになれた人は、今はまだ、あなただけなのです）

椿は心の中に大介を想い、彼に向って話しかける。
（あなたよりも好きになれる人。それが、辻川様になるのか、他の誰かになるのか、今はまだ解かりません）

――その方が楽しいし、幸せだろう？

（あなたが言って下さった事を、せめてもの気持ちで守るのが、あなたが私に掛けて下さったお気持ちを少しでも守るのが、手の届かないあなたに対する、私の気持ちです。――あなたを好きで居続ける、……私の、気持ちです）

総司は両手で抱えていた花束を、床にバサリッと落とした。
重たい花束は床で崩れ、赤い花びらがその勢いで舞い飛ぶ。花びらが舞った瞬間、強い薔薇の香りが二人の間に立ち昇った。
すると総司は、いきなりその花束を足で踏みつけたのだ。
「何を……！」
椿は驚いて屈もうとしたが、その腕を総司が掴み彼女を引き寄せた。

「私は、諦めません」
再び唇が触れてしまいそうな近さで、総司が囁く。
その目は、一歩間違えば椿の身を切り裂こうとしているかのごとく、鋭く冷たい。
「貴女の気持ちを引く為なら、花だろうと人だろうと、私は平気で踏みつけてしまえるでしょう」
ナイフのような目で、総司は口元を上げる。
それはまるで、大仕事をする前に、駆け引きを考える男の表情にも感じられた。

「……ご自由に……」

しかし椿は、その目を怯む事無く受け止め、総司を睨み返したのだ。

「……貴方の、思うようにはなりません」

椿の心に、優しい声が響き渡る。

――椿ちゃんが、好きになれた人と。幸せに……。

それは、彼女がどんなに望んでも、手に入らない幸せ。

そんな切ない想いを、総司は知らない。

椿姫・19　『二年後』

「貴方の、思うようにはなりません」
総司のプロポーズを、そう言ってかわした椿。
政略結婚などする気は無いと、あそこまでキッパリと言い切ったのだ。「諦めない」　と、口にした総司が、いくら強引な男でも今までよりは大人しくなるだろう。
椿はそう思っていた。

しかし……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「椿さん、今日はケーキをお持ちしましたよ」
とても楽しそうな総司の声は、葉山家の玄関ホールいっぱいに響いた。
「当家に先日入れたばかりの菓子職人オリジナルです。フランスで幾つも賞を取った者でして、甘い物が苦手な私でも食べられます。正直なかなか美味いですよ。――ケーキは、お好きでしたよね？」
嬉しそうに口にしながら、出迎えに出てきてくれた椿にケーキが入っているらしい白い箱と、片腕に抱えていた花束を渡す。

（仕事でお疲れでしょうに……。何故この方はこうも元気なのかしら）
「有難うございます」

心の声とは反対に社交辞令の笑みを浮かべる椿に、総司はいつもの一言を口にした。

「今日もお美しいですね。花束が貴女の引き立て役になっていますよ」

口から出すべき人間を、台詞の方から選んでしまいそうな口説き文句。

そんな台詞を、総司は椿にプロポーズをしたあの日以降、よく口にする。この他にも色々とレパートリーはあるのだが、今日はこの台詞を選んだようだ。

「それは、恐れ入ります。――どうぞ」

しかし椿はそんな口説き文句に反応する事も無く、総司を客間へと促した。

総司が椿にプロポーズをしてから、二年近くが経っている。

椿もこの春、大学二年生になった。大学といっても短大なので、学生でいられるのも後一年だ。

普通の企業令嬢なら、卒業後はお見合いでもして嫁ぎ先を決めてしまうか、しばらくの間“花嫁修業”と称してすでに心得のある華道茶道に身を投じ、キリの良いところで良縁に身を任せる、というのが常識だ。しかし、椿の場合はどちらも選択出来ない。なんと言っても彼女は“天下の辻川財閥総帥”にプロポーズをされ、それをソデにしているという、親が脳卒中で倒れてしまいそうな実状を持っている。

総司との事がハッキリとしない限り、自分の未来など見えないのだ。

第一、十五の頃から毎日のように舞い込んでいた縁談の話が、辻川財閥総帥が“椿姫”に目を付けた、という噂が流れ出してからピタッと来なくなってしまっているのだから。

その噂を流したのも総司サイドの人間では無いかと思われる節がある。そう世間に思わせておけば、誰も椿に手出しをしようとは思わないだろう、そんな思惑が見え見えだ。

この二年間、総司の態度はまったく変わらない。

時間が許す限り、一日一回必ず椿に会いに来るところも相変わらずだ。

娘がプロポーズを断った事で、何か会社に制裁があるのではと危惧した両親だが、総司はそんな事はしなかった。

毎日椿に会い、言葉をかわす。それはすでに彼の日常のよう。しかしそれだけで、二人の間に特別な進展は何も無い。

「お仕事は如何ですか、辻川様？」

「相変わらずですよ。あっ、明後日からイタリアの方へ参ります。四日間ほど貴女の顔が見られなくなるので寂しいですよ」

客室で二人だけの時間を過ごしながら、総司は遠慮する事無く椿にアプローチをかける。

椿も特に総司を避ける訳でもない。今まで通り「少し親しい知人」程度の付き合いをしている。総司としては、もう少し親しくなりたいのだが、それを許してくれる雰囲気はもちろん無い。

彼としては、正直それが一番辛いところなのかもしれない。

二年前プロポーズをした時に、いきなり唇を奪うという暴挙に及んだ総司ではあったが、それ以降そういった行動に出る事もなかった。

二十五歳の青年にはあまり嬉しくは無い、手も握らない清い関係が続いているのだ。

「せっかくイタリア方面へ出向くのですから、貴女に似合いそうなドレスか何かを仕入れてこようかと考えたのですが。着て頂けますか？」

総司はちょっと期待をこめて言葉を含ませた。
男性が女性に洋服を贈るという事は、「それを脱がす事が前提」などという俗説がある。少々それに引っ掛けてみたのだが。
「あら？　有難うございます、嬉しいですわ。せっかくなので頂きますが、着るかどうかは解かりません。宜しいでしょうか？」
椿はいわゆる“お嬢様育ち”の典型だ。頭は良いがそのテの俗説などに縁は無い。
俗説的に考えれば「貴方のものになるかどうかは解かりません」という意味合い。今の状況とまったく同じだ。
総司は少々渋い顔をしながら出されたコーヒーに口をつける。そんな総司を見ながら、椿はクスッと笑った。

まったく進展の無い二人。
特別変化の無い日常は、二人の間にも変化を起こさないまま。

しかし、椿の周囲にひとつの変化が起こる事になった。

兄の一に、結婚話が持ち上がったのだ。

椿姫・１９　『二年後』（後書き）

＊「活動報告」の方に５／２２～６／４まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
　この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。
ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／２００２０４／

　沢山の拍手を、いつも有難うございます！

椿姫・２０　『真相』

「ずいぶんと急なお話でしたのね？」
椿はその日、少々早めに仕事から戻った一の部屋を、彼が部屋へ入った途端、早々に訪ねた。
早め、とはいっても二十二時は回っている。しかしある事を一から聞こうと、日付が変わる時間まで待つ覚悟でいた椿にとっては、都合が良かった。
「お兄様に結婚のお話が進んでいたなんて、全然知りませんでしたわ。私だけ、どうして教えて下さらなかったのですか？」

一の結婚話が決まった。
椿がそれを知らされたのは、今日の夕食の席で、母からだった。
それもその相手の女性は、二週間後この家へ来るという。
いったいどういう事だろう？
葉山家で一緒に暮らす、という事は入籍をして、という事だろう。
そんなところまで話は進んでいたのだろうか？　椿が何一つ知らされないまま。

「どちらのお嬢様なの？　何番目にお兄様に付いた秘書の方かしら？　それとも今付いていらっしゃる方？」
一は今、家業である葉山製薬の専務という役職に就いている。当然、秘書もいるのだ。
椿の口調には、ありありと棘が刺さっていて、それを浴びせられた一は耳が痛い。
着替えをするためにネクタイを外していた彼は、椿に気付かれないよう小さく溜息をついた。

「二週間後には家へいらっしゃるのですってね？　すると結婚式も二週間後？　うるさい小姑が口を挟まないうちにサッサと進めたってところなのかしら」

椿の機嫌が悪い原因はひとつだけだ。

そんな大切な話を、自分だけが教えてもらっていなかった。というところにある。

一が見合いをした様子もないし、女性のところへ通っているような気配も無かった。そうすると、彼に付けられている女性秘書くらいしか相手としては思い当らない。

兄の一は、仕事には興味はあるが人間にはあまり興味の無い変わり者だ。はっきり言って女性にもあまり興味は無い。それでは病気か何か違う性趣向の持ち主かと疑われそうだが、彼はノーマルだ。それを証拠に、昔から年に一、二回“男の本能”が動くような事もあるらしい。

二十四歳になった今でもそれは変わらず、幼馴染の大介からはその時期を「発情期」と呼ばれてからかわれる。跡取りである彼がコレでは、世襲制である葉山製薬の危機だ。

そう考えた父親は、三ヶ月に一回の割合で、彼に付けている女性秘書を変えている。彼に付けられる秘書は良家の子女ばかりだ。あわよくばその中の誰かと……、そんな気持ちが有っての事だった。

その中の誰かとの結婚話が決まったのだろうか？　それならそれでも良いが、自分だけが知らされていなかったのはやはり椿的には気分が悪い。

「悪いがな、椿。お前だけが知らされていなかった訳ではないぞ」

いつもならば、男性が目の前で着替えているのを黙って見ているなどという失礼は、例え相手が父だろうと兄だろうとした事は無い椿だが、今の怒りに任せ、一が上から下まで部屋着に着替えるのを

全て目の前で見てしまった。
ストライプのシャツにベージュのカジュアルパンツ。スーツよりは大分ラフな格好であるのに、彼が着るとこれからまた出かけるのだろうかと思ってしまうほど決まる。
怒っていたにも関わらず、その姿に少々見惚れ気味になる椿は、やはり今でもブラコン気味なところがあるようだ。
「結婚が決まったのは、昨日だ」
「……はい？」
椿は眉を寄せて小首を傾げる。

「買収が決まった村の地主の娘だ。父上がその娘を私の妻に迎えると決めた。私が決めた訳ではない」
「なっ、何ですの……それ……」
訳が分からず不可解な表情をする椿をチラリと見てから、一はガラステーブルの上に置かれたワインのボトルを取ってグラスに注いだ。
グラスを手にして椿へ掲げてみせる。
「飲むか？　白なら飲めるだろう？」
「お兄様のお酒のお相手をしに来ているのではありませんっっっ」
どうやら更に怒りを煽ってしまったようだ。一は苦笑いをして説明を始めた。
「要は、借金の肩代わりをして村を買い取るのと同時に、娘も買い取るようなものだ。言い方は悪いがな。それが決まったのが昨日。二週間後には家へ迎えると決まったのも昨日。だから、決してお前だけを仲間はずれにした訳ではないぞ？」
椿だけに知らせていなかった訳ではないと、疎外感を感じている椿に一は気を遣う。
「でも、それなら急だし……お式とかは……」
女性としてやはり気になるのはその辺りなのだろう。
困惑する妹を目の前に、一はグラスを揺らしながらワインの香り

を堪能しご機嫌だ。

「まだ式は挙げられない」
「何故ですか？」
「歳が合わない」
「歳？」
「まだ十四歳だ。入籍は二年後だ」

椿は言葉を失う。
いや、絶句する。
出すべき言葉など見つからない。

「今から家へと引き取って、二年間勉強をさせる。それ相応の作法と知識くらいは無ければ、妻として私も困るからな」
香りを楽しんだ白ワインを一口煽ってご機嫌な彼には、椿が柳眉を逆立て握った両手を震わせている事など気付かない。
「お兄様……」
「ん？」
妹のその形相に気付いた時、彼が本日仕事と安らぎの共にしようとしていた白ワインは、彼女によって床に叩きつけられていた。
もちろん毛足の長い絨毯の上。瓶こそ割れはしなかったが、中身はその繊維の中へどんどんと吸い込まれてゆく。

「おいおい、椿」
もったいないとでも言いたげに残念そうな声をあげ、一は瓶を拾い上げて椿を見る。が、そこで彼の表情は固まった。
椿が、それは恐ろしい顔で一を睨み付けている。美人である分、それは一見とても美しい表情ではあるが、美しい分恐ろしくもある。
「私……、失礼いたします……」
椿はそう言って踵を返すと、妹には怒られる、今夜のお楽しみだ

ったワインは零される、等で散々な一を振り返る事も無く、早足で部屋を出て行った。

部屋を出てから、ドアの前で椿は立ち竦む。

「……信じられない……」

椿は兄の、この異常な状態から発生した結婚話に、困惑する心を抑えられないのだ。

椿姫・２１　『不機嫌』

「ご機嫌な斜めですか？　椿さん」
総司が椿に会うのは久し振りだった。
久し振りなのだから、どうせなら笑顔で迎えて欲しかったのだが、彼女は口元にだけ笑みを浮かべる偽笑を持って彼を迎えたのだ。
「あら？　そう見えますか？」
見えるどころか声まで険悪だ。
総司は苦笑いを浮かべ、「見えますよ」　と一言口にして、目の前に置かれたコーヒーカップに手を伸ばした。

いつも通される葉山家の客間。
総司がここへ入るのは五日ぶりだ。彼は昨日まで、仕事でイタリアへ行っていたのだから。
渡伊する前に言った事は冗談ではなく、総司はお土産にと、椿へドレスを一着プレゼントした。“脱がせる事が前提”うんぬん、の俗説を実行した訳ではない、という事にしておこう。

凛とした中にも清純なイメージが強い椿は、どちらかと言えば淡い色の洋服が多い。
しかし、総司がプレゼントしたのは深紅のドレス。
正しく椿の花の如き色彩を放つ、胸元から肩が開いたローブデ・コルテ調の、椿にしては少々大胆なドレスだった。
いつもの椿ならば、気を遣い嘘ででも「素敵なドレスを有難うございます。このように大人っぽいドレス、私に着こなせるかどうか、不安ですわ」　と笑顔で礼を言う事だろう。
しかし今日はそんな気も起こらないらしく、「わざわざ有難うございます」　の一言で終わってしまった。

「お兄様のご結婚の件ですか？」
カップをソーサーに戻して総司がそう口にすると、椿は一瞬息を詰めた。
「ですが、おめでたい話ではないのですか？　何故そんなにご気分を悪くされているのですか？」
「……おかしいですわ……。こんな話」
テーブルの上には、総司に貰ったドレスの衣装ケースが置かれている。その上に広がる深紅のドレスはとても美しい。普通ならば目を奪われても不思議ではないのに、椿の心はそれどころではないのだ。
ドレスを見詰めながら、椿は心の中の憤りを口にした。

「会社が買い取る村の地主の娘だと聞きました。でも、まるで人身売買だわ」
「人身売買？」
「お金で、その娘さんを連れてくるのですよ？　村の借金を肩代わりして、その土地と一緒に娘さんも……。二週間後にはこの家へ連れて来ると言っています」
話しているうちに、椿は少々興奮してきたようだ。
？お金で人間を買った？その考えが、椿の頭から抜けないのだろう。

「お兄様が、そんな卑劣な事を……。人の気持ちも考えられないような事を了解なさるなんて……。いくらお父様の指示だからとはいえ……」
そして、彼女が一番ショックだったのは、一がその話を受け入れた事だ。
鉄仮面と言われようと、仕事にしか興味の無い変人と言われようと、椿は、頭が良く仕事が出来て、家族や社員を大切にする一を尊

敬しているし、妹としてそんな兄が大好きだ。
その兄が、女性をお金で買う行為を受け入れた。
それが、何よりもショックだ。

「それに、その娘さんだって、借金の代わりに見ず知らずの男性の妻にならなければならないなんて、可哀想だわ。……もしかしたら、心に決めた人が居たかもしれないのに……」
同じ女性として、どうしてもそんな事が気に掛かる。

借金の肩代わりついでに、見ず知らずの男の妻になる事を迫られた女性。
好きな人は居なかったのだろうか？
心に決めた人は居なかったのだろうか？
それを無理矢理引き裂いて連れて来るというのなら、あまりにも酷いではないか。

見ず知らずの女性の境遇に胸を痛める椿を見詰めていた総司だが、彼はフッと酷薄な表情で口元を上げる。
「……そんな人間は、居ませんよ……」
総司の重い口調は、椿の心を引き寄せた。
「桜花村地主の一人娘、斎音寺さくらには、心に決めた人間など居ようがありません。彼女は生まれてから一度も村を出たことが無く、学校へ行ったことも無い。十四年間、教育も全て屋敷の中で受けた完璧な籠の鳥だ。恋だの何だの、そんなものを感じられる境遇で育ってきては居ない」
「……辻川様？」
椿は不思議そうに総司を見た。
自分は村の名前も、娘の名前も知らなかった。おまけに娘の歳も口にしてはいない。それなのに何故、総司は知っているのだろう？

椿姫・22　『嫌味』

「葉山製薬に村を買い取るほどの大きな動きがあったとなれば、辻川の情報網がすぐにつかみます。村の買収が決まったその日に、イタリアに居た私の耳にも入りました」

総司は椿の心を読んだかのように、一の結婚話の経緯を知っている理由を口にした。

口角を上げ、どこか無慈悲にも見える総司に対抗するように、椿は柳眉を逆立て冷やかしを掛ける。

「家族の私にさえ知らされてはいなかった時に、貴方はすでにご存知だった、という訳ですわね？　流石は辻川財閥ですわね、とお褒めした方がよろしいかしら？」

「恐れ入ります。当然の事ですから称賛は無用。辻川の情報網に敵う物などありませんよ。あったならお目にかかりたいものだ。貴女が知らされる前に私が知っていても何の不思議も無い」

冷やかしに礼を入れ、総司は続ける。

「私は、その娘に敬意を払いたい気持ちです」

「敬意？」

椿の目元が和むことは無く、彼女は更に切れ長の目を半目に変えて、総司を睨め付けた。

「たかだか十四歳の身空で、家の為、村の為、我が身を投げ出したのです。一種、己の運命を受け入れたといってもいい」

「十四歳の少女が、することではありません。周囲の大人達に強要されたに決まっていますわ」

「斎音寺家は、古くは小さくとも城を構えた大名の流れを汲む、由緒正しい家柄。彼女は世も世ならお姫様ですよ。もちろん、それな

りの教育を受け、それなりに自分の身分的な立場、という物も自覚しているでしょう」

「身分的な立場？」

総司を睨め付ける椿の目にゾクリとくる色雅を感じながら、総司は楽しげに言葉を続ける。

「いずれはその“身分”に見合った結婚をしなければならないという自分の立場、ですよ。例えそれが『人身売買』と言われてしまうような結婚でもね。彼女は“家の為、村の為”を第一に考えなければならない女性だ。考えようでは立派なものでは有りませんか？十四歳でそれを自覚し受け入れたのですから」

自分なりの持論に調子が出てきたせいだろう。総司は次から次へと“この世界の常識”を口にする。そして目の前に居るのが椿だという気軽さからか、失言とも取れる言葉を吐いた。

「『家や会社の駒になるのは嫌だ』と言って駄々をこねた何処ぞのお嬢様より、よっぽど世の中を解かっている」

その瞬間、椿は目の前に置かれているドレスの箱がひっくり返ってしまいそうな勢いで立ち上がった。

「私、失礼いたします！」

勢いよくワンピースの裾を翻し、客であるはずの総司を残して客間を出て行ってしまったのだ。

「おやおや」

総司はいささか呆気に取られ、椿が出て行ってしまったドアを見詰めながら苦笑した。

「お姫様のご機嫌を損ねてしまったようですね」

小さな笑声を喉から零し、総司はコーヒーカップを手に取る。

カップに口を付け、自分が贈ったドレスを見詰めて、楽しげに目を細めながらも自嘲の息を鼻から漏らした。

「これだけ焦らされては、私だって嫌味の一つも言いたくなるというものですよ。椿さん」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

客間のドアに寄り掛かり、椿は足元に視線を落したままキュッと唇を結んだ。

椿の心の中には、後悔と羞恥が憤りと共に湧き上がり、自分でも収拾がつかない。

恥ずかしかった。

総司に、十四歳の少女と自分を比べられた事が。

「政略結婚の駒になるのは嫌だ」　そう啖呵を切って二年前に総司の求婚を断ったのは椿だ。

その話を出したうえで、村の為に葉山へ嫁ぐ事を決めた少女に敬意を払う、と総司は言った。

十四歳の少女に解かっている身分の常識が、何故貴女には解からない？　そう言われているようで恥ずかしさを感じてしまったのだ。

そしてまた、そんな事を引き合いに出す総司のやり方に憤りを感じ、更にその事に腹を立て、子供のようにムキになって部屋を出てしまった。

「みっともない……」

椿は自分がしてしまった行動に限りなく羞恥を覚え、どうにか出来ないかと考えるが、今更部屋へ戻るのも余計に恥ずかしい。

それこそ総司の思う壺のような気がするのだ。

椿が自身の身の置き場に迷いその場から動けずにいると、足元を見詰めていた彼女の視界に、男性のつま先が入り込んだ。
誰かが自分の前へ立ったようだ。
「あれぇ？　我侭して廊下に立たされている子がいるぞ？」
からかい言葉は優しいトーンで耳に響く。
椿の表情からは複雑さが消え、代わりに現れるのは期待の表情。
その表情のまま、彼女は目の前に立った男性を仰ぎ見た。

「誰かに怒られたの？」
優しく穏やかな表情で椿を見詰める、大介を。

椿姫・２３　『説得』

「怒られてなどいません」
そう言い返してやろうとした言葉は、身を屈め、椿の戸惑う顔を覗き込んだ大介に止められた。
「こんにちは、椿ちゃん。お邪魔してるよ」
「あっ……い……、いらっしゃいませっ……」
反論をする前に、つい大介につられて挨拶を返してしまった。言い返そうとしていた気力は、そこで少々萎える。
「書庫にお邪魔していたんだ。僕にとって、ここの書庫は宝箱だよ。大学の図書館でも揃わないような資料が沢山ある」

大介は薬学部の学生だ。製薬会社を営む家の書庫が『宝箱』　と感じるのは当たり前だろう。
彼の父親が葉山製薬の研究室に属している事もあり、彼は幼い頃から薬学に興味を持ち、自らもその道へ進もうと勉強を続けている。
この春、薬学部の六年生となった彼は、このまま順調に行くなら主席卒業は間違いないと言われており、葉山製薬本社の研究室への入社が確定していた。

「調べ物も終わったし、借りて行く本も揃ったし、さて帰ろうかなと思ったら、我侭して立たされている子を見つけたんだ」
一度萎えた反抗心は、その一言で復活する。
「立たされてなどいませんわっ」
しかし椿は自己嫌悪に陥り、ドアの前で立ち竦んでいたのだ。「立たされていた」　というのもあながち間違いではないだろう。
少々ムキになってしまった椿だが、大介は穏やかな態度を崩す事

無くそれに対応した。
「我侭したんじゃないの？」
「我侭なんて……」
「当ててあげようか？」
図星を言い当てられ、拗ねてお客様を残し退席してしまうのは我侭ではないのだろうか？　椿はそう思いながらも、“我侭”を言った事にも否定の態度を示そうとした。
しかしその否定を、大介が遮る。
「一の結婚話の事だろう？」

もちろん否定の言葉は止まったまま出ない。
何ということだろう。再び彼女は、自分が困惑する理由を当てられてしまった。
言い当てられた事に意表をつかれ言葉が出ない椿を見て、大介は背筋を伸ばしタネ明かしをする。
「実はね、一に愚痴られたんだよ。椿ちゃんが怒ってしまったって」
「お兄様に？」
一が愚痴を言うなど滅多にない。というより、彼の今まで二十四年間の人生の中で、片手でも足りるほどの回数では無いだろうか？
ただ、その愚痴を聞く役目は、必ず大介に回ってくるのだが。

「椿ちゃんが納得行かないのは分かるんだ。椿ちゃんは女の子だし、とても優しい子だから、そういった会社の都合やお金で、人の人生を決めてしまう事に納得がいかないのだと思う」
大介の優しい口調で褒められ、椿はちょっと頬が染まる。しかし彼は、その後で現実を彼女に切言した。
「でもね、一は会社の跡取りだろう？　会社の未来を考えなくちゃいけない人間だよね？」
穏やかな口調ではあるが、大介の言葉は椿の心の中へ浸透して行く。

彼の持つ雰囲気のせいだろうか。彼に諭されると大人しく聞かずにはいられなくなるのだ。

思えば昔から、三人で居て椿が拗ねると、そのご機嫌を治してくれるのは大介だった。

「一の気持ちも解かってあげてよ。あいつだって驚いたんだよ。いきなり十歳も年下の子供と二年後に結婚しろって言われたんだから。でも、あいつに拒否権はないんだ。葉山の跡取りが、一生独身でいる訳にはいかないだろう？　仕事人間だから、そういった相手を自分で見つけるとも思えないしね」

椿は今まで“村と一緒に買われる少女”の事しか考えてはいなかった。

社長である父に今回の事を決定された時、一がどんな気持ちになったかなど考えてはいなかったのだ。「仕事の為だ。しょうがない」そのくらいの軽い気持ちで受けたのかとさえ思ってしまった。

いくらあの兄でも、驚かないはずはなかっただろう。

一だけを責めた自分を後悔し始めた椿。

しかし彼女は素直にその気持ちを受け入れられず、自分の心の中で引っかかりを見せている思いを口にした。

「でも……やっぱり相手の娘さんがお気の毒です。……いきなりこんな話。……見た事もなく、好きでもない男性のところへ来させられるのですよ？　強制的に……」

女性としての正直な意見だ。

娘の切実な現状を口にした椿だが、そんな彼女を見て、大介は優しくクスリッと笑う。

「椿ちゃんは、好きな人とかはいないの？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

椿が部屋を出て行ってしまい、自分のちょっとした鬱憤晴らしも含めて少々言い過ぎてしまったかと考え直していた総司だが、取り敢えず今日のところは退却しようかと立ち上がる。

目の前に残された真紅のドレスを眺め、いつか彼女がこれを着て自分の前に立ってくれる事を夢に見つつ歩き出した彼だが、ドアの近くまで来ると何か話し声が聞こえる事に気付いた。

すぐドアの向こうからだ。

椿の声と、そしてもう一人。

穏やかな、青年の声。

その青年の言葉に、総司は耳を奪われた。

「椿ちゃんは、好きな人とかはいないの？」

椿姫・２４　『納得』

「両親、とか、お兄様、って答えは無しだよ？」
見た事が無いような、ちょっと意地悪な顔。口角を上げ、ありがちな回答をブロックする大介に、椿は今までに無い新鮮さを感じ、しばし見惚れた。
「す……好きな人、って……」
しかし、質問の内容を考えれば考えるほど、答えられる物ではない。
もしも正直に「大介さんです」と言った所で、いつぞやのように「僕も椿ちゃんは好きだけど、そういう意味じゃなくてさぁ」と本気にしてなぞもらえないに決まっている。
いっそ、「居ません！」と言ってしまえば良いのだろうか？
悩む椿に、彼女を驚かせる言葉が大介の口から出た。
「よく椿ちゃんに会いに来ている男の人は？　あの人はどうなの？　聞いたところでは凄く大きな企業をまとめている人なんだってね？」
何故大介が総司の事を知っているのかと、椿は驚いた。自分は一度だって大介の前で総司の話なぞした事は無いのに。一が大介に何か言ったのだろうか。
考えてみれば総司が家に来ている時、大介も来ている事が度々ある。大介だって「誰だろう？」と気になってくるだろう。
総司の話を出され椿は返答に困るが、考えてみれば困る事など何も無い。
正直に答えてしまえば良いだけではないか。
「あの方はお友達のようなものです。私を気に入ってくれたようで

はありますが、この先どうなるかなんて解かりませんわ」
　すると大介は椿の頭にポンッと手を乗せて、意地悪く上げていた口角を下げ、優しく和ませた。
「そう。『どうなるか解からない』　その通りだよ」
　乗せた手をスルリと滑らせ、大介は続けて数回椿の頭を撫でる。
「一とその娘さんも、同じだと思うんだよ。これからどうなるかなんて解からない。諦めの気持ちから夫婦になっていくのかもしれないし、もしかしたら本当に二人が惹かれあって、大恋愛になる可能性だって有るだろ？」
「……まさか、そんな事……」
「だって、椿ちゃんが言ったんだよ？　『どうなるか解からない』って」
「でも……」
　そんな可能性も、無きにしも非ず。しかし、こんな状況で出会った二人が幸せになる事などあるだろうか。しつこく疑う椿は、なかなか納得しない。
　兄に似て強情な椿だが、決して大介は怒らなかった。
「今から『必ず不幸になる』　って決め付けなくても良いと思うんだ。本人に訊かないうちに『あなたは不幸よね』　って言ってしまわなくても良いと思う。もしかしたらその娘さんは、椿ちゃんの大切なお兄さんを本当に好きになってくれるかもしれないだろう？　出会い方なんて関係ないよ」

　例え最悪の出会いでも……。
　椿は、自分と総司の出会いを思い出した。
　花を踏みつけた総司を怒鳴りつけ、天下の辻川財閥総帥に歯向かった椿。
　誰もが椿が受けるであろう制裁に恐怖したというのに、総司はそんな事はしなかった。
　彼女にエスコートの手を差し伸べ、話をさせてくれと請い。

そして、プロポーズまでしてきた。

出会い方など関係ないのだ。

その娘とて、一に出会ってから彼に惹かれて、その彼と結婚できる事を幸せに思うかもしれない。

椿に言わせれば、あの変わり者の兄を好きになってくれるのだろうか？　と不安に思わない訳でもないが……。

一だってそうだ。

もしかしたら「しょうがない」　と思いながら娘を傍に置いているうちに、本当に娘を気に入り、彼女を妻にする事に何の躊躇いも感じなくなるかもしれない。

例え出会うきっかけが不実な物でも。

例え出会い方が好ましくは無い状況でも。

「そうですね……」

そう考えれば何も角を立てる必要など無い。

兄の事は、これから様子を見なければ解からない事だ。

もしかしたら本当に、二人は大恋愛をするかもしれない。

……とはいえ、こんな条件の元で出会ってそんな事になるはずも無い、と。少々椿の中に諦めの気持ちが無い訳でもないが……。

「様子を見てみるべきなのかもしれませんね」

そう考えていくと、騒ぎ立ててしまった自分が妙に恥ずかしい。

はにかみ微笑む椿の頭を、大介はもう一度撫でた。

「椿ちゃんは、本当に賢い子だね。そんな椿ちゃん、僕大好きだよ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お見事……」

口の中で呟き、総司はドアの傍からそっと離れ、再びソファへ腰を下ろした。

ドア越しに聞こえる会話を、総司は全て耳に入れたのだ。

「あの椿さんを、すぐに納得させてしまうなんてね……」

テーブルの上から客用に用意された細い葉巻を一本取り出し火を点ける。

濃厚な煙の味を味わって、総司は額を押さえた。

「あの青年は、何と言ったっけ？」

ここへ来ると、かなりの確立で目にする青年。一の幼馴染という青年だ。

穏やかな口調だが、どこか抜け目の無いものを感じる。そんな印象で、総司の頭に残っていた。

「……光野……大介、だったか……」

ナイフのような鋭い視線を、その名前に向けた事を、知る者は居ない。

椿姫・25　『少女』

「椿さん、椿さんっ、おかえりなさいっ」
とても明るく可愛らしい声が、大学から帰宅した椿を迎えた。
「学校、お疲れ様でした。今日は図書館に寄られると聞いていたので、もっと遅くなると思っていました」
可愛らしいのは声だけではない。
真っ白な肌に黒目の大きな綺麗な瞳。背に長く垂らされたサラサラと流れる緑の黒髪。長めの前髪は微かに染まった頬の横で揺れ、可憐な彼女の表情を引き立たせる。
大人しめのロングワンピースに身を包んではいるが、もし着物を着ていたのなら、まるで日本風のお姫様のように見えてしまうのではないか。
流石の椿がそう思ってしまうほど、その少女、斎音寺さくらは可愛らしい少女だった。

「ただいま、さくらさん。図書館は一応寄ってきたのよ？　でも欲しかった資料になる本が無かったの。ウチの書庫の方がましだわ」
椿はさくらに笑いかけながら玄関ホールへと上がる。さくらは身体の前で両手を合わせキュッと肩を竦めた。
「葉山家の書庫は宝箱です。一日中居ても飽きません」
「一日中居たら、書庫にさくらさんを取られたと言ってお兄様が怒ってしまわれるわ。書庫を燃やされでもしたら大変だからやめてちょうだいね？」
椿が冗談のつもりで口にすると、一の名前を聞いたさくらは大きく目を見開きポッと頬を染めた。

そう、この『さくら』　が、先日まで椿が拗ねる原因を作っていた、一の婚約者だ。

まだ十四歳。入籍は二年後と決められている。

こんな子供がいきなり他人の家へ来て大丈夫かと不安ではあったが、さくらはとても人懐こく可愛らしくて、あっという間に葉山の家族、そして使用人達にも親しみを持たれるようになった。

特に、一や椿の父であり、苦肉の策でこの結婚を決めた新一などは、さくらを初めて見た時から「可愛い、可愛い」　と異常なほどの可愛がりようだ。

同じ娘でも、椿とは違う“可愛らしさ”のせいだろうか。とにかく「さくらちゃん、さくらちゃん」　と母の麗子と揃って豪い可愛がりようなのだ。

椿としては、少々微妙な感情も持ったりはするが……。

さくらは椿にもとても懐き、はっきり言えば椿もさくらは可愛い。

年の差は六つ。年下であるにも関わらず、さくらは一と結婚した後に『姉』　という立場になるのだが、当然ながら椿から言わせれば『妹』　が出来たような気分だ。

家の者とは上手くやっているさくらだが、肝心なのはそこではない。

さくらは一の妻になるべくしてやってきた女性だ。一と仲良くなってくれなければ意味が無いではないか。

一とさくらの年の差は十歳。“仲良く”などなれるのだろうか？

椿はずっとそう思っていた。

しかし……。

何の予告も無く玄関のドアが大きく開いた。

椿と話をしていたさくらがハッと顔を上げたかと思うと、その表情がだんだんと何よりも嬉しそうなものに変わっていく。

そしてそのドアを開いた本人は、滅多に、いや、こんな声聞いた事が無いと椿が呆れてしまうような優しく嬉しそうな声で彼女を呼ぶのだ。

「さくら！」

「一さん……、お帰りなさい！」

（……これは、何の冗談だろう？）

あの兄が、『鉄仮面』　とさえ仇名され、憎らしいまでにポーカーフェイスを決め込む彼が、その端整な顔に満面の笑みを浮かべている。

嬉しげに彼女の名を呼び、駆け寄ってきた彼女の手を取り髪を撫で頬に触れて、その眼差しに愛しさを目一杯に湛えているのだ。

「どうしたの？　一さん。まだ三時過ぎよ？」

「今日は急ぎの仕事が無いので帰ってきた。昨日は遅かったからさくらが寝てしまっていて顔が見られなかったからな。さくらに会いたくて仕事どころじゃない」

「お仕事が溜まったら、またお帰りが遅くなる日が続いてしまうわ。あまり続くのは寂しいわ」

「さくらが寂しいなら、過度な残業は止めよう。仕事は大丈夫だ。私を信用しなさい」

「一さん……」

正直……。

見ている方が恥ずかしい。

椿は思わず指先で眉間を押さえる。

自分の悩みは何だったのだろう、と。

十歳も年下の、それも婚姻年齢に達していない少女を家に迎えると聞き、その理由に憤慨した自分。

少女が可哀想だと同情し、お金で妻を買う事を容認した兄を蔑ん

だ。

こんな縁談が、上手くいくはずが無いと。

――取り越し苦労ではないか。

さくらが葉山家に来て二週間。

誰が予測したというのだ。

この二十四歳の兄と、十四歳の少女が、本当に恋に落ちてしまうなどと。

――出会い方なんて、関係ないよ。

そして椿は大介の言葉を思い出し、彼の言葉は正しかった。「やっぱり大介さんは正しいわ」と、一人密かにほくそ笑むのだ。

椿姫・２６　『自信』

「お帰りなさい、椿さん」
大学から帰宅した椿が客間へ入った時、第一声をあげて迎えてくれたのはさくらの可愛らしい声だった。
しかし屋敷内へ椿を乗せた車が到着して、彼女が一番初めに目にしたのは、邸の前に停まる大きな黒塗りのベンツ。毎日見るその車は「お客様？」と訊くまでもなく、彼女への来客である事を知らしめる。
「辻川様がお待ちです」
玄関を入ってすぐに解かり切った事を告げられ、取り敢えず着替えるまで待たせようかと思ったのだが、何とさくらが椿の代わりに相手をしていると聞き、慌てて客間へと向かったのだ。
さくらは意外に頭の良い子で、十四歳とは思えないほどの知識と教養を身につけている。
とはいえ、あんな子供を一癖も二癖もある二十五歳の男性と二人きりになどして置けるものか！
もしかしたら何か意地悪な事を言われて泣いているかもしれないではないか。

（そんな事をしたら、いくら辻川様といえど許しませんからね！！）

それはそれは素晴らしく意気込んで、椿はドアを開けたのだ。
しかしそこから聞こえたのは、楽しそうな男女の笑い声と、彼女を出迎えたさくらの笑顔。

「お帰りなさい。椿さん」

さくらに続いて、総司も椿を笑顔で迎えた。
確かにいつも笑顔で挨拶をくれる総司だが、今日は特別機嫌が良いようだ。
てっきりさくらが総司に困らされている事を確定付けていた椿は、少々戸惑い、二人を交互に見比べた。
「あ……ただいま帰りました。……辻川様、お待たせしてしまいまして申し訳ありません」
「いえいえ、結構ですよ。数分ですがそちらの可愛らしいお嬢様とお話をさせて頂きました。実に楽しく、有意義な時間を過させて頂きましたよ」
総司が軽く指を組み椅子の背もたれに大きく凭れ掛かると、向かい側に座っていたさくらがそれと入れ替わりに立ち上がり、椿も溜息を漏らしてしまいそうになる所作を見せ、綺麗なお辞儀をした。
「とんでもございません。私などお相手になりましたかどうか……。椿さんもいらっしゃいましたので、私は失礼させて頂きます」
椅子から身体を引いて、椿に軽く会釈をする。椿が「有難う、さくらさん」と言うと、さくらは嬉しそうに微笑んだ。
「いい子ですね」
さくらが客間を出て行くのを見送っていた椿の耳に、総司の感心する声が飛び込む。
「一回り近く年上である私と話をしていても、決して引けを取らない子だ。それでいて相手を立てる事を忘れない。実に頭の良い女性だ」
「あら？　気に入られました？　残念ですわね、お兄様に先を越されて」
ちょっと皮肉を込めた言葉を吐く椿を、総司は一笑する。
「何を言っているのです？　私が一番気に入っているのは椿さんですよ？」

いきなりそんな切り返しが来るとは思わず、椿は不本意にも言葉に詰まる。
意表をつかれた椿を感じて総司は大満足だ。

「彼女はよほど皆さんに可愛がられているようだ。まさか椿さんまでもが着替えもしないうちに部屋へ飛び込んでこられるとは。そんなに彼女が心配でしたか？」
いつも椿は、一応お客様用に着替えをしてから総司の前に現れる。しかし今の彼女は、大学から帰ってきたそのまま、少々ラフなワンピースのままだ。着替えをする間も惜しんで、急いで来たというのがすぐ解かる。
椿は分の悪さを隠すように、総司と同じくらい皮肉を込めて言い返す。
「ええ。意地悪な大人に泣かされてやしないかと心配で堪りませんでしたのよ」
「あんな可愛い子供を泣かせませんよ。私が色々な意味で泣かせたいのは、貴女だけだ」
「つっ、……辻川様っ」
よほど機嫌が良いのだろうか。総司の椿に対する態度も、皮肉混じりだがとても楽しげで積極的だ。

「おっ、おかしな事ばかり言わないで下さいっ」
特にそんなおかしな意味があったのではないかもしれない。しかし椿は、不本意にも少々染まってしまった頬を少しでも隠すかのように、横を向きながら今までさくらが座っていた場所に腰を下ろした。
「そうやっておかしな事ばかり言って、私を怒らせてばかりではありません？　泣かせられるなんて夢ですわね」
再び皮肉を返す椿。しかし総司は背凭れから身体を起こし、両肘

を膝について彼女の目の前へ身体を乗り出した。
「今の私にどんな冷たい言葉をかけても無駄ですよ。私は今、さくらさんに自信を貰った」
「……自信？」
「どんな状況で出会おうと、想いひとつで人間は幸せになれる。不条理な身の上でここへ来たさくらさんだって、一お兄様やこの家の人達のお陰であんなにも幸せそうだ」
だから何だというのだろう。それの何が総司の自信だというのか。
小首を傾げる椿。総司はそんな彼女を更に惑わせる。

「貴女に私の気持ちがちゃんと伝われば、貴女もきっとさくらさんのような笑顔を私にくれるに違いない。そう思えたのですよ」
「気持ち……？」
総司の気持ちとは、どう考えたらいいのか？
二年前言われた通り、家や世間体の為に、それをつくろうのに最適な自分と結婚したい。そういう気持ちの事だろうか？
「家の為に私と結婚したい。そうおっしゃった事ですか？」
椿にはそれしか思いつかない。
しかし総司は、にこりと嫌味ではない笑顔を見せた。

「私が、貴女を好きだという気持ちですよ」

椿姫・27　『思い違い』

「な、何を言っているのですか？　いきなり……」

総司の告白めいた言葉を聞いて、椿の口から最初に出たのは、その言葉を訝しむ台詞だった。

というよりも、それしか口から出てこなかったのだ。

一瞬頭が真っ白になってしまい、まるで確認をするようにそんな問いかけをしてしまった。

「いきなり、って。そんな、いきなりでもないでしょう？　ご存じのはずだ」

困惑する椿を不思議そうに見ながら総司は当然を口にするが、椿の動揺は止まらない。

「ご、御存じではありませんわ。……初耳ですっ。そんなつ……、辻川さまが、私を……」

――貴女を好きだという、気持ですよ。

さっき聞いたばかりの台詞が耳の中で反復し、やっとその意味を悟った身体が一気に体温を上昇させる。

「そんなの……」

言い返してやりたいのに言葉が出ない。自分はこんなにも、ハッキリと言葉を出せない人間だっただろうか。

そう思うと悔しいが、頬が上気している事に気付き、椿は総司から顔を逸らした。

「初耳……は無いでしょう？　私は二年前に貴女にプロポーズをしているはずだ」

椿の彼女らしかぬ慌てように、総司までもが呆然とする。
二年前に、自分の気持ちは伝えたはずだ。
花束を抱えて彼女にプロポーズをし、ムキになって断ってきた彼女に「諦めない」と宣言までした。
天下の辻川総司。相手が望もうと望むまいと、彼には一声かけて手に入らないものなど無い。女性とて例外ではない。
そんな総司が、二年前、まだ高校生だった椿が意地を張った言葉につきあい、椿が結婚を本気で考えてくれるまで、と足繁く彼女の元へ通いながらその日を待っているのだ。
考えてみれば、これは凄い事ではないか。

「プロポーズ……でも、あれは、家同士と世間体の為でしょう？　辻川様が言ったのですよ？　これ以上良い条件など無いはずだ、と」
椿は段々とムキになってゆく自分に気付く。
耳の中でさっきから同じ言葉が回り続け、頭から離れてくれない。

――貴女を好きだという気持ちですよ。

総司が恋愛感情を持って自分を好きかなど、椿は考えた事がない。
家の為、世間体の為に自分にプロポーズをし、好条件の元に政略結婚というものを成立させたがっていると思っていたからだ。
自分の元に足繁く通うのは、男の下心、という物なのではないかとさえ思っていた。
なのに……。

（辻川様が？　私を？）

「辻川と葉山。確かに家同士が結びつくには、とても素晴らしい条件だ。でも、それだけであんなプロポーズをする訳が無いでしょう」
今度は総司が困惑をする。

総司の気持ちは椿に伝わってはいなかったのだ。
彼女と出会って二年半。プロポーズをしてから二年。
椿は「家の為に結婚がしたくて付きまとっている」としか思ってはいなかった。
それはそうだろう。総司はプロポーズをした時、「この結婚が両家の為になる」という話はしたが、椿を好きだとは一言も口にしてはいない。この場合、プロポーズをしただけで気持ちを察しろというのは無理な話だ。
「私は、椿さん、貴女が好きだからこうして会いに来ているのではありませんか」

「もう、冗談はやめて下さい！」
恥ずかしくて聞いていられない。
椿は勢いをつけて椅子から立ち上がり、くるりっと後ろを向いてしまった。
自分でも信じられないくらい頬が紅潮している。耳まで熱くなってしまっている事が自ら確認できるなど、今までに無い事だ。
その恥ずかしさは、つい椿に暴言を吐かせてしまった。
「私などに付きまとわなくたって、辻川様位のお方ならどんな女性だって手に入るでしょう？　自分に逆らった女が、そんなに物珍しいのですか？　いつまでからかえば気が済むのです？！」
しかし、言ってしまってから椿は我に返る。
こんなに慎みの無い言葉は口にすべきではない。
すぐに謝らなければ、そう思い直した椿だが、総司から出た一言がその気持ちを風のように吹き飛ばした。

「そんな可愛げのない事を言う物ではありませんよ。椿さん」

「どうせ私には、可愛げなんてありませんわ！！」

売り言葉に買い言葉。
椿はそのまま、総司を置いて部屋を出てしまったのだ。

椿姫・２８　『誘拐』

「ごきげんよう。椿さん」
……椿は言葉が出ない。
「今日はまた一段とお美しい。何か良い事でもおありでしたか？」
今、目の前で椿を出迎えたのは、昨日女性に向かって「可愛げがない」　などという暴言を吐き、彼女を怒らせた総司だ。
それがまるで昨日の事など忘れてしまっているかのようにニコニコしながら、大学から帰った彼女を出迎えたのだ。

それも、屋敷の門前で。
ただの門前では無い。出入り口となる“正面”で、だ。
その正面に、まるで出入りを阻止するかのように真横に横着けされた一台のベンツ。それを遠目に見付けた瞬間、椿は呆気にとられた。
他人の家の前で、こんなに態度の大きな駐車をする人間が何処に居る！　有り得ない！

……いや、ここに居たのだ。
辻川総司は、平気でそれをやった。

こんな停め方をされては、椿を乗せた葉山家のＢＭＷはもちろん通れない。という事は、屋敷の中へ入れないという事だ。
当然のようにベンツの前でＢＭＷが停まると、それを待っていたかのように後部座席から総司が降りてきた。
総司が降りたとなれば、もちろん椿が黙って車内に居る訳にはいかない。運転手がドアを開けるのも待たず、椿も急いで車を降りた。

車を降りてきた椿を見て、総司は優雅にニコリと笑い、彼女に対しての挨拶を口にしたのだ。

「ごきげんよう。椿さん」　と。

「辻川様……。あ、……ごきげんよう……」

忘れそうになった挨拶を何とか忘れずに返すが、椿の心の中は総司に対する不信感でいっぱいだ。

この人は、何故今日私の所に顔を出せたのだろう？　と。

昨日、意気揚々と椿に愛の告白をして彼女を驚かせ、それでもまだ総司が椿を好きなのだという言葉を信じない彼女に「可愛げない」と、女性に対して失礼極まりない暴言を吐き、客人を置き去りに退席するという失礼をしてしまうほど彼女を怒らせたのだ。そこまでしたのだから、今日は顔など出せないだろう。

気にしていなかった訳ではないが、総司は今日、来ないものだと椿は自分の中で決めつけていたのだ。

なので、門の前に停まっている黒塗りのベンツを見た時の驚きたるや、言葉では言い表せない。

しかし昨日の突然の退席を少々気にしていた椿は、総司が現れてくれた事に何処かホッとしてしまったところもある。

「あの……、一体どうしたのですか？　今日は……。いらっしゃったのなら邸の中で待っていて下さっても……」

来ないだろうと安心しつつ、来てくれた事にホッとしている自分。そんな良く分からない気持ちのままかけた言葉は、何とも歯切れの悪い物だった。

来るなら来るで、いつものように邸の中で待っていれば良いではないか。

それをこんな所でこんな待ち伏せの仕方をするなど、まるで“誘拐”のようだ。

すると総司は、笑顔のままで椿の気持ちをそのまま口にした。

「今日は椿さんを『誘拐』　しようと思い、やって来ました」

「……は？」

今、何ト、オッシャイマシタカ？　ツジカワツカササマ？

“目をぱちくりさせる”とは、まさにこの事かも知れない。

知的で涼やかな双眸を丸くして、珍しくキョトンとした表情の椿を、総司はいきなり抱き上げた。

「つつつ、辻川様っっ！！」

それも、女性ならば誰もが憧れる『お姫様だっこ』　という物だ。

こんな抱き上げられ方は、過去に一度、兄の一にしかされた事はない。

「ななな、何をなさいますかっ！」

これを動揺せずして何としよう。

『お姫様だっこ』　とは、もちろん二本の腕で身体を真横に抱き上げられるものだ。そして、身体は限りなく密着するものでもある。

今の椿は、まさにその状態なのだ。

ふわりっと品の良い香りが総司のスーツから漂い、彼女の鼻腔をくすぐる。寄りかかった上半身に彼の胸を感じ、その瞬間、自分でも解かるくらいに真っ赤になってしまった椿は、その顔を見られたく無い一心で、つい総司の胸にしがみつくように顔を埋めてしまった。

この行動を総司が喜ばないはずはない。

「車を出せ！　姫を誘拐して行く！」

張り切って車へ乗り込み、その場を立ち去ったのだ。

後に残ったのは葉山家のＢＭＷ。
そして、事の一部始終に呆然とする、運転手のみ……。

椿姫・２９　『お付き』

「姫を誘拐して来たぞ！」
――これは、笑っても良い事か？
総司が椿を“お姫様だっこ”したまま玄関を入り、にこやかにそう宣言した時、出迎えに出た使用人達は笑うに笑えなかった。
当主は実に、にこやかに帰宅をして来た。そしてその腕にはうら若き女性が一人。真っ赤になった頬を両手で押さえながら抱きかかえられている。
そういえばこの美しい女性は、以前邸へ訪ねてきた事があると数人は気付くが、ほとんどの者は対処に困った。
だが当主はご機嫌なのだ。そこに水を挿してはいけない。
「お帰りなさいませ。総司様」
皆が一斉に頭を下げ、この上なくご機嫌な総司と、その腕の中で恥じらう椿を辻川家へ迎えたのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どうぞこちらに御召し替え下さい」
そう言って差し出されたのは、品の良いパステルグリーンのワンピースだった。
仕立ててまだ誰も手を触れた事がない様だ。丈夫な白い箱に入れられ、柔らかなシルクの薄布に包まれている。
「あの……、これは……」
差し出された当の椿は戸惑った。

邸へ入ってから、総司はこの来賓室と思われる部屋へ椿を残し何処かへ行ってしまった。どうしたら良いのだろうと考えていた所に、グレーのスーツを着用した、どうも使用人とは少々雰囲気が違う感じの男性が一人入って来て、このワンピースを差し出したのだ。

「総司様が、椿様にとお見立てられたものです。以前、赤いドレスと一緒にご用意なさいましたが、ドレスの方だけを椿様にお渡ししたと聞いております」

赤いドレスと聞いて、椿は総司が外国出張の土産に買って来てくれた物を思い出した。

「どっちを渡そうか。購入してこちらへ戻ってくるまで、ずっと悩んでいらっしゃいました。椿様のイメージはこちらの様でしたが、きっとあの赤いドレスを着た椿様を見てみたいというご希望が現れたのでしょうね」

艶やかで、少々露出が多めの赤いドレス。

確かに高潔な椿のイメージでは無い。しかし男性の心理として、こんなドレスを着た椿を見てみたい、という願望が総司にはあったのだろう。

「そうだったのですか……」

椿は箱の中からワンピースを取り上げ、総司が彼女のイメージで見立てたという、上品な色合いの中にも優雅さと可愛らしさが漂う露出の少ないデザインをジッと見詰めた。

赤いドレスを貰った時、つい男の下心を疑ってしまった。確かにそれもあったのかもしれないが、どちらを渡そうかと悩むくらい彼は椿の事を思って選んでくれていたのだ。

少し椿の心に後悔が湧き上がる。

彼女はワンピースを手に目の前の男性へ笑いかけた。

「有難うございます。着替えさせて頂きますわ。わざわざ用意して頂いたのですもの。有難うございます。……えと……、秘書の方で

すか？」

使用人の類にしても、立ち居振る舞いにワンランク上の物を感じる。そうすると秘書だろうか？　しかも今まで一緒に葉山家へ来た事はない顔だ。

すると青年は品の良い笑みを浮かべ、右手を胸に跪(ひざまづ)いて挨拶をしたのだ。

「名乗りが遅れまして申し訳ございません。私は“水野”と申します。総司様が御幼少の頃からお付きを務めさせて頂いております」

「そっ、そうなのですか？　お付きの方は今までにも数人葉山家の方にいらっしゃった事がありますが、……初めてお会いしますわよね？」

いきなり跪いて挨拶を受けた事に、椿は少々驚いた。

葉山家の令嬢を二十年間やっているが、邸でもこんな扱いは受けた事はないし、第一跪かれるなどパーティーでお話の時間が欲しいと申し入れられる時、数人がやった事があるくらいだろう。

財閥くらいになると普段からこういった扱いを受けるのかと、椿は改めて総司の身分の大きさを思い知った気分だった。

「私の父が執事を務めており、私は執事補佐に就かせて頂いておりますので邸内専門なのです。総司様が外を歩かれる時は他のお付きが付いておりますので」

「そうなのですか。では、未来の辻川家執事さんですわね」

すると水野は椿を見上げ、嫌味の無い笑顔で言った。

「はい。私がその任務に正式に着きました時、椿様を『奥様』とお呼びできれば光栄に存じます」

「……おっ……、おくさま……っ……」

お付きの青年の話に、椿は戸惑ってばかりだ。

しかしここで、彼女はフッと思い付く。

自分は……、何の為にここへ連れてこられたのだろう……？　と。

椿姫・３０　『招待』

「葉山家には椿様をお迎えに参りました際、『お嬢様を当家へご招待したい』　とお伝えしてございます。総司様は決して無作法に椿様をお連れしたのではございません。御安心下さい」

水野と名乗ったお付きの青年は、丁寧にそう説明して部屋を出た。

どうやら椿が辻川邸へ連れて来られたのは、総司がふざけて言うところの『誘拐』　などではなく、正式な『招待』　だったらしい。

だが、椿が返ってくる前に葉山の家には連絡をしてあったのだとしても、いきなり女性を抱き上げて車に乗せてしまう事を「無作法」とは言わないのだろうか？

そんな余計な事を考えてしまった椿だが、行きつく答えは所詮『身分の差』　だ。総司はその身分一つでそんな行為も許されてしまう人間なのだから。考えるだけ無駄だろう。

それより早い所このワンピースに着替えておかなければ、頃合いを見計らって恐らく総司がやってくるだろう。

彼の事だ。例え着替え途中であろうと、ノックも無しにドアを開けかねない。

そう考え付いた椿は、急いで着替えを始めた。

そして思った通り椿が着替えを終え、自分が来ていたワンピースを丁寧に畳んでいる時に、ノックも無くいきなりドアが開き総司が入って来たのだ。

着替えが終わっていて良かったと心密かにホッとする椿を知ってか知らずか、総司はドアを開き彼女を見た瞬間、それは嬉しそうな満面の笑みを「似合わない」　と言われてしまいそうなほど、その整った顔面に晒した。

「椿さん！　思った通りだ！　とてもお似合いですよ！」
総司があまりにも嬉しそうなので、椿は思わず言葉を失う。いくら自分が選んだ服だとはいえ、そこまで感動せずとも良いではないか。
そうは思っても、一応は招待を受けた身だ。おまけにワンピースまで用意してもらったのだから、ここは礼を立てなければならないだろう。
椿は足元で気持ちの良いフレアを作るスカートの裾を軽く手で広げ、そのまま身を屈めて挨拶をした。
「辻川様、この度は御招き頂きまして有難うございます。このような素敵な御召しものまで御用意頂きまして……」
「良いのですよ。元々貴女用に用意してあった物ですから。――それより、もっと良く見せて下さい」
まだ挨拶も済んでいないというのに、総司は椿の両腕を掴み、彼女に笑いかけながらその姿を眺めた。
あまりにも嬉しそうに総司に見詰められ、その視線を感じて椿は恥ずかしくなった。
そんなにも至近距離で、女性をじろじろと眺めるのも失礼ではないかとさえ思ってしまう。
「あ……、あの……、辻川様……」
恥じらう椿を見て総司は自分がはしゃぎ過ぎである事を悟るが、特に申し訳なく思う事は無かったようだ。彼女から手を離し、しかし口だけは素直に詫びを言った。
「申し訳ありません。思った以上にお似合いなのでつい嬉しくなってしまいました。私の目に狂いはなかった。こうなってしまうと、以前にお渡しした赤いドレスの貴女も是非見てみたいものだ」
「あっ……、あのっ、あれは……」
椿はちょっと戸惑う。いくら喜んでくれたとはいえ、所望されて「では着ましょう」　と気楽に言えるデザインではないのだ。

露出が多く、女性らしいライン。椿には着用に勇気が必要だ。
しかしあからさまに拒否をする訳にもいかない。椿は「そのうち機会があれば」　とはぐらかした。

「ところで、御自宅にご招待頂けるのは光栄ですが、それを『誘拐』などと言って連れてくるのは如何な物かと思いますわ」
どうも総司が現れた時から突飛な登場の仕方をされたせいか、自分のペースを見失い気味だ。
それを感じた椿は改めて姿勢を伸ばし、落ち着く為にゆっくりと息を吐きながら言葉を口にした。
「水野さんというお付きの方に、ちゃんと葉山家には連絡を入れてあるとお聞きするまで、どうなる事かとドキドキいたしましたわ」
「でも、貴女と『デートがしたい』　と言っても、素直に来てはくれなかったでしょう？」
「……デート？」
椿はかすかに眉を寄せ、ぱちりと大きく瞼を開閉させた。
あまり耳慣れない言葉、というか、初めて自分に掛けられる言葉だ。
いや、今までだって彼女をデートに誘いたい男はいくらでも居た。
しかし誘いをかけられない気品と気高さが彼女にはある。
おまけに、辻川総司が“椿姫”に目を付けている、という噂が立つようになってから、あわよくば椿に誘いの声をかけようと考える男性はほとんどいなくなってしまい、椿にとっては、そのような機会が遠のく一方だったのだ。

どんなに椿が美しく心惹かれる女性であろうと、生肉を目の前に、いつ捕食状態に入ろうか様子をうかがっている猛獣の前から、わざわざその生肉を取ろうとする者はいないだろう。
「デートって……、私をですか？」

例えは悪いが、しかし今の椿は、そんな“生肉”的な位置にいるのかもしれない。

椿姫・31　『デート』

「考えてみれば私は、貴女と出会ってこの二年以上デートにお誘いした事がない。誘ってもきっと断られてしまうだろうという思いもありましたしね」

　確かに。特別なお付き合いをしている訳でもない女性に誘いの声をかけるなど不誠実だと、椿ならば一喝してしまうかもしれない。おまけに出会って半年目にしたプロポーズでは、家や世間体の為に自分に声をかけたのだと大きな誤解をし、総司が自分の元へ通ってくるのをあまり良くは思っていなかったのだから。

「ですが、私の気持ちをシッカリと解かって頂いた今なら、お誘いしても許して頂けるかと思いました」

「上流階級の方の“デート”が“誘拐”だとは、初めて知りましたわ」

　一言皮肉を付け加え、椿は冷たさに汗をかいたウォーターグラスに口を付けた。

「本当なら、気安く女性に声を掛けてこんな所へ連れてくる物では無いと申し上げたい所ですが、その冗談を今すぐ止めて頂けるのなら、今回は許して差し上げても宜しいですわよ？」

「冗談？」

「辻川様がっ、私に想いを寄せて下さっているという“冗談”ですっ」

　椿は語尾に力を込めて口にしながら、いささか乱暴にグラスをテーブルへ戻した。

「デートをしたい」　そう言って総司が椿を連れ出した先は、辻

川財閥が所有する高級ホテル内のレストランだった。
ミニパーティが出来そうなくらい広い個室の中央に置かれた円形のテーブル。そのテーブルが浮いて見えないように、絵画や豪華な調度品で飾られたネオバロック調の部屋は、まるで小さな迎賓館だ。
水滴一つ垂らしてはいけないと言われているような、光沢が美しい白いテーブルクロスを眩しく感じながら、椿は総司と差し向いでディナーの席に着いた。
広いテーブルではあるが、身を乗り出し手を伸ばせば相手に届く位置だ。こんな近くで男性と食事をするなど父親か兄以外とは経験がない。
少々緊張しながらも一通りの食事を終え一息ついた所だ。もう一呼吸置いたタイミングの良さで、デザートなりが運ばれて来るのだろう。
食事中は総司のお付きやレストラン側の人間が数名部屋に付いていたが、最後のデザートを待つ段階で全て部屋の外へ出てしまった。今部屋の中には総司と椿だけしか居ない。
目の前に総司しか居ない、という気楽さが椿に不満を口にさせてしまったのかもしれない。

「まだそんな可愛げのない事を言っているのですか？」
椿の言葉に、総司は思わず立ち上がる。彼の気持ちとしては、どうして彼女は解かってくれないのだろうという不満でいっぱいだ。
しかし不満なのは椿とて同じなのだ。よりによって昨日彼女を怒らせた台詞を、彼は再び使ったのだから。「可愛げがない」　と。
「良いですか？　椿さん」
総司は立ち上がった勢いで椿の横へ歩み寄り、テーブルに片手を着いて彼女を見下ろした。
「私は、初めてお会いした時に貴女に惹かれました。ですから貴女の気を引きたくて、貴女の元に通っていたではないですか。その事を逆に貴女はどう思われていたのですか」

「ですからそれは、辻川様に逆らった女が珍しいからだと……」
「珍しいだけで、プロポーズなどはしませんっ」
「家の為にも良縁だとおっしゃいましたわ。家の為、世間体の為だ、と……」
「それは事実です。『辻川』　と『葉山』　これ以上に素晴らしい良縁が何処にあるというのです。ですが、そんな事以上に私は貴女に惹かれたのです。だからプロポーズをしたのではないですか」
「……あっ、あの時、そんな事は一言もおっしゃらなかったではありませんかっ」
テーブルに着いた総司の手が、テーブルクロスをシワにしながら、バンッ！　と大きな音を立ててテーブルを叩いた。
その音に驚いた椿の口は止まり、まるで痴話喧嘩の様な過去の水かけ論が終了する。

怒らせてしまったのかもしれない……。
そんな思いに冷汗が出そうになった瞬間、椿は信じられない光景を目にした。
何と総司がその場に跪き、膝の上で緊張しながらナフキンを握り締めていた椿の右手を大切そうに両手で取ったのだ。
「つっ……辻川様っ！」
椿は驚きと焦りで思わず立ち上がった。
お付きの青年に跪かれただけでも驚いてしまったのに、本来跪かれるべき立場の人間が椿に跪き、そしてその手を握っているのだ。
これが驚かずにいられるものか。

「ならば、今、言います」
総司は両手で椿の右手を握ったまま、彼女を仰ぐ。

「椿さんが、好きです」

そしてそのまま、椿の手の甲に唇を付けた。

椿姫・32　『二度目の求婚』

「私と、結婚して下さい」

陶磁器の様に綺麗に整った表情は時に冷たく感じてしまうというのに、今の椿を見詰める総司の表情は信じられないほど温かく情熱的だ。

これで「また御冗談を」　などと言えるのはよほど強かな女性だろう。

もちろん椿はそんな強かではないし、相手の気持ちを知りながら冷たくあしらえるほど無作法でも無い。

純粋な彼女の心の中に、総司のストレートな想いは苦しいほどに沁み渡ったのだ。

しかしこれは、どう答えたら良いのだろう。

この目はどう見ても本気で、真剣な気持ちが伝わって来る。

冷静に考えても辻川財閥の総帥が、老舗とはいえ一企業にすぎない企業一族の娘に跪いて求婚をしているというのは、信じられない話だ。

それだけ総司は本気なのだ。

その気持ちは、怖いくらいに椿の心の中へ入り込んでくる。

真剣な総司の視線を受け止めながら、椿の心の中では昔聞いた言葉が蘇った。

――椿ちゃんが好きになれた人と、結婚して欲しいな。

それは昔、大介がくれた言葉だ。

――少しでも好きになれた人と一緒に居られる方が、楽しいだろう？　だから、決められた人でもさ、“好きになれたら”結婚すれば良いんじゃないかな？　もちろん相手も椿ちゃんの事が好きである事が大前提だよ？　お互いが好きじゃなきゃ、一緒に居ても幸せじゃないもんね？

総司は椿が好きだ。
椿自身が信じられないほど彼女を想ってくれている。
それは二年以上、誤解を受けながらも彼女の元へ通い続けた事を考えれば明白ではないか。
家柄や世間体、椿の美しさだけに惹かれただけでは、ここまでは出来ない。

椿の胸が苦しいくらいに高鳴った。
では自分はどうなのだろう。
自分は総司をどう思っているのだろう。
嫌いでは無い。毛嫌いしているのなら、たとえ“知人”としてであろうと二年以上も付き合えはしなかっただろう。
ならば、好きなのか。

解からない。

椿は戸惑う
『好きな人』　と考えて思い浮かぶのは大介の姿だ。しかしそこに総司の姿も見え隠れしてしまうのを感じ、慌てて取り払おうとする自分が居る。

この気持ちが何なのか、恋愛経験も異性との駆け引きも経験の無い椿には解からないのだ。

「あの……、辻川様……」

あまりにも熱っぽい総司の視線に耐えられなくなった椿は、この状況を少しでも変えたくて口を開く。

しかし言葉が続かない。

何を話せば良いのだろう。再び受けたプロポーズの返事をすれば良いのだろうが、何と答えたら良いものか。

自分はこんなにも機転の利かない人間だったのだろうか。

そんな事を考えながら総司と視線を合わせていると、部屋にノックの音がして、デザートを乗せたワゴンを押した従業員らしき男女が入って来た。

良いムードだったのにと総司が気分を害するのではと思ったが、彼はそんな表情を少しも見せず、素早く立ち上がると入ってきた従業員に歩み寄り自らワゴンを受け取る。

どうやら自分がやるから後は良いと指示をしたらしい。二人がそのまま頭を下げて部屋を出てしまったので、再び室内には総司と椿だけが残された。

「椿さん。ワインは飲めますよね」

「え？」

椿の答えを待たずに、総司はワゴンの上からワインのボトルを取り上げる。

「お兄様にお聞きしています。ワインなら飲めると」

「はい……。でも、飲める、というほどでは……」

一応椿も二十歳にはなっているので嗜(たしな)む程度に口にする事は出来る。

兄が何時の間に総司とそんな話をしていたのだろうと考えているうちに、総司はソムリエナイフをコルクの上で滑らせ簡単にコルクを外した。

兄の一もワインをよく嗜む方なので、小さなナイフ一本でコルクを開ける様は目にした事がある。実はその仕草がとても好きな椿は、兄と同じ仕草を総司がやってのけたのを見て不覚にもドキリと胸を高鳴らせた。

「デザートワインを用意させました。甘くて飲みやすい物ですので、椿さんにも気に入って頂けるかと思いますよ」

総司自らグラスに注ぎ、椿の前へグラスを滑らせる。

「作法は不要。最上級のデザートワインです。この甘さと喉越しを楽しんで頂きたい」

椿の為にこれを用意出来たのが嬉しいのか、総司は上機嫌で椿に勧めながら自分のグラスにもワインを注いだ。

作法は不要と言われてもそうはいかないものだろう。椿はグラスを口元へ持って行きながらチラリと視線だけを総司へ向ける。

すると彼は、グラスを片手に微笑みながら椿を見詰めていた。

何とも言えない花恥ずかしい気持ちが椿を襲い、その恥ずかしさを誤魔化す様に、彼女は匂いを楽しむ事も舌触りを楽しむ事も忘れ、本当に“作法不要”のままワインを一気に喉へ通してしまった。

「……甘い……。美味しい……」

予想外の甘さと喉越しの良さに驚く。流石に総司が「最上級」と言っただけの事はあるだろう。

「そうでしょう？　どうぞ。気に入って頂けたなら嬉しいです」

再び椿のグラスにワインを注ぎ、総司は彼女が照れてしまいそうなほどの頬笑みを見せる。そんな頬笑みを視界に入れながらグラスを口へ運び、椿は予想以上に自分が緊張していたのだという事を悟った。

渇いた喉に液体が通ってくれる事が、とても気持ちが良いのだ。

しかし、忘れてはならない。
いくら甘く喉越しが良いからといっても、これはアルコールだ。
そのジュースの様な甘さに騙されても、普通のワイン並みにアルコール度数を有した飲み物だ。

緊張状態にあり、半分動揺しかかった身体にアルコールが回ればどうなるか……。
おまけに“嗜む程度”しか飲めない椿が、グラス二杯分を一気に流し込んでしまったとなれば……。

椿は急に目の前がグルリと回るのを感じる。
「……椿さん?!」
総司のちょっと慌てた声が、耳の奥で籠(こも)り……。

そして彼女は、意識を手放した……。

椿姫・33　『スイートルーム』

「気がつかれましたか？」
その声は、随分と静かな場所で響いた様な気がする。
実際そこがとても静かな空間である事に、椿は瞼を開いて数分経ってからやっと気付いた。
暖色系の灯りが天井に映り込んでいる。ここは何処だろう……？
しかし、瞼を開いて天井が目に入ると言う事は、彼女は横になっているという事では無いだろうか。
横に……。

椿はハッと瞼を大きく開き、条件反射的に上半身を起こした。
しかしいきなり上半身を起こしたせいか、フラッと軽い眩暈を起こし身体が揺らぐ。
「危ないっ」
傍にいた総司は椿が倒れないように抱き止めるが、その形がまるで抱き合っているかのような形になってしまっている事に気付き、彼女は慌てて身体を離した。
「あっ……あのっ、私……」
周囲をキョロキョロと見回しながら、覚えている限りの思考を巡らす。
記憶のラストはレストランでワインを飲み、事もあろうにアルコールが回って意識を失ってしまった事だ。
何という醜態を晒してしまったのだろう。それも男性の前で。
いくら甘くて飲みやすかったとはいえ、その喉越しに騙されるように、作法も何も無く一気にグラス二杯を身体の中に流し込んでしまったのだ。

こんな事は初めてではないか。

「あのっ、辻川様？　ここは？」

そしてもう一つ椿を動揺させているのは、今居る場所だ。

どうやらここは、先ほどまで居たレストランの個室ではなく違う部屋の様だ。天井が見えたのは、やはり椿が寝かされていたから。

――寝室らしき部屋の、大きなベッドの上に。

部屋を見回すと、開けっ放しのドアの向こうにまた部屋らしきものが見える。ここは何処なのだろう。辻川邸へ戻って来たのだろうか？

しかし総司の口から出た言葉は、椿の動揺を更に大きくした。

「部屋を用意させておいて良かった。レストランで意識を無くしてからこちらへお運びしました。一時間ほど眠っていらっしゃいましたよ。お加減は如何です？」

「へっ、部屋って……ここは……」

何と無く解かるが訊くのが怖い。しかし訊かなければならない事だ。

返ってくる答えを想像しつつ訊ねるが、返って来たのは予想通りの答えだった。

「食事をとったホテルのスイートです。もちろんオーナー専用ですので、御安心下さい」

訊かなくても解かるが、もちろん二人きりだろう。この状況で何を「安心しろ」　と言うのか。

椿は再び眩暈がした。

上着を脱いではいるものの、総司はシャツにネクタイ姿。椿もキチンとワンピースを着ている。“何か”があった様子はない。

意識を失った椿をここまで運び、アルコールから覚めるまで寝かせておいてくれたのだろう。

それは良いのだが、ここからはどうなるのだろう？　先ほど総司はこう言ったではないか。「部屋を用意させておいて良かった」と。ということは、アルコールで潰れなくても誘うつもりだったという事なのか？

そういえば総司は、これを『デート』　だと言っていた。

椿にとって『デート』　という物は初体験だが、総司は二十五歳にもなっている男性で、椿よりは格段にそういった経験も豊富だろう。

『大人のデート』　の仕上げはこういった事が多いというのも、知識としてだけは知っている。

しかしまさか、それが自分の身に降りかかって来ようとは……。

「あのっ、辻川様！」

まさか、でもいきなりそんな事は無いだろう！　それを信じて、とりあえず椿は介抱してもらった礼を言おうとした。しかしそれと同時に総司が身を乗り出して来たのを見て、椿の動きはビクッと止まる。

「申し訳ありませんでした、椿さん。まさかあんなにいきなりアルコールが回ってしまうとは思わなかったのです。女性の貴女に、恥かしい思いをさせてしまったのではないかと……。本当に申し訳ない」

総司は椿の手を取り、彼の胸の前でキュッと握った。心苦しげなその表情は心から椿に申し訳なさを感じているようで、反対に椿の方が恐縮してしまう。

「いいえ、……私も、つい調子に乗ってしまって……。こんなみっともない姿をお見せしてしまって……。せっかくご招待を頂いたのに……」

「そんな事を言わないで下さい。不謹慎ではありますが、私は少し嬉しくもあるのです」

「……嬉しい？」

女性が倒れたというのに「嬉しい」とはどういう事なのだろう。
椿が不思議そうな表情をすると、総司は彼女の手を握ったまま、もう片方の手で椿の頬にかかった髪を後ろへ梳く。そしてその指を、彼女の顎にかけた。
「一時間が夢のようでした。ずっと傍で貴女の寝顔が見られたのですから」
椿が意識を失っていた一時間、彼はずっと椿の寝顔を眺めていたのだ。
何をするのでもなく、ただベッドの端に腰かけて、ずっと眠る彼女を眺めていたのだろう。

「寝顔だなんて……。お恥ずかしいですわ。そんな……」
家族でも無い男性に自分のそんな姿を見せてしまったのかと思うと、気が遠くなりそうだ。椿は徐々に染まる頬を隠したくて顔を逸らそうとするが、顎に手をかけられている為、顔が逸らせない。
かろうじて視線だけが総司から逃げるが、すぐに違う物が彼女を追って来た。

「もっと、貴女の寝顔が見ていたい。……朝まで……」

その言葉と共に、総司の唇が椿の唇に重なり、彼女の視線は目の前に迫った総司の瞼に注がれる。

男性にしてはまつげが長いな……。などと、まるで現実逃避をするかのような事を考えてしまったのは、受けた事の無いような濃密な唇付(くちづ)けをされている自分に動揺しない為、なのかもしれない。

椿姫・３３　『スイートルーム』（後書き）

＊「活動報告」の方に６／７～１８まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。
ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／２０８６５３／

沢山の拍手を、いつも有難うございます！

椿姫・３４　『二度目の唇付け』

「水野さん、車はどうしますか？」
執事補佐の仕事を終え、一息付きながら執務室から出てきた水野に声をかけたのは、主に総司の移動の際に運転を務めるお付きの戸田だった。
「この時間なのでガレージに入れても良いでしょうか……」
同じ総司のお付きでも、幼少の頃から総司に付いている水野の方が役職的には上に居るので、自然と言葉使いも敬語になる。
水野は腕時計に目を走らせ、すでに二十三時も過ぎている事を確認すると、満足そうな笑みを口元に浮かべた。
「いいだろう。車のお呼びがかかるのは明日の朝だと思うからね。そのつもりで用意していてくれ」
「解かりました」
水野に許可を貰い、ホッとしながら戸田は総司の専用車であるベンツをガレージに収める準備にかかった。
ガレージへ持って行けば、仕上げに整備士が点検に入る。
総司か水野の許可が無ければ一日の仕事を終えられないのだから、総司が夜に外出している時は大変だ。

「今日は……。お帰りにならないのかな……」
微かに嬉しそうな笑みを漏らしながら呟き、水野は椿を伴って出かけて行った時の楽しそうな総司の姿を思い出した。
総司が椿を本気で好きな事を誰よりも知っているのは、水野かもしれない。
総司の一番初めのお付きとして彼に付いた水野は、年上という事もあり総司の良い相談相手でもあった。

それは今でも変わってはいない。彼は良く総司の口から椿の話を聞かされている。

夕方、椿に挨拶をした時、「奥様」　とお呼びできれば光栄です、と、言ったのも、総司の椿に対する想いを知っているからこそだ。

「上手くいくと良いが……」

一人の女性に総司がこんなにも執着するのは初めてだ。また、椿の事を話す時の総司がとても嬉しそうな表情をするのを思うと、お付きとして相談役として、二人の仲が上手く進展してくれる事を願わずにはいられない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

椿は今まで、一人の人間としか唇を合わせた経験が無い。

相手は総司だ。

彼は二年前、最初のプロポーズをした際、触れるだけの唇付けをいきなり彼女に施した。

そして今、生涯二度目の唇付けを受けている。

相手はまたしても総司だ。

しかし、人は同じでも内容は違った。

触れるだけでは無い。彼の唇は強く椿の唇に吸い付き、どうしたら良いのか解からずただ黙って閉じ合わさっている柔らかな唇を割る。そしてその隙間からスルリと入り込んだ舌は、口の中で怯える小動物の様に奥で震えている彼女の舌を容赦なく掬い上げた。

もちろん椿はどうしたら良いのか解からず、されるがままだ。

「つじ、かわ……様……」

怖さと戸惑いで、椿は肩を竦め総司の唇から逃れようとするが、総司は顎を押さえていた手で椿のもう片方の手を取り、両手を先に

ベッドへ押しつけると、唇を合わせたまま彼女の身体を押した。
先に着いていた両手の後を追うように身体がベッドに横たわる。
ただし上からは総司の唇が重なり、尚且つ上半身が重なっているという形だ。

顔の角度を変え唇を合わせ直しながら、総司は掴んでいただけの椿の手を握り直し、指を絡めてベッドへ押しつけ優しく握った。
感情のままに握り潰してしまいたくなるような柔らかな手。繊細な細い指が、怯えるようにピクリと動く。
吸い付き合わさる唇に、時折出来る隙間から戸惑う彼女の吐息が漏れる度、総司はこの指が動かなくなるほど彼女を抱き締めてしまいたいという激しい衝動に駆られた。

総司からの唇付けを受けながら、椿は再び意識を失ってしまいそうな自分を懸命に押しとどめていた。
やはり総司は、最初からこういうつもりで“デート”と称して食事に誘ったのだろうか。部屋まで用意していたのだから、きっとそうなのだろう。
いや、元々、アルコールで倒れてしまった自分も悪いのだ。“介抱する”という目的が無ければこんな所にも来なかったのかもしれない。
今回のデートの目的は、あくまでも総司が彼の気持ちをハッキリと伝え、もう一度プロポーズをする為だったのかもしれない。
部屋はプロポーズの機会を作るきっかけの一つとして取っていただけなのかもしれないではないか。

総司を疑う気持ちと違う所で、庇ってしまう気持ちを感じながら、椿の意識は遠退いた。
それは、突然訪れたこの状況に気持ちが付いて行かなかったのと、慣れない濃密な唇付けをされたせいで身体が付いてゆかず、酸欠を

起こしてしまったせいだろう。

「……椿さん……？」

そして、強張っていた指の力が抜け、椿の全身がくったりとしてしまったのを感じた総司は、不審そうに彼女から離れ、彼女が再び失神してしまったのを見て目を瞠った。

まさか唇付けの段階で失神されるとは、彼も思わなかったのだろう。

椿を陥落させる道程は厳しそうだと感じつつ、何と無く前進を感じさせる関係が、彼は嬉しい。

失神してしまっていても良い。このまま椿の花を摘み取ってしまおうかと少々本気で考えるが、その愚かしさに自嘲し、彼は迎えの車を呼ぶ為に電話へ手を伸ばした。

椿姫・35　『戸惑い』

「ああっ、もぅ……私ったら……」
その朝、これ以上はないというほどの落胆と虚脱感に、椿は襲われていた。
「もぅ……イヤ……」
ベッドで上半身を起こし両手で顔を押さえる彼女は、泣いている訳ではない。恥かしいのだ。
ここは椿の部屋であり、今まで横たわっていたベッドも彼女の物だ。目の前に誰かいる訳ではない、彼女は一人きりだというのに何を恥かしがっているのだろう。
カーテンの隙間からは、春の暖かな陽射しが光の道を作っている。外からは鳥のさえずりが聞こえ、実に爽快な朝だ。
しかし、椿の気分は最悪だった。

「あんな事に……、なってしまうなんて……」
自己嫌悪の塊になって呟く椿の脳裏には、昨夜の出来事が思い起こされている。
総司に誘われデートに出かけて、真剣なプロポーズの後、飲み慣れないワインで倒れてしまった彼女。更に介抱してくれた総司に人生二度目の唇付けを受け、ベッドに押し倒された事も重なって激しく動揺した挙句、事もあろうに失神してしまったのだ。

目が覚めた瞬間、椿は弾かれたように上半身を起こし、目を見開いて正面を凝視した。
それが見慣れた自分の部屋と解かるまで、三十秒はかかったのではないだろうか。
自分の部屋で、間違いなく自分の就寝着をまとって、自分のベッ

ドで目を覚ました彼女。
（昨夜の事は、夢だったのだろうか？）
彼女がそう思い心が安堵しかかった刹那、目に入ったのは壁に掛けられたパステルグリーンのワンピース。辻川邸で椿が着替えたワンピースだった。
（夢じゃなかった……）
その途端、彼女を落胆と虚脱感が襲ったのだ。

椿は恥ずかしくて恥かしくて堪らない。
羞恥に染まった顔を両手で押さえたまま、一人きりだというのに顔を上げられない。
何に恥かしがっているかといえば、昨夜の出来事全てだろう。
椿が失神してしまった、という事ばかりでは無い。彼女とのデートの進行を想定して総司が部屋を取っていたという事、彼に寝顔を見られた事、その寝顔をずっと見ていたいという意味深な言葉を告げられた事。
そして何より……。
彼にされた、濃密な唇付け。
その唇付けを思い出そうとするたび、彼女自身の理性までもが恥かしがって、思い出す事を拒否してしまうのだ。

「……何故ですか……辻川様……」
ここには居ない総司へ、椿は問いかける。
「どうして……私などにあんな事を……」
理性で拒否をしながら、唇に熱さが蘇る。与えられた唇付けを思い出そうとする自分がふしだらに思えて、椿はその思考を打ち消そうとするかのように両肩を竦めて頭を振った。

――貴女の寝顔を見ていたい……。朝まで……。

あの言葉は、そのままの意味だ。椿は、男性に求められたのだ。
求められ、それを受け入れるとも拒否をするとも態度で表せないうちに、その行為に流され失神までしてしまった。
どうやってここへ戻って来たのかなど覚えてはいないが、恐らく総司が……、いや、総司のお付きの誰かが送り届けてくれたのだろう。
そこまで見当を付けてから、彼女はやっと顔から両手を離した。
今になって、大切な疑問が浮かんで来たのだ。

（何か、されたのかしら……）

“何か”
唇付けでは無い。
それなら、された事を覚えている。
椿が不安になったのはその先だ。
（私、辻川様と同衾に及んでしまったのかしら……）
要は、総司と床を同じくする行為に及んでしまったのかと不安になったのだが、例え回想の中であろうと、性交や交合などという言葉を使えないところが椿らしい。

椿は唇付けを受けたところまでしか覚えてはいない。意識を失ったのだから当然だろう。
しかし総司は椿の様に失神などしていない。“その気”になっている“男性”というものが、無防備に身体を投げ出している意中の女性を目の前に、何もしないでいられる物なのだろうか。
そんな獣の様な考えを、椿は必死に否定した。そんな筈はない。
そんな事をするはずが無い、と。
相手は常識を知らない人間ではない。辻川財閥という大きな組織の、それも総帥という立場の人間だ。マナーも礼儀も、女性に対す

る扱いも、その身体に沁み込むくらいにわきまえているだろう。
意識を失っている女性に対して、相手の意思も確認せず勝手に交わってしまうなど、有り得る事では無い。
――だが、逆を言えば、誰にも逆らわれない身分の人間だからこそ、自分の思うままを通してもおかしくはない。

「辻川様……まさか……」
総司は椿を、出会った頃から好きだったという。
その想いは、「冗談はやめて下さい」と突き放していた椿にも、昨夜一晩で嫌というほど伝わった。

丸二年以上思い続けてきた女性を目の前に、総司は本当に椿をそのまま帰してくれたのだろうか。

何かされたのかもしれない。
そう思った瞬間に襲ったのは、恐怖感と絶望。

椿はベッドから飛び降りると、バスルームへ駆け込んだ。

椿姫・３６　『不安』

「そんな訳が有る筈が無いわ……。何をおかしな事を考えているの……。失礼じゃない……」

椿はまるで自分に言い聞かせようとするかのように呟きながらバスルームへと飛び込み、目標が定まらない手つきでシャワーのコックを捻った。

いきなり噴き出して来たのは、水に近いぬるめのお湯。それでも羞恥に上がった体温には、その身を大きく震わせるほど冷たく感じる。

「そんな事……、考えては失礼よ……」

徐々に温かみを増し、白い湯気を上げながらバスルームの床にシャワーの湯が打ち付けられる。椿はそのシャワーの中で、白い肢体を両腕で抱き締めた。

意識を失っている椿に、総司が同意無しのまま身体を重ねてしまったのではないかと疑ってしまったのだ。

そんな訳は無い。そう心の中で繰り返すのは、総司を信じたい、という気持ちよりは、自分の純潔が認識の無いまま失われているかもしれない、という可能性を否定したい気持ちの方が大きい。

温かくなったシャワーを頭から浴び、椿は片手を太腿に当てた。下半身を意識し、“痛い所”は無いかを探っていく。

しかし彼女の下半身に、感覚として痛む個所は感じられなかった。それよりもいきなりベッドから飛び出し、シャワーを頭から浴びるなどという無理をしてしまった為、少々足元がふらつく。

もしかしたら、まだ昨夜のワインが残っているのかもしれない。

話を耳にし、書物で読んだ事が有るだけの知識だが、純潔を失う際はかなりの痛みを伴うものだと記憶している。人によっては一日二日、痛みの感覚が消えないという事もあるらしい、と……。

だが、今の自分には、何の痛みも無ければ違和感も無い。

「大丈夫よ……。何も無かったのよ……」

椿が自分を安心させる為に呟いた時、いきなりバスルームの曇りガラスがノックされ、彼女はビクリと身体を震わせた。

「椿さん、すいません、ご入浴中……」

小柄な影がガラスの向こうに立っているのが解かる。どうやらさくらの様だ。

「おやすみかと思ったのですが、シャワーの音がしたので……。あの、お客様なのですが……もう出られますか？　……すいません、一さんに呼んで来るように言われたものですから……」

「……お客様……？」

椿は不思議な物を感じながらシャワーを止める。こんな早朝に客人などと、一体誰だというのだろう。

それも、起きているのか起きていないのか解からない人間を、わざわざ呼び出さなくてはならないほどの客人だ。

「いったいどなた……」

口にしかけて椿はハッとする。

家族がそんなにも気を遣わなければならない客人。

そんな人間は、一人しか居ないではないか。

「すっ、すぐに参ります」

察しをつけた椿が返事をすると、すぐにさくらの姿は曇りガラスから消えた。これから着替えをするのに、自分がいつまでもいてはいけないと思ったのだろう。

（辻川様だわ……）

椿は急いでバスルームから飛び出し、タオルで体を覆った。

どんな顔をして総司に会えば良いのだろう。
そんな気まずいものを感じながら、何処か鼓動が高鳴る自分に、気付けないまま。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

いつもは客間へと通される総司だが、まだ早朝であり、彼もこれから会社の方へ赴かなくてはならない立場なので、ゆっくりとはしていられない。慌ただしく失礼をしてしまうから、という理由で、彼は玄関先で椿が現れるのを待っていた。
とはいえ、辻川の当主を玄関先で立たせ放っておくなどという事も出来ようが無い。
「早朝から失礼致します。椿さんにご挨拶をさせて頂きましたら、早々に引き揚げますので」と遠慮を見せた総司の話し相手になっていたのは、さくらに椿を呼びに行かせた一だった。
朝食をとる為、さくらと共に階段を下りていた時、総司がやってきたのだ。

総司は椿を待つ間を一と話し、今日の一がいつもと比べて機嫌が良く、表情も穏やかである事に気付く。
（何か、楽しい事でもあったのかな？）
無作法な勘繰りを心の中で入れ、葉山邸に入って一を見付けた時に、婚約者の少女と連れ立って歩いていた事を思い出した。
（この機嫌の良さは、彼女のお陰か……）
無表情が多く、その場限りの作り笑いしか見せない様な彼をこんなにも懐柔させるとは、あの少女はどんな魔法を使ったのだろう。
そんな冷やかしを心の中でかけつつ、実のところ総司は、そんな仲

睦まじい関係を作り上げている一を羨ましく感じた。
もちろん総司も、自分が知らず懐柔させられてしまう位の関係を、椿と作りたいものだと思ったのだ。

手に入らない物など無く。
叶わない望みなど無かった彼。

誰かを羨ましいなどと思ったのは、この時が初めてだったのかもしれない。

椿姫・37　『早朝の訪問』

「申し訳ありません、お待たせいたしました！」
大きめの声と共に階段を駆け下りる音が玄関ホールへ響く。
和やかに会話をしていた一と総司が、声が聞こえた階段方向へ視線を移すと、そこには階段を急いで駆け下りてくる椿の姿が有った。
「椿さん……！　そんな所を走っては怪我を……！」
階段を走るなど彼女らしくない事だ。し慣れない事をして踏み外しでもしたら大変ではないか。
そう思った総司は、一緒に居た一が驚いてしまうほどの速さで玄関ホールへと上がり、階段の下まで駆け寄った。
当の椿はといえば、いきなり総司が階段の下までやって来た事にも驚いたが、下り階段を駆け下りるなどという、生まれて初めてではないかと思われる事をしてしまったばかりに、予想通り足はもつれ、安易に止まる事がままならない状態に陥ってしまったようだ。
このままでは、下りた瞬間に転んでしまう。椿は両手で手すりを掴み、下りで勢いの付いた身体を止めようとしたが、その前に彼女の様子に気付いて数段上って来た総司の腕に抱きとめられた。
「大丈夫ですか……？　いけませんよ、貴女の様な方が階段を走るなんて……」
両手で手すりを掴み、身体を総司の片腕に支えられた状態で椿は彼を見上げる。彼の顔を見た瞬間、昨夜、唇付けを受けながらベッドへ組み敷かれた事を思い出し、彼女は頬を紅潮させながら目を逸らした。
「……すみません……」
総司は椿を抱きとめた腕を彼女の身体から外し、代わりに右手を取って軽く握る。そしてそのまま、ゆっくりと階段下までエスコー

トした。
　下りたところで二人とも立ち止まるが、総司はなかなか椿の手を離さない。向かい合っているというのに、椿は総司の顔を見る事が出来なかった。
　顔を見ると昨夜の事を思い出し、恥かしさで胸がいっぱいになってしまうのだ。

「妹が来たので私は失礼します。妹が粗相をしましたらお知らせ下さい」
　雰囲気良く向かい合う二人の後ろから、今まで総司の相手をしていた一が声をかける。すると総司は笑顔で振り返り椿を称えた。
「お気遣いに感謝いたします、お兄様。ですが、椿さんは実に礼儀正しく慎ましやかで、素晴らしい女性です。“粗相”など、彼女には縁の無い言葉ですよ」
　器量に関する褒め言葉など、椿は幼い頃から飽きるほど浴びてきた。今更聞いても何とも思わないはずなのに、総司に言われると妙に恥ずかしい。
　自分の気持ちがどうなってしまったのかと戸惑う椿に、一が声をかけた。
「椿。辻川様に良くお礼を言いなさい。昨夜、レストランで倒れてしまったというお前をわざわざ送って来て、更に部屋まで運んでくれたのは辻川様なのだぞ」
「えっ！」
　椿は思わず声を上げて総司を見上げた。やっと顔を上げた彼女に、総司がニコリと微笑みかける。
　失神して眠ってしまった椿を送り届けてくれたのは、てっきりお付きの人間だと思っていた。まさか総司自らが送り、部屋まで運んでくれるとは思いもしなかった。
　流石に就寝着に着替えさせてくれたのはメイドか母親だとは思うが、それでもこれは驚くべき事実だ。

「あの……辻川様？　……有難うございます……」
椿は目の前の総司を見詰め、感謝の言葉を口にする。
頬を染めた花恥ずかしげな表情は、総司の視線を彼女に釘付けにした。
「私、二度もあんな失礼をしてしまったというのに……」
昨夜の自分に羞恥する彼女を見詰め、総司は手に取ったままの椿の手を自分の胸で握る。
「体調は如何ですか？　心配で堪らなくて、早朝から失礼かとは思いましたが来てしまいました。でも大丈夫で良かった」
左手を伸ばし、椿の髪をスッと撫でる。長い髪をひと房手に取ると彼はその髪に唇をつけた。
「髪が……まだ湿っていますね。ご入浴中だったのでしょうか？　邪魔をしてしまいましたね」
「い……いいえ。もう、あがるところでしたし」
あがるどころか入ったばかりだった。濡れた髪をキチンと乾かすには時間がかかってしまう為、椿は半渇きの状態で飛び出して来たのだ。

「大切な髪の毛を綺麗に乾かす時間を省いてしまう位、……私に会いたいと思って下さったと……自惚れても良いですか……？」
左手から湿った髪が流れ落ち、その手が彼女の頬に触れる。昨夜と同じ情熱的な目で見詰められ言葉を失う椿だが、彼女にはどうしても訊きたい事が有った。

「あの……、辻川様……」
椿は恥ずかしさを堪えて口に出す。
「昨夜なのですが……」
「はい？」
「何も……、あの、何も、してはいませんわよね？　あの……、私

が、失神してから……」

椿が訊きたい事を、総司は悟ったようだ。しかしその内容は「気絶した女に手を出す様な卑怯者ですか？」と訊かれているようなもので、男としては少々プライドが傷つけられる。

だがそんな事で怒ったりはしない。彼は答えを心待ちにする彼女を少々艶っぽい目で見ると、口元を上げた。

「貴女の意識が無い内に、貴女に何かしたか、という事ですよね？」

控えめにコクリと頷く椿に、総司は笑って答えた。

「はい。しました」

椿姫・38　『嬉し笑い』

「はっ、はじめさん？　はじめさんっっ！」
一の婚約者、さくらの慌てた声が、葉山邸の食堂で響いた。
「だっ、だれか、お水をっ」
慌てるさくらに、メイドの一人が水を用意しに走る。
「一さん、しっかりっ」
そんな彼女が手を添える先には、一の背中が有る。何と彼は今、長テーブルに身を伏せ、声を上げて笑っているのだ。
一の笑い上戸自体は時々見られる物。しかし大きく声を上げて笑う姿など、滅多に見られる物ではない。
あまりの珍しさに、食事の席に付いていた母親の麗子などは、呆然とし過ぎて今にも倒れそうになっている。

総司に挨拶をしてから食堂へ入って来た一。彼が入って来た事で嬉しそうにさくらが席を立った瞬間、彼はいきなりテーブルに身を伏せて笑い出したのだ。
――これに、家族及び使用人一同が驚かないはずもなく……。
「どうしたの、一さんっ、何がおかしかったの？　私っ？　私、何かした？」
もしかして自分のせいかと慌てたさくら。笑いを治めてあげようと必死に彼の背中をさする。
メイドが持ってきたお水を一へ渡そうとすると、彼は身体を起こし、笑いながらさくらの肩を抱き寄せた。
「有難う、さくら。いやぁ、楽しい物を拝めた」
「はっ……はい？」
戸惑うさくらだったが、一の顔を見ているうちに戸惑いは消える。

彼の表情は、おかしくて笑っている、というより、嬉しくて笑っている、という物だったからだ。
「あんな椿は、初めてだ」
一が笑ったのは、椿に対して。
頬を染め、花恥ずかしそうに男性を見詰める妹。
そんな事が、今までにあっただろうか。
気が強く、兄にさえ意見する様な小言屋。
その妹が、可愛らしい“女性”の表情を見せた。
――兄として、一はとても嬉しいのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

椿は呆然と総司の顔を見た。
彼は今、何と言った？
昨夜、椿が意識を失った時「何か」をしたか。朝目覚めてからずっと気になっていた疑問をぶつけた椿に対して、「しましたよ」と答えたのだ。
これが呆然とせずにいられるだろうか。
大切にし続けた自分の純潔が、知らぬ間に奪われているかもしれないなどと、誰が考えたいものか。
しかし更に呆然としてしまうのは、総司がそんな卑劣な行為に及ぶ男であったのかという事だ。

呆然としつつも、その表情が怒りに歪みそうになった椿の頬に、総司の手がかかった。
「……貴女の寝顔を、ずっと見ていました……」
その手が頬を撫で、顎を掬い、彼の目は彼女を見詰める。
「見ている間……貴女の頬を撫で、髪に触れ、唇を指でなぞってその柔らかさに己の届けきれない想いを馳せていました。……迎えの車が到着する間ですが……。許して頂けますか？」

怒りに歪みそうになっていた椿の表情が緩む。
「それだけ、ですか？」
真意を疑う彼女に、総司は照れくさそうに笑って見せた。
「残念ですがそれだけです」
それは本当の事。そしてそれに対して「残念です」という本音。
総司がポツリと漏らした本音は、椿を笑顔に変えた。
「それでも、迎えに来させた水野には叱られたのですよ。眠っている御婦人をじろじろと眺める物ではないと」
「まぁ」
椿は意外な事実に驚きの声を上げる。彼に意見出来る人間など居ないと思っていたのだが、そうでもないらしい。
「辻川様に意見が出来るなんて、水野さんはお強いのですね」
「彼は私の“相談役”の様なものですからね。一番信頼を置いているお付きです」
総司はずっと胸で握っていた椿の手を、自分の頬に当てる。
「ですから……私は言ったのですよ」
頬に当てた手を口元へ持ってゆく。
椿の掌を、総司の甘く熱い言葉がくすぐった。
「妻になる予定の女性なのだから、良いだろう？　と」

椿姫・39　『約束』

「妻、って……、またそのような事を……」
椿は、総司の手を振りほどきたかった。
掌にかかる吐息が熱く甘い。その場所から総司の言葉が体中に流れ込んでくるようだ。
それが不快なのではない。
その逆だから困っているのだ。
「いけませんか？　私はそのつもりなのです」
総司は相変わらずそのままで、視線だけを椿へ向けた。
「とはいっても、まだ貴女から御返事を頂いていませんね」
「……ええ……」
椿の手が熱い吐息から解放される。しかしその手は総司が握ったままだ。
「いつ、お返事を頂けますか？」
「それは……。解かりません……。いつそんな気になれるかも……私は……」
そこまで口にして彼女は気付く。この言い方では承諾前提のように聞こえやしないだろうか。

戸惑いを見せる椿。総司も早く承諾の答えを貰いたいのは山々だ。しかしここで追い詰めてしまうのは可哀想だろう。総司は椿を庇うように、別の話を切り出した。
「では、またデートにお誘いしても宜しいですか？」
「え？」
「昨夜はとても楽しかった。是非、また貴女とデートがしたい。今度は誘拐ではなく、ちゃんとお約束をしてお迎えにあがります」
ちょっと言葉に冗談を込める総司だが、その想いは本心なのだろ

う。椿の手に込められる力が強まり、彼女は少し驚いた。

総司の刺すような鋭い眼が椿を見詰める。しかし何故だろう。彼女を見詰める時の彼の目は、いつも優しく情熱的だ。

正式に将来を誓い合った訳でも無い異性と気安くデートの約束など、本来ならばすべきではないし、いつもの椿ならば不誠実だと氷柱の様な意思を持って一喝するところだ。

しかし総司の情熱は、椿の氷柱を溶かした。

「……約束、して下さるなら……」

椿は、恥ずかしげに視線を逸らす。何の事だか解からないまま、総司は黙って椿の言葉を待った。

「昨夜の様な事は……なさらないとお約束下さい。……お部屋を取って、あのような事を……。もしも私が何かの原因で倒れてしまっても、その時はそのまま邸へ帰すと……、約束をして下さい」

言っているうちに、恥かしくて顔が熱くなって来る。椿は視線だけではなく、顔ごと彼から逃げてしまった。

昨夜の様な事がないという事は、下心込みでデートに彼女を誘ったとしても、食事をしてお話しをして、それで終わりという事だ。正直、今までの人生、女性に不自由など無かった二十五歳の男性にとっては少々辛い所ではないかと思われる。

しかし総司は、羞恥に頬を染める彼女を見詰めながら、ハッキリと返事をしたのだ。

「お約束します」

少しの戸惑いも無く、約束の言葉を口にした彼を、椿はチラリと横目で見る。総司が思った以上に真剣な顔をしている事に安堵し、もうひと項目付け加えた。

「あの……、ここに、触れる事も……ですよ……？」

指先を唇に当て、約束の追加を迫るが、唇付けともキスとも言葉

では表せないままなので、ちゃんと伝わるだろうかと不安になる。
今まで二人の間で交わされた二度の唇付け。それは二度とも総司から迫ったものだ。つまりその行為を自粛してくれという事なのだ。

椿の条件に、返事はなかなか返っては来なかった。自分で約束を迫った椿を不安が襲う。
貞淑な躾と貞操観念を教育された椿には当たり前の条件だ。だがそれに付き合わせようとしているのは、彼女とは違う異性への感覚を持った男性だ。
普通ならば、付き合いきれない。
（怒ってしまわれたのかしら？）
返事を待つ時間はとても長く感じた。しかし、それは多分三十秒ほどでしかなかっただろう。
「解かりました」
総司の了解が耳に入る。彼はそのまま言葉を続けた。
「貴女が……、許してくれない限り触れない、そうお約束します」
そう言って総司は、握ったままでいる椿の手を口元に当て、指先に唇を当てる。
「お約束をしました。これで、私の願いは聞き届けてくれるのですね」
「……あ……、はい」
椿は指に総司の唇を感じながら、自分に微笑みかけてくる彼を見詰めた。
下手をすれば怒り出してしまってもおかしくは無かったのだ。しかし彼は少しも怒りを見せず、椿の要求を呑んだ。

「では、椿さんに承諾を頂けるよう、頑張るとしよう」
嬉しそうにニコリと微笑まれてから、椿は彼の言葉にからくりが有った事に気付いた。
総司が返してきた言葉をよく考えれば、椿が「良い」　と一言口

にすれば、唇に触れる事を許す、という事ではないか。

「つっ、辻川様？　騙すなんて酷いですわっ」
「騙してなどいません。貴女が『触れるな』　と言うので、貴女が許してくれない限り触れない、と言ったのです。貴女も『はい』と返事をして下さった」
「それは、よく解かっていなかったからですっ」
「しかし、約束は約束ですよ？　椿さん？」
「つっ……、辻川様っ！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（機嫌が良いな……）
ルームミラーから後部座席を覗く戸田は、総司の機嫌が異常なほど良い事に気付く。
いや、葉山邸から出て来た時から機嫌は良かった。しかし、車に乗り込んでからは、まるで楽しい事を思い出しているかのように、時々笑い出しそうになるのを堪える様な仕草をする。

（よっぽど、椿様にお会いできて嬉しいんだな）
主に運転手として、総司のお付きを勤めるようになってから十年。車中で一人楽しそうな総司を見るのは初めてだ。
そんな総司を覗き見ているうちに、戸田の口元はほころび、彼の心にまで嬉しさが溢れて来た。

自分の主人を、いつも気難しく厳しく冷たい表情が多い、辻川総司を。
こんなにも懐柔させてしまう女性。

葉山椿。

彼女が“奥様”と呼べる座に納まったのなら、きっと総司は今以上に楽しそうな笑顔を見せてくれるだろう。

戸田はそう考え、それを願わずにはいられない。

椿姫・４０　『語らい』

「辻川様は、トマトが食べられるようになったのですね」
椿が気付いてくれた事に、内心総司はほくそ笑む。ここぞとばかりにサラダ用のフォークを取り、カットトマトを口に運んで見せたほどだ。
「椿さんのお陰ですよ。流石に“私の”子供までトマト嫌いになる、と言われてはね」
以前椿は総司と軽食を摂った際、彼がトマト嫌いである事を見破った。親がトマト嫌いでは、将来子供もトマト嫌いになると彼を脅し、食べさせる事に成功したのだ。

デートの一件から二ヶ月。
あの時、またデートに誘っても良いという承諾を、条件付きで貰った総司は、週に一度程度彼女をデートに誘う様になった。
その内容といえば、食事に行く、クラシックコンサートへ行く、展覧会見学など。もちろん“その日のうちに帰る”という門限付きだ。
何とも“清い”デート内容だが、これもデートを受けてもらう為の条件。彼が椿に指一本触れられないジレンマに襲われようと、それを破る訳にはいかない。

いつも食事に誘う時は、厳選されたレストランへ連れて行かれるのだが、今日は辻川家の夕食に招待をされた。恐らくそこには“辻川家の味を知っておいてもらいたい”という総司の思惑が有っての事と思われる。
普段は総司しか席には着かないのだろうと思われる食堂は、とて

も広くテーブルも大きかった。葉山家の食堂も大きいがその比では無い。それに葉山家は、フルに揃えば五人の人間が席に着くので、それなりの賑やかさが有る。

しかし、ここは違う。

両親が亡くなってからは、この広いテーブルには総司が一人で着いているのだろう。そう思うと椿は少し寂しくなり、食事の楽しさを盛り上げる為の豪華な内装も、とても意味の無い疎ましい物の様に思えた。

「でも辻川様。まさか、いつもはお食べにならないのに、私に見栄を張る為にわざわざ今日だけ用意させた訳ではありませんわよね？」

何処と無く沈みかけた自分の心を浮上させる為に、椿は明るい口調で意地悪を言う。彼女が見せる疑いの笑顔が可愛らしくて、総司は嬉しくなった。

「見栄は確かに張りたいですね。イイ歳をした男が、実はトマトが苦手だった、という汚点の記憶を貴女から奪い去りたい」

椿に意地悪を言われようと皮肉な言葉をかけられようと、総司は全く気にならない。それどころか、遠慮をせず彼にそういった態度を取るのは、椿が総司に身内の様な親しみを持ってくれているからではないかと考え、逆に嬉しくなる。

椿の意地悪に弁解を入れる総司。その彼を助けるように、更なる説明が横から入った。

「総司様がおっしゃる通りですよ。椿様」

給仕役を務めていた、総司のお付きで辻川家執事補佐の水野だ。椿の前からスープ皿を下げ、彼は微笑みながら告げ口をする。

「総司様は椿様にトマトを食べさせられてから、毎朝食には必ず生のトマトを付けさせるのですよ。今ではすっかり平気になられました。お小さい頃から、総司様のトマト嫌いはよく存じておりましたから、私も驚いております」

「まぁ、水野さんがそうおっしゃるのなら、本当なのですね」

椿はクスクス笑いながら総司を見る。彼は、余計な告げ口をする

お付きを照れ隠しに軽く睨むが、その水野は更に主人のフォローも忘れなかった。

「私が言っても、誰が言っても言う事など利いてはくれなかったのに。総司様を教育できるなど素晴らしい。椿様の様な方に奥様になって頂けたなら、総司様に改善なさって欲しい所は全て直して頂けそうです。そうですよねぇ、総司様」

「水野さんっ」

告げ口をした水野は、椿の味方かと思いきやそうではなかったようだ。

椿を立てつつ、大きく回って主人の味方をする。水野は総司と顔を見合わせ、同意を求めた。

「そうだな。もしそうなったら、私の改善点は全て無くなるだろうな」

L字型になって席に着いているので、総司が身を乗り出せば椿に近付く事が出来る。総司はその目に、彼の弱みを口にしてしまったばかりに追い詰められた彼女を捉えた。

「私は、あなた以外の言う事を利く気はありませんから」

そう言って総司は微笑む。椿は二方向から攻められているようで困ってしまった。何とかこの話題を逸らそうと、彼女は苦し紛れに水野へ話題を振る。

「困った御主人様ですわね。脈の無い私などに構っていないで、早いところ可愛いお嫁さんを見付けてくれなければ、水野さんだって気を遣って身を固める事が出来ないではありませんか？」

すると総司と水野は再び顔を見合わせ、小さな笑い声を漏らしたのだ。

「失礼致しました、椿様」

笑ってしまった事をすぐに詫びたのは水野。そして総司が、その理由を口にする。

「水野は実に薄情な男ですよ。私を差し置いて、彼は既に身を固めています。それも、当家のメイドの中でも群を抜く可愛らしい娘で

す。何と十五歳年下だ」

「まぁっ……」

告げ口の仕返しか、言わなくても良い歳の差まで総司が口にすると、水野が苦笑いをする横で椿が驚きの声を上げる。

兄の一が十歳年下の婚約者を持っている事も驚きだが、上には上が居るものだ……。

＊＊＊＊＊

「椿さん、最近とても楽しそうですね」

そんな言葉をさくらに掛けられ、椿は近頃の自分を思い返してみた。

そしていつの間にか、毎日必ず会いに来る総司を、疎ましく感じなくなっている自分に気付く。

それどころか、週に一度“デート”と称して自分を連れ出してくれるのを、心待ちにしている様な気さえする。

（私……。どうしたのだろう……）

自分の心の動きを掴みかねている時、総司から次の“デート”の行き先を告げられたのだ。

「当家の温室へご招待いたします。貴女に、当家自慢の藤棚を見て頂きたい」

椿姫・４１　『誘い』

「でも辻川様、今は藤の季節ではありませんわ」
温室へと続く通路を、総司と二人で並んで歩きながら、椿はずっと気になっていた事を口にした。
「何故“藤棚”ですの？」
藤は春の花。花の時期は四月から五月。しかし今は七月だ。
総司に、「日曜日の午後、貴女の時間を頂きたい」というデートの誘いを受け、日曜の午後ならば何かの展覧会にでも連れて行かれるのかと予想を立てたのだが、彼が招待をしたいと言ったのは辻川家の温室。それも、その中に作られた“藤棚”を見せたいというのだ。

「当家の藤棚は特別なのですよ。まぁ、見て頂ければ解かります」
花の時期ではない藤を見せてどうするというのだろう。不思議そうな椿を、総司はただ笑ってかわすだけだ。
ただその藤棚は温室に有るという。どの程度の規模が有る藤棚なのかは解からないが、そんな大きな物が入る温室なら、さぞ大きく立派なものなのだろう。
「それより椿さんはお疲れではありませんか？　やはり車で移動した方が良かったかな？」
心配げに総司が椿を見下ろす。裏庭へと続く通路の周囲に立つ木々から、昼下がりの木漏れ日が零れ落ちる。
その光の中で見る総司の頬笑みは、とても優しげで、不覚にも椿の胸は一瞬ドキリと高鳴った。
鼓動が高まった事に彼女自身が驚く。それを悟られないよう、極力自然に視線を逸らした。

「……いえ……、大丈夫ですわ。……このくらい歩けます」

この位、とは言うものの、さっきから十五分は歩いている。

この通路をあとどのくらい歩けば裏庭へ着くのだろう。邸の中へ初めて入った時も思ったが、敷地も迷子になりそうな広さだ。

（辻川様は慣れていらっしゃるのでしょうが、この家へお嫁に来る方は大変ね）

何気なく考えた事ではあったが、その候補とされているのは、誰あろう椿自身だ。

何処までも続きそうな通路ではあるが、散歩には良いかもしれない。椿はチラリと視線を上げて、彼女の歩調に合わせて歩く総司を見た。

彼は穏やかな表情で前を見て歩いている。その横顔はとても爽やかで、夏の昼下がり、悪戯な暑さを凌ぐ風を思わせる様な涼やかさを感じさせる。

ついさっき、不覚にも胸を高鳴らせてしまった自分を思い出す。

木漏れ日の中で見た総司の頬笑みが、頭から離れない。

それを無理矢理頭の中から追い出そうと、椿は自分から話題を提供した。

「は……葉山家の裏庭にも、温室が有りますのよ。ちょっとした植物園風で、中も、お散歩が出来る位の広さが有ります。幼い頃、良くあの中で遊びましたわ」

「存じていますよ。確か、さくらさんが故郷の村から持って来られた桜の樹が植樹されているとか」

「ええ。とても綺麗ですのよ。その他にも四季の花々で彩られています。今度是非見にいらして下さい」

何気なく話していた椿だが、総司がぴたりと足を止めた事に気付き、彼女も足を止めた。

「辻川様？」

どうしたのだろうと総司を仰いだ椿の目に映ったのは、思いもよらない言葉を聞いた総司の、一驚を喫する表情。

「私を……、お誘い下さるのですか？」

「え……？」

椿へ確認をする総司は、間違いなく驚いているようだ。

椿は何故総司がこんなにも驚いているのかが解からなかったが、その答えはすぐに彼がくれた。

「貴女が、私に誘いの声をかけてくれるのは、初めてだ」

刹那。――陶磁器の様に冷たい彼の表情が、まるでその陶器が割れ落ちたかのように破顔する。

椿は小さく息を詰めた。先ほど総司の表情に彼女の全てが惹き付けられたというのに、前回以上の胸の高鳴りが彼女を襲い、頬が紅潮する。

染まってゆく頬が恥ずかしくて、顔を逸らしてしまいたいのに、それが出来ない。

いつも椿を誘うのも、追うのも総司だ。

しかし今、彼は初めて椿から誘いを受けた。

それは「葉山家の温室も見に来て下さい」という何気ない、何の下心も有さないものではあったが、椿から受けた初めての誘いに、総司は最高の至福を感じたのだろう。

「有難う……。椿さん」

総司は、頬を染める椿の右手を取り握り締めた。

「是非、伺わせて頂きます。是非貴女と、葉山家の花を愛でたい」

そしてそのまま、彼女の指先に唇を付け、想いの丈を口にする。

「――葉山家で、もっとも愛でたい華は……貴女です」

今日の自分はどうかしている。
指先に総司を感じながら、言う事を利かない胸の鼓動を誤魔化そうとしていた椿は、それをやめた。

二人の視界に、辻川家の巨大な温室が見え始めていた。

椿姫・４２　『温室』

「これが……、温室ですか……？」
椿は驚きの声を上げた。
驚き、と言うよりは“茫然とした声”という表現の方が正しいかもしれない。
目の前に現れた巨大な建造物を、果たして“温室”と呼んで良いものなのかが疑問なのだ。
「温室が見えて来ましたよ」　と総司に言われ、その方向へ目を向けた時から疑問だった。入口は見えるのに、その大きさが確認出来ない。
そびえ立つのは、巨大なガラス張りの箱。
その前で左右を何度見ても、何処まで続いているのかが解からないのだ。このガラス張りの壁全てが温室だというのか。
葉山家の温室も大きいが、その比では無い。
「どうぞ」
総司は扉を開け、椿の右手を取り、中へと招き入れる。
「足元に気をつけて下さい。芝に、脚を取られぬよう……」
一歩足を踏み入れた瞬間、人口の風がふわりと吹き、彼女の漆黒の黒髪を揺らす。腰まで垂らされた椿自慢の美しい絹糸は、生き物の様に舞った。
その風と共に目の前に広がった光景に、椿は驚愕する。
花々と木々が、自然に、それでいて計算され尽くしたかのように佇む美しい光景。それは自然が作り出す芸術品。まるで造られた自然公園の様だ。
あまりにも壮大な光景に胸が詰まり言葉が出ない。違う空間に、間違って足を踏み入れてしまったのではないかという錯覚さえ起こ

させる。

微かに身体を包み込む恐怖感。

椿は感じた気持ちそのままに、手を取ってくれている総司の手を握り締めてしまった。この手を離されたら、自分はこの光景の中に迷い込んでしまうのではないか。そんな、有り得ない想像が彼女を襲う。

「大丈夫ですよ……」

そんな椿に、総司は身体を寄せ、優しく囁く。

「絶対に、離しません」

椿が握ってしまった総司の手が、彼女の手を力強く握り返した。

「離さない」　そう言ったのは手の事だ。けれど椿は、不本意にも体温が上がって行くのを感じていた。

総司はゆっくりと、温室の中央へ向かって歩いて行く。

椿の歩調に合わせ、怖がる彼女に気遣ってその歩調より更にゆっくりと。

この広大な温室に、彼女が感じた恐怖感。それに対して自分を頼ってくれた事が、総司は嬉しかった。

椿を大切にしたいという気持ちが、いつも以上に大きく彼の心を満たす。

総司に手を取られ足を進めながら、椿は早く、この身体に感じる熱が冷めてくれる事を願う。

いつまでも大きく打つ事をやめない鼓動。まるで高熱を出してしまった時の様に身体が熱い。

（私……、おかしい……）

自分の心を掴みかねる椿は、この雰囲気に流されてしまいそうな気持ちを抑え、いつもの自分を取り戻そうと意識した。

「こんなに大きな温室をお持ちの御当主様に、当家の温室を見に来てくれなどと、失礼を申してしまいましたわね……。申し訳ありません」

椿はなるべく、いつも通りの女性らしい凛然とした口調を心掛ける。意識しなければそれが出来ない、今の自分を不思議に思いながら。

しかしそんな椿を、総司は不快な目で見た。

「駄目ですよ、椿さん」

嫌味っぽい事を言ってしまっただろうかと、一瞬焦りを感じた椿だが、総司はそんな事で怒ったのではない。

「そんな事を言って、やはり葉山家の温室に招待する話は取りやめ、とか言うつもりですね？　それはいけませんっ。私は既に来週にでもと思い、楽しみにしているというのに」

「そっ……、そんな事は言いません！」

椿は慌てて否定をした。これは総司の早とちりだ。深読みにも程がある。

――しかし、二年以上椿に冷たくあしらわれて来た総司にしてみれば、そう考えてしまうのも無理は無い事なのかもしれない……。

椿は慌てながらも、どこか子供の様に聞こえる総司の口調に笑みが浮かぶ。大組織の総帥らしかぬその様子が、妙に心へ沁み込んで来てしまったのだ。

「……来週ですか？」

椿は心のままに浮かぶ笑みを隠そうともせず、総司が口にした“葉山家の温室へ招待をする日”を口にする。

それが嬉しかったのだろう。総司も嬉しそうに笑ったのだ。

「はい。来週の日曜です。宜しいですか？」

椿に確認を取る事無く決めてしまっていた総司。いつもならば押し切るところだろうが、この場合は彼が椿に招待をされたのだ、確認を取るのは当たり前だろう。

自分が決めた事に対して、他人に承諾を求めるという初めての行為を、彼は椿に対して行ったのだ。

「宜しいですわ。了解いたしました」

「約束ですよ？」

「はい」

彼らしかぬ確認と、椿の恥じらう頬笑みで、約束は成立した。――

椿姫・43　『藤棚』

「椿さん？」
それは、何度目の呼びかけだったのだろう。
確実に三回以上は総司に声をかけられていただろう。その何度目かの呼びかけで、椿はやっと総司に目を向けた。
「……はい？」
少々茫然とした声。何度も呼ばれ、失礼にも返事をしていなかった事さえ、今の彼女の頭には無い。
「どうしました？」
総司は、まるで椿がこういう反応を示すであろう事を予測していたかのようだ。呼びかけに返事をしなかった事を責める訳でもなく、余裕の笑みで横に立つ彼女を見詰める。
「すみません……あの……」
椿はまだ茫然としたまま詫びを口にし……。
「あまりにも……“藤”が見事で……」
そして、目の前に立つ、“藤棚”に視線を戻した。

ザザザッ……と、垂れ下がる花達がさざめく。
花の時期はとうに終えているというのに、蔦も花も生命力に溢れ、まるで意思を持った生き物の様にその姿を見せつける藤棚。
花はほぼ満開。
時折送られる人工風に揺らされて聞こえる藤達のさざめきは、まるで椿に何かを語り掛けているようだ。
さざめく度に舞い落ちる花びらの、何と幻想的な事か。

「藤が、椿さんを歓迎しているようだ。今年の藤は、とても美しい。もっと近くで見てやって下さい」

総司の言葉に押されるように、椿は一歩前へ足を進める。
とても大きな藤棚だ。今まで見た事が有る物の中で一番の大きさだろう。
藤に誘われ、椿は自然とその下へ入り、藤達を仰いだ。計算された様な美しさを見せる藤は、まるで「いらっしゃい」と本当に椿を歓迎してくれているよう。
その姿は、壮大で優美。薄紫が咲き乱れさざめく様は、未知の生物の体内に呑み込まれてしまったかのような錯覚を彼女にもたらし、おかしな興奮を与える。
よく、“咲き乱れる桜の花を見ていると気が狂いそうになる”などという例えが有るが、そんな桜にも負けないほどの藤の狂宴。しかし何故だろう。恐怖は感じない。逆に何か神秘的なものさえ感じる。

「……“神様が咲かせる藤”」
いつの間にか椿の背後に歩み寄っていた総司がその言葉を口にすると、それに反応するかのように藤がサワサワッと揺れた。人工送風によるものなのだろうが、あまりにもタイミングが良すぎて、椿はちょっと驚いてしまう。
「この藤は、ほぼ一年中花を咲かせ続けます。五分咲きであったり、八分咲きであったり。一年中温かい温室の中に建つ藤棚とはいえ、非常に珍しい事ですよ。そのうちにこの藤を見た方々から『神様が咲かせる藤』と呼ばれるようになりました」
総司は軽く手を伸ばし、彼のすぐ横で垂れ下がる藤の表面を撫で、穏やかに微笑む。彼は身長が一八〇センチ以上あるのだが、その彼が下に立っても藤棚は余裕の大きさだ。高さも大きく取られているのが解かる。

「眩暈がしそうです……」

藤を仰いだまま、椿は呟く。

「藤の花が……、あまりにも見事過ぎて……」

藤の姿で頭がいっぱいだ。意識を全て藤に持って行かれそうな、軽い脱力感が彼女を襲った。そのせいで足元に浮遊感を覚え、このまま崩れ落ちるのではないかという予感に、彼女は地に付けた足に力を入れる。

しかし実際に力は入っていなかったらしく、いつの間にか身体が傾いて来ていたのだろう。背後に近付いた総司に両肩を掴まれ、椿は全身の力が抜けかかっている自分に気付く。

「あ……、申し訳ありませ……ん……」

どこか意識が朦朧としかかっている。まるで藤に酔ってしまったかのようだ。

「力を抜いてくれて構いません。私が、支えていますから」

総司はそう言いながら、椿を支えたままゆっくりとその場に膝を落とし、彼女を芝の上へ座らせた。

静かに舞い落ちる花びらが椿の頬に触れ、甘えるように膝へと落ちる。

「本当に見事な藤……。これは、いつからここに有るのですか？」

すぐ斜め後ろに腰を下ろした総司へ視線を流し、問いかける。刹那、彼が辛そうに眉をひそめたのを、椿は何故かハッキリとその目に焼き付けてしまった。

「この藤は、私の亡くなった母が望んで植えたものです。――私が、産まれた時に」

「それでは、二十五年物なのですね」

「最初はもちろん、これほどの大きさはありませんでした。半分も無かったでしょう。ですがだんだんと大きくなっていった……」

「辻川様が御立派になられるにつれて、藤も一緒に成長をしたのですわ。では、今のこの藤が壮大なのは、辻川様の偉大さを表しているのかしら？」

椿としては、総帥としての総司を称賛したつもりだった。誰が見てもこの藤は壮大で、見ている者を圧倒する力が有る。総司の存在にも共通するものが有るではないか。

「“神様が咲かせる藤”と呼ばれるようになったのは、……五年前、私が辻川の全てを引き継ぎ、総帥の座に着いた時からです」

それならば間違いなく、この藤は総司の存在を表していると考えても良いではないか。お世辞ではなく、そう思ったままを口にしようとした椿。しかしその言葉は、総司の一言に消される。

「藤が狂い咲くようになったのは……、私の両親が、落雷による飛行機事故で亡くなった時からです」

辛く重い口調で藤を仰ぐ総司。

初めて見る彼の苦悩する表情に、椿は息を詰めた。

椿姫・４４　『秘密』

「世間的には、車の事故で亡くなったとしか公表されてはいません。下手な混乱と詮索を避ける為です」

総司の声は苦しそうだった。こんな彼の声は聞いた事がない。

「自家用機で渡米中、帰国しようとした機が飛び立った瞬間を、突然の落雷が襲ったのです。――雷の気配などは無かった。全くの晴天だったそうですよ」

まさしく、それは天災。人間が予想し得ない自然の脅威。

総司は藤を見上げたまま、不意に口角を上げる。

「……時を同じくして、この藤棚も落雷に遭ったのですよ。天窓を一直線に突き破り、この藤に落ちた……。不思議なものだ。父と母が命を奪われた同時期に、藤にも雷が落ちるなんて」

椿の目は、総司の表情に釘づけになっていた。そして耳は、彼の苦悩に満ちた声を余す所なく取り込んでゆく。

「この藤が……、狂ったように花を付け始めたのは、それからです……」

落雷を受けているのに、藤には傷一つ付いていなかったという。しかし藤棚が落雷を受けたのは、温室の整備をしていた者達が見ている。間違いは無いのだ。

「突然の落雷で、何か遺伝子に異常が生じてしまったのかもしれません。不思議な事ではありますが、有り得ない話では無い。そう超自然科学の博士に聞かされました」

「恐ろしいですわね……。雷が、そんな……」

前総帥夫妻の事故死にそんないわくが有ったとは。そんな事は、もちろん椿が知り得る物では無い。総司から聞かされるその事実に、

彼女は自然の脅威を感じ、うすら寒い恐怖感さえ覚えた。

だかこれは、外部に洩らしてはいけない秘密事項ではないのか？

いや、こんな話を聞いたからと言って、総司の許可無しに周囲へとふれて回る気はもちろん無い。しかし椿は一応の為、総司に約束をした。

「あの……、辻川様……。私、口外はいたしませんので、御安心なさって下さいね」

藤を見詰めていた総司の視線が、椿へと流れる。彼女と視線が合うと、彼は今まで湛えていた苦悩の表情を穏やかに解いた。

「有難う、椿さん。こんな話をされて困惑されたかもしれませんが、私は、貴女には知っておいて頂きたかったのです」

ごく身内しか知らない事実を、椿には知っておいて貰いたかったと言う。

それはもちろん、彼女を“ごく身内になる者”として考えているからこその気持ちだ。

椿はまだプロポーズの返事をしてはいないのだから、そんな考えの元で秘密事項を話されるのは少々気が引ける。だが、それを責めたり怒ったり出来る話の内容では無い。

見た事も会った事も無い先代だが、突然の事故で亡くなったとはいえ、跡取りの総司は二十歳という若さの頃から、この巨大組織をシッカリと動かしている。きっと安心して眠りについている事だろう。

「先代様も、きっと御安心なさっていますわ。辻川様は、こんなにも御立派な総帥様になられたのですもの。辻川様には、怖い物などお有にはならないでしょう？　存じておりますわよ『目で人を殺しながら仕事をする』　などと言われているのでしょう？」

場の空気が少々沈み過ぎたせいか、椿は明るめの口調で総司を称え、そしてからかう。

彼女としては、亡くなった両親を思い出させてしまったこの雰囲気を、何とか変えたかったのだ。

「怖いモノならありますよ。――私は今、貴女がとても怖い」

その返事は、椿の思惑が上手く行ったのかを思わせた。しかし総司は、すぐに自嘲の笑みを浮かべたのだ。

「でもね椿さん、笑われるかもしれませんが、私は“雷”が怖いのですよ」

「雷ですか？　私も好きではありませんわ」

「雷は私から、尊敬する両親を奪って行った。そして、総帥としての心構えも覚悟もまだシッカリと持てぬ二十歳という若輩者に、この大組織を与えた……」

椿は今やっと、総司と藤を比べ、藤の壮大さを見ながら総司を褒め称えた事を後悔した。

褒め称えるのは悪い事では無い。しかし、両親の話を聞いたうえで考えると、それを口にしたのは少々無神経なところが有ったのかもしれないと思うのだ。

決して、苦労が無かった訳ではないだろう。悩みが無かった訳ではないだろう。

幼い頃からその教育を受けてはいても、何の覚悟も無いまま、いきなり受け継いだ“総帥”の座。

弱冠、二十歳。

椿など想像も及ばぬところで、様々な思惑が働いたに違いない。

総司は、自分という物を強く持っていなければ、それに立ち向かう事など出来なかっただろう。

それこそ、“目で人を殺しながら仕事をする”……などと周囲に言われるほどの脅威を、“意に沿わなければ女性にでも遠慮なく手を上げる”……などと言われてしまうほどの傲慢さを持たなければ、彼は“辻川総司”でいる事は出来なかったのかもしれない。

「先代は、とても立派で大きな人だった……。私は、もっと彼から、学びたい事が沢山あったのに……」

総司は心の中に溜められた思いを絞り出し、椿から目を逸らして両目の上を片手で覆った。不覚にも感傷的になってしまった自分を、彼は下唇を噛んで戒める。

「辻川様……」

椿は総司へと向き直ると、少し身を乗り出し、目の上にある彼の手に触れる。

「……申し訳ありません……。辛い事をお話させてしまいました。……。どうかお許し下さいな……」

椿の手と彼女の優しい声を感じた総司は、目を押さえていた手を外し、悲しみを湛えたその眼差しを彼女の前に晒す。

椿がその瞳に大きく胸を高鳴らせた時、彼の両腕は彼女の細い腰を引き寄せ、華奢な身体を抱き締めたのだ。

藤の花びらが……。

そんな二人を見守る様に、静かに舞った。――――

椿姫・４５　『唇付けの魔法』

「椿さん、どうか、逃げないで下さい……」
あんな話を聞いた後で、こんな声で哀願されて、何故無碍につき離せるというのだろう。
そんな事、もちろん椿に出来る筈が無いのだ。彼女は総司の腕の中で、特に抵抗をする事も無くその身を預けた。
抱き締められた身体に、総司の胸の硬さと男らしさが伝わって来る。スーツ全体から品の良い香りが漂い、椿をトロリとした心地良さへ誘った。
知らず頬が紅潮する。この感覚は以前にも経験をした。二ヶ月前、“誘拐”と称したデートに連れ出される時に、総司にされた“お姫様抱っこ”の時だ。

「椿さん……」
椿が大人しく総司の胸に身を預けてくれた事に安心をしたのだろう。総司の呼びかけに椿が仰ぐと、彼は彼女の唇に人差し指を軽く当てた。
「――ここに……、触れても良いですか……？」
「え……？」
椿は一瞬何の事だか解からなかった。そして思い出したのだ。二ヶ月前、最初のデートの後にした“約束”を。
椿の許しが無い限り、一方的に彼女へ唇付けを施す事は、決してしない……、と。
だが、彼は今、椿にその許しを請いている。

椿の唇に触れる許しを……。

「……はい……」

何故、そう返事をしてしまったのか……。

その時、椿は何も考える事が出来なかったのかもしれない。

藤が彼女に魔法をかけ、総司の香りに彼女は酔ってしまったのかもしれない。

椿はとろりとした瞳で総司を見詰め、その赤い唇から承諾の音を奏でる。

その他に、言葉は何も要らない。

彼女が発する“承諾”だけが、今の総司にとって最高の慰めだ。

ザザザッ……と、藤がさざめく。花達をさざめかせるだけの送風が有ったのかどうか、椿には解からない。

今彼女が感じられる物は、抱き締める総司の腕と、彼の唇だけ……。

彼女を両腕に抱き、指に絹糸の黒髪を絡めて頭を支える。

総司は椿の唇に軽く触れ、強く押しつけ、時に唇でなぞり、彼女の唇の柔らかさで心を落ち着けてから、少々強く吸いついた。

「……んっ」

椿は驚いて身体を固めようとするが、その瞬間総司が軽く唇を離し、彼女の唇に囁く。

「呼吸をして下さい……。私に合わせて……」

そしてすぐに合わさる唇。その言葉に、二ヶ月前総司に濃密な唇付けを受けた際、上手く呼吸も出来ず、酸欠の様になってしまっていた自分を思い出した。

総司の唇付けは、とても情熱的で濃密だった。

唇を吸い、その柔らかさを支配するだけでは無く、彼は無防備だ

った椿の舌を優しく絡め取り、擦り合わせ、軽く吸う。その度に唇や舌に彼の呼吸を感じた椿は、それに合わせて自分も呼吸を行った。

そうするとどうだろう……。

身体が緊張して固まる事は一切無く、気持ちがとても楽な物になったのだ。

それどころか総司の唇の感触がとても心地良く、悪戯に刺激される舌先が、全身におかしな歯痒さを与えて来る。

体温は上がり、胸の鼓動は高く、全身を襲うのはおかしな陶酔感。

感じた事の無いこの身体の異常に、椿は戸惑う。

「……辻川、さま……」

時折離れる唇の隙間から、今度は椿が総司に哀願する。

「もぅ……、あの……」

これ以上されたら、更に自分がどうにかなってしまいそうで怖い。

椿は、彼女を抱き締める総司のスーツの腕を両手で掴んだ。

「椿さん……」

総司は優しく椿の名を呼ぶが、それとは対照的な強さで彼女の唇を奪い、その情熱を見せつける。

（私……、おかしい……）

将来を約束した相手でも無い男性と唇付けをかわし、それに抵抗もせず、そしてその事に表現し切れないほどのおかしな感覚を得ている。

その事に椿は、温室に入る前に感じた自分を再認識する。

今日の自分は、一体どうしてしまったのだろう……。

「もう、辻川様と呼ぶのは、やめて下さい……」

総司が囁く吐息が、唇に感じられる。その声を、とろりと混濁する意識の中で、彼女は聞いた。

「――“総司”と、お呼び下さい……。はい、とお返事下さるまで、やめません……」

簡単な引き換え条件だが、今まで出会ってから二年半、ずっと「辻川様」と呼んでいたのだ。いきなり、それも、下の名前など口に出来るものではない。

しかし、忘れてはならない……。

今日の彼女は、どこか“おかしい”のだ……。

「……総司……様……」

小さな彼女の囁き声が、唇の端から漏れる。

唇を解放する為の条件は果たされたというのに、総司は唇付けをやめなかった。

（私、……おかしい……）

身体が、女性としての悦びを感じているのだという事にも気付けぬまま、椿は唇付けの陶酔感に身を委ね続けた。

狂い咲く藤の花が、彼女の理性を狂わせ……。

総司の唇付けは、彼女を魔法にかける。

――ワタシ、オカシイ……。――

椿姫・４６　『夢の後』

「総司……様……」

こんな声を自分が出せるという事自体、椿は知らない。

きっと、何度も総司の名を呼んだ。

きっと何度も、この震える手で、彼のスーツを掴み直した。

しかしそれさえも、椿は気付いてはいない。

藤棚から垂れ下がる花がさざめく中、その藤の下に座り、身を寄せ合い、唇を重ねる二人。

総司の情熱的で甘い唇付けに酔わされて、椿は彼の腕から逃れられない。

いや、逃れるつもりは無いのかもしれない。

彼の唇は、いつの間にか彼女の唇を離れ、同じ位柔らかく羞恥に染まった耳朶を食む。ただでさえ熱さを感じる耳朶に、更に熱い吐息と唇を感じ、そこから伝わる痺れと共に、耳が溶け落ちてしまうのではないかという感覚が襲った。

「つか、さ、様……もぅ……」

息が上がり、胸が苦しい。身体中を包む痺れにもう耐えられない。

上質なスーツにシワを作ってしまう位強く彼の腕を掴み、その手は小刻みに震える。切なく艶めいた椿の声は、当然の様に総司の体温も上げていた。

もうやめて欲しい。という気持ちと、やめないで欲しい、という気持ちが混在し、椿は自分の気持ちが解からなくて泣きたくなってしまう。

不安な気持ちはそのまま表情に出てしまっていたのだろう。耳か

ら唇を離した総司は、椿を見詰めて優しく言ったのだ。
「そんな、泣きそうな顔をしないで下さい……」
泣きそうな顔などしているのだろうか。自分の気持ちが掴み切れない椿は、ぼんやりと考える。今、自分がどんな表情をしているのかさえ解からない。

「貴女を、泣かせるつもりなど無いのです……」
総司は再び、両腕でシッカリと椿を抱き締めた。
「もう少しだけ……こうさせていて下さい……。お願いですから……」
もう解放して欲しかったはずなのに、総司の胸と腕の強さを感じた椿は全身の力を抜いた。
彼が抱き締めるまま、抱き締められるままに、その腕の中へ身を委ねたのだ。

「――椿さん……。好きです……」

総司の囁きは、椿の耳から身体中に沁み渡り、そして、藤の花のさざめきに消されていった。

＊＊＊＊＊

その日、椿が葉山家へ戻ったのは、夕食に時間帯だった。
本当ならば総司は、椿と共に夕食を摂ってから葉山の家へと送り届けたかったのだが、温室で夢の様な時間を過ごした後、椿自身が「帰りたい」　と希望したのだ。
もしかして、温室で聞いた話や総司にされた唇付けが怖くなって、それで「帰りたい」　と希望したのではと、彼らしくなく不安にな

るが、そんな彼に椿は頬を染めて言ったのだ。
「今日、これ以上、総司様の傍に居たら……、私が私では無くなりそうです……」　と……。
意味有り気なその言葉に、総司が嬉しさを感じたのは言うまでも無く、彼はその願いを聞き入れた。
更に椿が、温室を出た後もずっと「総司様」　と名前を呼んでくれるのが、更に彼を舞い上がらせたのだ。

「次の日曜を、楽しみにしています」
別れ際、総司は約束を確認しながら、ベンツの後部座席で椿の手に唇を付けた。指の先だというのに、その感触に胸が高鳴る。それを誤魔化す為に、椿は意地悪を口にした。
「あら？　まるで日曜日までお会いしない様な言い方ですのね？」
「とんでもない。毎日会いに来ますよ」
その意地悪に、もちろん総司は受けて立つ。そしてもう一度、椿の指先に唇を付けたのだ。
「貴女が、本当に“貴女では無くなってしまう”まで……」

＊＊＊＊＊

最初の予定のままならば、椿は総司に進められるであろう夕食の席への招きを受けるつもりでいた。
しかし、突然それを受けられない理由が出来てしまったのだ。
彼女は、早く着替えたくて堪らなかった。ワンピースを汚してしまった訳ではない。汚してしまったのは、別の物。それも温室で。
「……恥かしい……」
“下着”を替え、普段用のワンピースに着替えた椿は、食事へ下りてゆく事も出来ないまま、目の前にかけられた大きな鏡を見詰め

た。

クローゼット横の壁に取り付けられた、周囲の装飾が美しい鏡は、彼女の全身を映し出す。

そこには、男性に唇付けられ、生まれて初めてその行為に“快感を得る”という経験をした椿が立っている。

鏡に映るそんな自分を正視出来ない。はしたない表情をしてはいないだろうか？　頬の紅味は消えているだろうか？　だらしなく熱に浮かされた目はしてはいないだろうか？

身体の接触で気持ち良さを感じると、女性としてのホルモンが分泌されるのは知っていたが、椿はそれを月経前の下り物と同じような物だろうと考えていた。

しかしそんな物では無かった。藤の下から立ち上がろうとした時、怖くてしばらく立ち上がれなかった位だ。

「どうしました？」　と総司に訊かれても、まさか唇付けを受けて潤ってしまったとは言えない。「ちょっと熱に浮かされています」と誤魔化すと、総司は優しく彼女の両腕を取り、ゆっくりと立ち上がらせてくれた。

きっと彼は、椿が彼の唇付けで立ち上がれなくなるほど酔ってくれた事に、男としての幸せを感じた事だろう。――

椿姫・47　『報告』

「総司様……」

その名を呟くと身体中がドクリと脈打つ。それを抑えたくて、椿は自分で自分を抱き締めた。

“辻川総司”という男性に関わって行くに従って、自分や自分の心がどんどん違う物になって行っている様な気がする。

椿はそれが、とても怖く感じるのだ。

鏡の自分に背を向け、息をひとつ吐く。その時ドアにノックの音がして、椿の返事を待たずドアが開いた。

「椿、眠っているのか？」

ちょっと心配そうに飛び込んで来たのは一だ。いつまでも彼女が食事に下りて来ないので、何か有ったのかと気になり、食事の席を外して来たのだろう。

「すいません、お兄様。着替えていただけですわ。すぐに参りますから」

一の手前、笑顔を作り、彼の傍へ自分から歩み寄ると、一は肩を落として安堵する。

「そうか。着替え中とは気付かなかった。すまないな。――今日は、帰って来るのがいつもより早かったので、何か有ったのかと不安になったんだ」

「何もありませんわ。家族と食事が摂りたいから、早めに帰ってきただけです」

「そうか。じゃぁ、……大介も、もう少し待たせておけば良かったな」

「大介さん？」

いきなり耳に入った本来の想い人の名前に身体が固まる。椿の身

体を、何故か罪悪感にも似た感覚が襲った。
「お前に、直接話したいと言っていたのだが……」
「何をですか？」
大介が自分に直接話とは何だろう？　好きな人からの御指名なのだ、本来ならば高鳴る筈の鼓動は、何故か冷汗となって彼女を襲う。
「大介の結婚が決まったのだ。それを、直接話したいと言って、さっきまで居たのだが……」
その瞬間、視界が真っ白になりそうな自分を、椿は感じた。
「まぁ、三年前に婚約した時、大介が大学を卒業するのと、相手の娘さんが高校を卒業するのが同時だという事で、『卒業したら結婚』という約束はされていたのだ。解かっていたといえば解かっていた時期ではあるな。二人が卒業をして、大介が入社する前に結婚式を済ますらしい。式は来年の三月だ」
一通り説明をする一の声は、椿の耳から入ってそのまま抜けて行ってしまったのかもしれない。椿は全くその話が頭に入っては来なかった。
解かっていた事だ。大介には婚約者が居る。いずれ結婚をするというのは、解かっていた事ではないか。
それなのに椿の心の中には、胸を潰さんばかりのショックが去来する。
「今日はその報告をしに来ていたのだ。お前と話がしたそうだったが、お前もいつ戻るか解からなかったからな。明日、また来ると言っていた。……椿？」
話している最中、椿が何の返事もしないのでおかしく思ったのだろう。一の呼びかけに椿はハッと我に返る。
「どうした？」

一が心配そうに顔を覗き込んで来たので、椿は慌ててその場を取り繕った。

「……な、何でも有りません。突然の事だったので、驚いてしまっただけですわ。……だって、大介さんが御結婚なさるという事は、お兄様が御結婚なさるのと同じ位、身近に感じる出来事ですもの……」

知らず動揺して早口になってしまっている自分を感じて、椿は大きく深呼吸をした。息を吐いて心を落ち着け、改めて一の顔を見ると、彼女はいつもの頬笑みを兄へ向ける。

「嬉しいわ。とても素敵な事ですね。明日お会いしたら、おめでとうを沢山言わなくては。もぅ、『うるさい』　と言われてしまいそうなくらい言ってしまおうかしら」

クスクスと笑いながら言葉を口にする椿を見て、一はどこかホッと胸を撫で下ろす。彼女の様子が少しおかしかったので、心配だったのだろう。

「それでだ、椿、お前は大介の相手のお嬢さんに会った事が無いだろう？　結婚の時期が決まった事を祝って、我が家で気楽にお茶会でもと思っているのだが……。どうだ？」

「まぁ、素敵。じゃぁ、大介さんの婚約者の方にお会い出来るのね」

一は会った事が有るらしいのだが、椿は大介の婚約者に会った事が無い。いや、会える機会が有ったとしても、彼女はそれを避けていたかもしれない……。

しかし、結婚も正式に決まってしまったのだ。これはおめでたい事ではないか。自分の嫉妬や醜い感情で「会いたくない」　「祝いたくない」　などとは絶対に言ってはいけない事だ。

「来週の日曜日、予定を立ててある。お前も、日曜は空けておきなさい」

「解かりました」

そう返事をしてから、椿の表情がハッと固まる。

「どうかしたのか？」
椿の様子に気付いた一が問いかけるが、彼女は微笑んで首を横に振った。
「日曜……、ですね……？　解かりました」
椿は思い出したのだ。
その日は、総司を温室へ招待した日だと……。

椿姫・４８　『罪悪感』

「彼女がさ、凄く椿ちゃんに会えるのを楽しみにしているんだ」
大介の笑顔と言葉は、予想外にも椿の心の中へ素直に入って来た。
「嬉しいです。私も楽しみですわ。お兄様に、大介さんの婚約者はとても可愛らしい方だと御伺いしていましたから」
それなので椿も、素直に笑顔でそう答える事が出来たのだ。
しかし大介は、彼女の素直さに残酷な便乗をする。
「かわいいよぉ。椿ちゃんもビックリだよ、きっと！」
「まぁ、大介さんにノロケられたのは初めてです」
椿が故意に驚きの声を上げると、二人は顔を見合わせ、声を出して笑った。

大学のキャンパス内を、二人は肩を並べて歩いていた。椿が通う短大では無く、大介が通う西海学園大学の方だ。
二人とも既に夏休みには入っているのだが、大介は休み中も大学へ来て勉強や教授の研究の手伝いをしたりしている。
昨日は夜まで椿が帰って来るのを待っていたと聞かされ、今日また足を運ばせてしまうのは失礼だと感じた椿は、自分から大介の元に足を運んだのだ。
時々すれ違う男子学生が、目を見開いて振り返って行く。もちろん、初めて目にするのであろう“葉山の椿姫”に目を奪われているのだ。
「椿ちゃんと歩いていると、スッゴク男の視線を感じるなぁ。一が大学に居た頃を思い出すよ」
すれ違う男子学生のほとんどが振り返って行くのを感じ、大介は苦笑いを漏らす。思わず一と共に大学へ通っていた頃を思い出して

しまったようだ。この妹にしてあの兄あり。一緒に歩いていると、すれ違ったほとんどの人間が振り向き目で追っていたのを、大介は懐かしく思い出した。

「あら？　お兄様は男性にも振り向かれていましたの？」

「椿ちゃんは妹だから見慣れていて解かんないだろうけど、男も振り向くよ。正直イイ男だから。振り向かなかった女性はいないくらいだなぁ。あれだけモテて、大学時代に女の噂ひとつなかったんだから、ホント変人だよ。――あっ、ここのところは、さくらちゃんに内緒だからね」

一の過去をばらしながらもシッカリと口止めをする大介に、椿はクスクス笑いが止まらない。兄の笑い上戸がうつってしまったのかと、一瞬不安になったほどだ。

大学の中庭を歩きながら、椿の心は、時折髪を揺らす風の様に爽やかで、暖かい思いでいっぱいだ。

とても穏やかで優しい気持ち。

大介と一緒に居ると、いつもこれを感じる。まるで大介の人柄そのままのようなこの感覚が、椿は大好きなのだ。

また、大介という想い人と一緒に居られるからこそ、こんなに穏やかな気持ちになれるのだろうと彼女は思う。

「でも、ごめんね。わざわざ椿ちゃんの方から来てもらって。僕が行っても良かったんだよ。今日は昼過ぎには帰れる日だったし」

「いいえ。昨日お待たせしてしまったのに今日も足を運んで頂くなんて失礼ですわ。そんな事お気になさらないで」

そうは言いつつも、椿には別の思惑があった。

大介が葉山家に来ている時に、総司が御機嫌伺いに来てしまったら、優先順位上、椿は大介の傍を離れて総司の元へ行かなくてはならない。そしてそうなれば、総司と大介が顔を合わせる可能性だってある。

昨日の一件があるせいか、椿は総司の顔を見るのが何となく照れ

臭い。顔を見たら、きっと真っ赤になってしまう予感さえするのだ。
――そんな自分を、大介に見られたくは無かった……。

「最近葉山家に行っても椿ちゃんは出かけている事が多いから、こうやって二人で話すのは久し振りだね」
大介の手が頭にかかり、椿の頭をポンポンっと撫でる。この優しい仕草が、椿は小さな頃から大好きだ。
「そういえばそうですわね」
「さくらちゃんに聞いたよ。最近良くお出かけしてるって」
椿はドキリとする。彼女が出かけているのは、大体総司に誘われた時だ。大介は椿が総司と出かけている事を知っているのだろうか。それが“デート”である事も……。
いや、そこまでの事を、椿は一にもさくらにも言ってはいない。まさかそこまでは知らないだろう。

自分でも気付かないうちに、椿は不安そうな表情をしてしまっていたのかもしれない。
大介はその表情に何かを悟ったのだろうか。それ以上の事を彼女には訊かなかった。

この罪深い気持ちは何だろう。

好きな人が居るのに、その人では無い男性の誘いに乗り、“デート”をして……。
唇を重ね、それに酔った自分……。
そしてその事を、意図的に想い人から隠そうとしている。

――この、焦りの様な気持ちは、何だろう……。

「何にしろ、日曜日、楽しみにしてるよ」

ニコリと爽やかな笑顔を見せてくれた大介に、椿はホッと気持ちが楽になる。

「はい。私も楽しみです」

ホッとした気持ちと……。

罪悪感……。

その罪悪感を、今度は総司へと感じながら、彼女は総司とかわした日曜日の約束を、反故にしたのだ……。

椿姫・49　『嘘』

「そんなに気にしないで下さい。お友達のお見舞いなら仕方が無いですよ」

何故、そんな嘘をついてしまったのだろう。

そう思うと、椿の胸は張り裂けそうなほど苦しかった。

「正直、残念ではありますが、なに、楽しみが延びたと思えば良いだけだ。日曜日は、仕事でもしながら貴女へ心を馳せるとしよう」

総司は何の疑いも無く、いつも通り陶磁器のように綺麗で勝気な頬笑みを彼女に向ける。

だが、その表面を覆った様な頬笑みがどこか柔らかく見えるのは、やはり先日、藤棚での一件があったせいだろうか。

「お約束をしたのに……、申し訳ありません」

両手で包み持ったアイスティーのグラスが、いつもより冷たく感じる。それは恐らく、この愚かな嘘に体中の血の気が引いてしまっているせいかもしれない。

いつものように、椿に会う時間を特別に作り、葉山家へやって来た総司。

彼女に会える事を心待ちに通されたいつもの客室で、彼は残念な報告を受けた。

葉山家の温室へ招待すると約束をした日曜日は、病気で臥せっている学友のお見舞いに行く事になってしまったと、伝えられたのだ。

――もちろん、それは嘘だ。

椿はどうしても、総司の前で大介の名前が出せず、約束の変更を受け入れてもらえそうな理由を考え出した。まさか、病人を二の次にしろとは言わないだろうと考えたのだ。

詫びを口にしたまま、椿はなかなか顔を上げられない。自分は今、嘘をついているのだという思いが、彼女に総司の顔を正視出来なくしている。

そんな椿を見て、約束を守れなかった事にこんなに胸を痛めてくれるとは、彼女は何て優しい女性なのだろうと、総司は椿を信じて疑わない。

「椿さん……」

総司は席を立つと、向かい側のソファに座る椿の後ろへ回り、彼女の両肩に手を置いた。

「顔を上げて下さい、椿さん」

肩に置いた両手を腕へと滑らせ、半袖から伸びた素肌の上で止めると、総司はその腕をやんわりと握る。

腕に彼の手の温度を熱いくらいに感じ、椿の頬はだんだんと染まって行った。血の気が引いた身体に、総司の手が触れた腕と染まった頬だけが妙に熱い。

「ほら。目の前に私はいません。俯いているなんて貴女らしくないではありませんか。顔を上げて下さい」

どうやら総司は、彼女に顔を上げさせる為に後ろへと回ったらしい。椿が総司に申し訳なさを感じて顔を上げられないでいると悟ったのだろう。

「本当に私は気になどしてはいません。日曜が駄目なら、次の日曜がある。一度約束の日を逃したからといって、貴女に会えなくなる訳ではありませんからね」

総司の優しい声に導かれるように、椿が顔を上げる。するとその顔の横に、後ろから身を屈めた総司の顔が近付き、彼女の耳元で囁いた。

「でも、そんなに気にかけて頂けて嬉しいですよ。お友達のお見舞いは行かなくてはいけない事ですが、貴女も日曜日の約束を残念に思っていると、そう思っていても良いのですね？」

「……総司様……」
頬の赤味がまだ引いてはいない。しかし総司の視線は真横に有り、もう俯いたとてそれを隠せはしない。椿は諦めて顔を傾け、総司と視線を合わせた。
「……『残念です』　と言ったら、許して頂けますか？」
優しさだけを湛えていた彼の目に、ちょっと意地悪な光がともる。
総司は椿の瞳を捉えたまま、恥じらう彼女を更に恥じらわせた。

「……唇で、貴女に触れても良いですか？　……そうしたら、許します」
「つ、総司様……」
今まで気にしないと言っていたのに。これは調子に乗りすぎだ。
椿は「調子に乗らないで」　と忠告しようとしたが、その口から出たのは、そんな気持ちとは全く違う言葉だった。
「『良い』　と言ったら、……許して頂けますか？」

何故、そんな返事をしてしまったのか……。
これではまるで、総司の言葉に便乗して椿がその行為を求めているようではないか。
まだ身体に残る藤棚での経験が、椿に総司を求めさせたのかもしれない。

そう考えると、とても恥ずかしい事ではあった。
しかし椿はハッキリとした返事の代わりに、そのまま長いまつげを伏せたのだ。
総司の吐息が近付く気配を感じ、それだけで唇が熱くなる。しかし彼の唇が触れたのは、それを待つ彼女の唇では無く、伏せられた瞼の上。
椿は目を閉じたまま、不思議な気持ちでその唇を感じていた。

飛び上がる鼓動。
高まる体温。
訳も解からず、昂る心。

総司に感じるこの気持ちが、何なのか解からないまま……。

そして、運命の日曜日がやって来る。

椿の、そして総司の、未来をも変える出来事への序章が、幕を開ける。――――

椿姫・５０　『大介の婚約者』

「ずっと会ってみたいって思っていたんです。凄く嬉しいです。有難うございます！」

とても素直な言葉と、とても可愛らしい笑顔で、エリ・フランクールは椿との対面を喜んだ。

天然のクセ毛だという、ふわりとした長い髪は明るい栗色。

見詰めると分かる蒼い瞳。唇の色が色濃いピンク色に見えるのは、透き通るような白い肌のせいだろう。

色白の彼女にとても良く似合うアイボリーのワンピースは、とても可愛らしく彼女の魅力を引き立たせ、そのワンピースの上からでも分かるスタイルの良さと、椿よりも少し高い身長は、彼女がハーフであるが故のものなのかもしれない。

その容姿は、逸脱した美しさで上流社会の噂を一人占めにする“葉山の椿姫”と並べても、決して引けを取らないものだ。

「大介が、いっつも椿さんの話をすると、『綺麗だよー、綺麗だよー』って言うんですよ。なのに全然会わせてくれないんだもん。でも、本当に綺麗な方でビックリしました」

まだ高校三年生。十八歳だという彼女は、高校卒業と同時に大介と結婚をする、彼の婚約者だ。

「とんでもないわ。私の方が驚いてしまったくらいよ……。大介さんの婚約者が、こんなに可愛らしい方だったなんて……」

あまりにも純粋な瞳で見詰められ、“大介の婚約者”という肩書きだけに嫉妬を感じていた自分が、椿は恥ずかしい。

彼女につられるように、椿の口からも正直な感想が零れ出た。

「おめでとうございます。正式に結婚が決まって、良かったですね」

とても穏やかな日曜日だった。
その日は予定をしていた通り、葉山家で大介とエリの結婚が決まった事を祝し、簡単なお茶会が開かれた。お茶会といってもホームパーティーの様なものでは無く、椿とさくらにエリを会わせたいという一の思惑が有って開かれたものだ。なので、出席者は五人。
祝福ムードで笑い声の絶えない、穏やかで楽しい時間が、葉山家のサンルームに流れていた。

大介の婚約者に、自分は笑顔で接する事が出来るだろうか？　正直、椿はそれがずっと不安だった。
幼い頃からずっと好きだった人。告白も出来ぬまま見詰め続けているうちに、彼には好きな人が出来、そして婚約をしてしまった。
決して成就する事の無い恋心を抱き続けた椿。
その原因を作った、大介の婚約者である女性。
気付かぬうちに、彼女を睨めつけてしまう事は無いだろうか？
いつものように、平気でキツイ言葉を口にしてしまう事は無いだろうか。
そんな心配をしていたのだ。
しかしそれは杞憂に終わる。

「椿さん、小さい頃の大介って、どんなだったんですか？」
明るい笑顔で無邪気なエリは、見ているだけで心が和む。この癒される雰囲気は何だろう？　同じ空間に居るだけで、気持ちが穏やかになって来るのを感じる。
どこか、大介にも似た雰囲気があるのだ……。
「今のままよ。明るくて、とても優しくて」
サンルームの光を浴びて、キラキラと輝くエリの栗色の髪を眩しく感じながら、椿はメイドが持って来たアイスハーブティーをエリの前に置く。するとエリは、大きな瞳をキョトンっと丸くして、不思議そうに小首を傾げた。

「え？　今のまま？　じゃぁ、意地悪だった？」
「エリっっ」
無意識に“今が意地悪だ”という告げ口をするエリに、大介は横から口元に人差し指を当て、“口止め”のポーズを取る。
しかし既に手遅れだ。それを見たさくらが、からかうようにクスクス笑う。
「やだー、エリさんには意地悪なんだー、大介さんっ」
「好きな子は苛めたい、ってヤツか？　幼稚園児か、お前は」
さくらの言葉を一が継ぐ。するとさくらは、隣に座る一のシャツをクイクイッと引っ張り、小声で反論した。
「一さんも、たまに私に意地悪……」
「さくらーぁ、スコーンにジャムは付けるか？　どれ、私が付けてやろうっ」
少々大きめの声でさくらの反論を遮り、明らかに一の誤魔化しが入る。
こんなに慌てる兄を見るのは、未確認飛行物体を見るくらい珍しい。そう思いながら椿は少々呆れるが、こうなって来ると何処となく疎外感を覚え始める。
元々、婚約をしている二組の中に自分が紛れ込んでいるのだ。そういった雰囲気になっても、仕方が無いではないか。
「そういえば、温室にとても綺麗なアイボリーのスプレーローズが咲いているのよ。今日のエリさんに、とても似合いそうだわ。私、少し摘んできます」
エリの可愛らしさが、そのバラを思い出させたというのもあるが、何となくこの場に居辛いものを感じてしまい、椿はそう言ってサンルームを出た。
しかし、外へ出て、温室へ向かおうと前庭を歩き始めた時、その声は追って来たのだ。
「待って、椿ちゃん。僕も行くよ」

そう言って椿の横に立ったのは、大介だった。

椿姫・51　『嵐の前兆』

「良いのですか？　エリさんを放っておいたりして」
着いて来てもらった事自体が嬉しいというのに、椿はその気持ちを隠してエリの名前を出し、大介を責めた。
パチンっと鋏が小気味良い音を立て、濃い緑色の茎を切断する。美しく見頃な姿を披露するアイボリーのスプレーローズ。その数本目を、芝に広げた柔らかな和紙の上に置き、お茶会の場を彩るにはもうひと枝分くらいのボリュームが無ければ、エリの華やかさに負けてしまうと感じた椿は、最後の一本を選定し出した。
最後の一本に目星を付け、鋏を入れようとした時、先ほどの答えを大介が口にする。
「エリなら、きっとさくらちゃんと話して盛り上がっているよ。――僕は、椿ちゃんと話がしたかったんだ」
茎を切ろうとした鋏がピクリと震え、止まった。何となく大介の口調に、優しさ以外の物を感じたのだ。
「今日は有難う。結婚が決まったお祝いをしてもらえるのも嬉しかったけれど、僕は、椿ちゃんがエリに会ってくれた事が凄く嬉しかったよ」
最後の一本を切り、それを和紙の上に置いて優しく包む。一通りの作業をしながら、椿は黙って大介の話を聞いていた。
「正直、もしかしたら椿ちゃんは、エリに会ってくれないんじゃないかって思ってた」
「あら？　どうしてですの？　今までお会いした事が無かったのですもの、私は楽しみにしていましたわ」
楽しみな気持ちは有った。しかし、“大介の婚約者”になど会いたくは無い。そんな気持ちを持っていたのも確かだ。椿は少しドキ

リとしながら、軽く笑って大介の言葉をかわす。
しかし、スプレーローズを腕に抱え、作り笑顔で彼を振り返った瞬間、椿はその花束を落としてしまいそうになるほど身体が震えたのを感じた。

「――どうしてか、言って良いの？」
そう問いかけてきた大介の口調は、真剣味を帯び、その双眸は、いつもの優しい彼のものではない。
怒った顔ではないが、初めて目にするそんな大介の表情に、椿の身体も固まる。
「エリが……“僕の”婚約者だから、きっと椿ちゃんは会いたくないだろう、って、ずっと思ってた。今までだって、何度も会わせる機会は有ったのに、君の気持ちを考えたら会わせる事は出来なかったんだ」
「……大介さん……？」
椿は“まさか”という思いで大介を見詰める。不安を湛えたその瞳はまばたきをする事も忘れ、次の言葉を発する為に動くであろう彼の唇を凝視した。
「エリは……、見てもらって分かったと思うけど、悪気の無い、人を疑う事も責める事も知らない様な、本当に純粋な子だよ。……本心から、椿ちゃんに会えた事を喜んでいた。でも、椿ちゃんは、辛かったんじゃないかと思ったんだ……」

大輪の薔薇程ではないが、スプレーローズにも棘は有る。
和紙で包み持ったそれを、椿はふんわりと抱いているので何も感じはしないが、力を入れて抱けば半袖から伸びた素肌にその棘は触れて来るだろう。
もちろんそれを心得ている椿は、そんな危険な事はしない。
しかし彼女は今、身体全体を棘で刺されてしまったかのような錯覚に陥っていた。

大介は、何故こんな話をするのだろう……。
これではまるで……。

「“僕が好きな子”に、会いたくなんて無かっただろうから」

大介の言葉に、腕の力が抜ける。
心の全てを見透かされていたような感覚が、椿を襲った。
和紙に包んだスプレーローズが滑り落ち、足元に散る。しかし椿は、見た事も無いくらいに優しく、そして厳しい目で彼女を見詰める大介から、目が離せなかった。

椿は悟る。

大介は、椿の恋心を、知っていたのだ……。と……。――

＊＊＊＊＊

“書斎”と呼ぶには、あまりにも広い部屋。そこは、辻川邸の中に有る、総司の仕事部屋だ。
その部屋に、大きな白百合の花束が用意されていた。
「すっかり忘れていたな。そういえば……」
大きな書棚の傍でワゴンに乗せられ横たわる花束は、恐らく男性が両手で抱えて丁度良いくらいの大きさ。
女性の純潔を象徴する美しい白百合の花。本来ならば今日、葉山家へ訪れる際、椿へ持って行こうと用意させておいたものだ。
夏は白百合の季節では無い。しかし、総司が“用意しろ”と命じて用意され無い物など無い。この白百合も当然のように用意された。

彼が所望して用意されないのは、椿の心くらいではないだろうか……。

葉山家の温室へ招待してくれるという約束が延期になった時、この花の用意も延期しておけば良かったのだが、総司は思ったよりも延期になったショックが大きく、花の事などすっかり忘れてしまっていたのだ。

その結果、当然のように花は彼の元へと届けられた、

「美しいが、ここに有ってもしょうがないな……」

総司はフッと口元を歪め苦笑する。彼が傍に置きたい華は、もっと美しい“椿の華”だ。

純白の白百合は、きっと椿に似合う事だろう。

そう思うと、総司はこの花を椿に届けたくて堪らなくなった。

今日はお見舞いの後、学校の親友に会うので夜まで戻らないと聞いている。見舞いというものは、根を詰めて行けば見舞った側も意外に疲れてしまうもの。総司は椿を気遣って　今日は会いに行くのをやめ、明日にでも会いに行こうと考えていた。

だが彼は、この“白百合”を彼女に見て欲しい気持ちでいっぱいだ。

総司は何かを思い付いたかの様に書斎のドアを開けると、ドアの外で待機をしていたお付きに命じた。

「出掛ける。車を出せ」

彼女に会えなくても、この白百合だけは届けてこよう。邸に帰ってきた椿は、この美しい花の純粋さに心癒されてくれるに違いない。

総司は、葉山家へ向かう準備を始めた。

椿姫・52　『衝撃』

「彼女に、優しくしてくれて、有難う」
呆然とする椿の頬に、大介の手が触れる。
優しく頬を撫でたその手は、そのまま後ろへ流れ、椿の絹糸のような髪を梳いた。
温かい彼の手が感じられるこの仕草が、椿は小さな頃から大好きだった。
「会ってくれて嬉しかった。椿ちゃんには、彼女を解かって欲しかったから……」
いつも優しい大介の瞳。その瞳が、今は何故か少し辛そうだ。
「大介さん……」
椿は震える声で彼に訊ねる。
「大介さんは……、解かっていたのですか……？」
聞くのが怖い。もし思った通りだとしたら、何とも恥ずかしい事ではないか。
「私が、大介さんの事を……」
それでも椿は、その答えを聞こうと途中まで言葉を出す。しかし頬を撫でていた大介の手が止まり、彼女の言葉も止まった。
大介が椿を見詰め、彼女はその答えを待つ。
聞かなくても解かる。既にこの雰囲気の全てが、答えを物語っているではないか。
「――知ってたよ……」
そして、彼の口から出たのも、予想通りの答えだった。
椿の視界から大介の姿が消える。それは、椿が彼から無意識のう

ちに目を逸らしてしまったせいだ。
「子供の頃から……、ずっと……」
大介は知っていたのだ。椿の気持ちを。
兄のように慕う大介に、ずっと恋心を抱き続け、ずっとそれを胸に秘め続けていた事を。
「椿ちゃんが、僕を好きでいてくれていた……って」
大介の口からその現実を聞かされるのが、あまりにも辛く苦しい。
それ以上に、羞恥で胸が押し潰されてしまいそうだ。

あまりの苦しさに、椿は頬に触れる大介の手を振り払い、その場から逃げ出してしまった。

＊＊＊＊＊

何処へ行こうとしたかなど解からない。何か目的が有って逃げ出した訳ではない。
ただ椿は、とてもではないが大介の傍に居られるような精神状態では無かったのだ。
恥かしくて、辛くて、苦しくて。そして何より、悲しかった。
優しかった大介。幼い頃から、椿を一以上に可愛がってくれた幼馴染。しかし今彼は、何よりも彼女が悲しむ方法で彼女を傷付けた。

自分に向けられていた彼女の想いを、知っていながらもその事実から目を背け続けていたのだ。

確かに、いくら彼が優しい穏やかな青年でも、椿よりも年上で、彼女よりは世の中を知っている普通の男性だ。
頭は良いが、傍から見れば世間知らずのお嬢様でしかない椿が秘

めていた想いなど、すぐに察しが付いていたとしても無理は無いのかもしれない。

しかし、それを黙ってい続ける事が、椿にどれだけ切ない気持を与えていたか。解からない訳ではないだろう。

いや、黙っているならば、いっそ、彼女を騙し続けるべきだったのだ。

椿が大介を好きだった事など。それを知っていた事など。彼女には知らせず、知らない振りをし続けてくれれば良かったのだ。

なのに、彼は今、それを口にした。

（酷い！　大介さん！）

「何処に行くの、椿ちゃん！」

温室を逃げ出し、ただ夢中で走っていた椿は、大介の声が聞こえた瞬間、彼に腕を掴まれた。

「門の外に出るつもりかい？！　駄目だよ一人で！　危ないだろう？！」

椿は大介の言葉で、自分が正門のすぐ手前まで走って来ていた事に気付いた。訳も解からないまま走っていたら、きっと屋敷の外へ出てしまっていた事だろう。

椿の外出時には、必ず運転手が付く事になっている。彼女の立場的に、一人での外出は危険が伴う可能性が高いからだ。実際、幼い頃は誘拐などの危険な目に遭いそうになった事がある。

しかし椿は、外に出てしまっていたかもしれない危険な状況を止めてくれた大介の手を振りほどき、礼を言うどころか、湧き上がって来る悲しい憤りを露わにした。

「酷いです！　大介さん！！」
大介と向かい合った椿は、泣きそうな目で彼を責める。
「どうして……ですか……、気付いていたなら、どうして……。私は、一生こんな想いは伝わらないと……。そう思って……なのに……」
今更伝わって、どうするというのだろう。彼は既に結婚まで決まっているではないか。
そんな人を好きだという事実を、彼の前に晒しておくなど、耐えがたい恥辱ではないか。

せめて大介が、婚約者と出会う前に椿の気持ちに気付いている事を教えてくれていたなら。
――もしかしたら、違う未来が待っていたのかもしれないのに……。

「もっと早くに、なんて、言え無かったよ……」
今にも大声で泣き出してしまいそうな椿を見詰め、大介は哀しげに目を細める。

「――だって君は、“葉山の椿姫”だから……」

椿姫・53　『身分差』

「子供の頃から、綺麗で可愛くてシッカリしていて……。椿ちゃんは、生まれながらの“お姫様”だった」

こんな悲しそうな目をする大介を、椿は見た事が無い。

椿が知っている大介は、いつも明るくて爽やかで、優しい目で笑いかけてくれる。そんな人だ。

「皆が君に憧れた。僕は、一の幼馴染だって事より、椿ちゃんの幼馴染だって事で羨ましがられた事の方が多いよ。それだけ君は、大人にも子供にも好かれていたからね。――僕だって、いつも花のように笑っている君が、大好きだったよ……」

「――妹みたいに、ですよね……」

椿は、いつか大介から聞かされた言葉を口にする。その言葉は、ずっと残酷に彼女の心の中で木霊していた物だ。

しかしその言葉に、大介は説明を加える。

「“妹”だと思わなければ、……僕はきっと、椿ちゃんを好きになっていた……」

椿は、息が止まってしまいそうだった。

これはどう考えたら良いのだろう。ならば大介は、故意に椿を好きにならぬよう、椿を“妹みたい”と思い込んでいたというのか。

そんな事をしなければ、二人は想いを通じ合わせていたかもしれないのに……。

「でもね、椿ちゃん、――君は“葉山の椿姫”だ」

大介は、再び同じ言葉を繰り返した。

「いつかは、家の為に、会社の為に、吊り合う身分かそれ以上の人

の所へ、お嫁に行かなくちゃならない女性(ひと)だ」
悲しそうだった彼の目がふっと緩み、歪んだ口元は自嘲の笑みを浮かべる。
「僕とは……立場が違いすぎる……」

幼い頃から、椿だって自覚していた。
いつかは家の為に嫁がねばならない事を。そういう立場の人間である事を、自分なりに自覚し、自覚しながらもそんな運命を呪いもした。
そんな椿の置かれた立場を、両親はもとより一だって解かっている。そして、それと同じように、大介も解かっていたのだ。

「だから私は……大介さんに好きになってはもらえなかったのですか……？」
椿の視線はだんだんと下がり、溢れ出そうな涙を抑える為に、その瞼は閉じられた。
「私が……葉山製薬の娘だから……。“葉山の椿姫”だったから……」

もしも二人が想い合う様な事があったなら、最終的には立場の違いで悩む事になる。
そうなれば、彼女はどれだけ悲しむだろう。どれだけの涙を流すのだろう。
清らかな水だけを吸い上げて美しく咲く椿の華は、きっと首を落とすまでも無く萎(しお)れてしまうだろう。

大介は、椿にそんな思いをさせたくは無かった。
ならば、そうならなければいい。
その可能性を含む未来を、否定すればいい。
やり方は簡単だ。椿の気持ちがどうでも、彼が彼女を好きになら

なければ良いだけだ。

「――僕は、随分と酷い事をしていたんだと思う。小さな頃から君を想わない様に自分に言い聞かせながら、椿ちゃんが向けてくれる気持ちに、ずっと気付かない振りをした。……一と同じ幼馴染なのに、君と一緒に居た思い出が少ないのは、意識して会わない様にしていたせいもある」

椿は妹のような存在だと自分に言い聞かせ続け、そしてそれは成功する。

椿と顔を合わせても、“妹の様に椿を大切にする”事に、彼は徹する事が出来るようになっていったのだ。

――そして大介は、エリに出会った。

「ごめんね、椿ちゃん。……でも、君を好きにならない様に自分を騙し続けた僕だからこそ、君に幸せになって欲しい、っていう気持ちは、凄く大きいんだよ」

大介は俯く椿の両肩に手を置き、少し屈んで彼女に顔を近付けた。

「椿ちゃん……、今、辛いよね？　泣きたいくらい悲しいよね？」

そんなのは当たり前だ。

こんな話をされて、辛くない筈が無い。泣きたくならない筈が無い。

「こんな風に辛い時、君が会いたいのは誰？　こんなに悲しい気持ちを、聞いて慰めて欲しい人は誰？」

大介の問いに、椿の心が動き出す。

辛くて悲しい時、欲しいのは、それを慰めてくれる好きな人の手である筈だ。

大介の両手は椿の肩に有り、大介自身もそこに居る。

それで充分ではないのか。

（――違う……）

しかし、椿の心はそれを否定した。

（違う、この手じゃない……）

肩を抱く、少々強引だが力強く優しい腕。
抱き寄せられた時に感じる、逞しい胸。
育ちの良さがそのまま出た様な、スーツから滲み出る上品な香り。

椿の頬がほわりと染まり、その事実に驚いた彼女は、息を呑みながら目を見開いた。

「解かるかい？　椿ちゃん、もう、解かるよね？」

椿の気持ちを確認する大介の声に導かれ、椿はゆっくりと顔を上げる。

「君が今、会いたい人は誰？」

目の前にある大介の顔が涙で滲んでいく。
そして、滲んだ視界は、彼では無い男性の姿を、彼女に思い起こさせていた。

「……総司、様……」

消えてしまいそうな震える声は、彼女の心から出た声だったのかもしれない。

椿姫・５４　『新しい恋』

「どんどん変わって行くのが、目に見えて分かったよ……」
総司の名前を呟いた瞬間、椿の涙腺は決壊する。
ポロポロポロポロ……、薄く染まった頬に涙の小川を作る彼女を、大介は優しく微笑みながら見詰めた。
「最初、彼が椿ちゃんを気に入って通って来ているって聞いた頃は、あまり気にしてはいなかったんだ……。椿ちゃんは綺麗だから、そういう男の人が出て来てもしょうがないって思っていたから。でも、身分の高い人みたいだったし、その状況に流されてほしくない、そう思って、……ちょっと、僕の希望なんかを言ってしまった事もある」
椿は思い出す。
あれは総司が、椿の元へ通い始めて半年目。
例え家の為に結婚をするのであっても、相手が椿の事を本当に好きで、その上で椿が好きになれた人なら、結婚していいのではないかと、大介は言ったのだ。

「そのうちに……、何だろう。椿ちゃんの雰囲気が、だんだんと変わって行ったんだ。相変わらず綺麗で素敵な女性ではあったけれど、なんて言うか……、どんどん女性らしくなっていくのが分かった……」
優しい大介の声を聞きながら、椿の心の中に総司の姿が現れる。
いつも花束を持って、笑顔で会いにやって来る彼。
どんなに椿が焦らしても、どんなに椿が彼を怒らせるような事をしても……。
彼はいつも笑顔で……。

――椿さん……。

「今年の春くらいからはもう、信じられないくらい椿ちゃんは女性らしく、より綺麗になったよ。自分では気付いていなかっただろうけどね。――解かったんだ……。例の彼の事を、椿ちゃんは好きになったんだ、って」

春といえば、総司が再びプロポーズをして、自分の本心をシッカリと伝えた頃だ。思えば“デート”も、その頃から始まった。

「彼はきっと、真剣に椿ちゃんの事を好きでいてくれているんだろうなって、感じたんだよ。……だって、あの綺麗な椿ちゃんを、もっともっと、綺麗にしてくれているんだから」

総司の真剣な気持ちに触れ、少々強引な愛情表現に触れ、彼の本当の人間性に触れて……。

椿はいつの間にか……、総司に恋をしていた。

だが、ずっと大介だけを想う事しか知らなかった椿は、総司に感じた戸惑いや羞恥が、何なのか解からないままだったのだ。

総司を見て、高まる鼓動。
総司を傍に感じて、上がる体温。
話し、触れられて、昂る心。

「椿ちゃんが彼を好きになった、っていうのはすぐに解かったよ……。でも、椿ちゃんは自分で気付けてはいないみたいだったから……」

大介はニコッと笑い、肩に置いていた手で、涙が止まらない椿の頬を撫でた。

椿にそれを気付かせる為に、大介は彼女にこんな話をしたのだ。
恋というものにさえ純粋で疎い彼女に自分の心を確認させる為には、彼女を傷付けてでも、その心に纏う偽りを剥ぎ取ってしまう必要があった。

「……エリさんの、言うとおりだわ……」
椿は頬に当たる大介の手に触れ、口元をほころばせながら、涙目で彼を睨めつける。
「大介さんは……意地悪ですっ」
彼には似合わない「意地悪」という称賛を貰って、大介は椿を見詰める。
「一にはよく『意外に腹黒い』って、言われるんだよ」
“腹黒い”とは、また彼には似合わない言葉だ。椿は小首を傾げて、綺麗な頬笑みを見せた。
「有難う……大介さん。……大好きです」

総司に会いたい……。
彼女の心が素直にそう思った時、やっと自分の素直な心を感じられた椿を褒めるように、大介の腕が彼女を軽く抱き締めた。

＊＊＊＊＊

どうせ椿は居ないのだ。邸の前まで行く事は無いだろう。
そう感じた総司は、正門前に使用人でも呼んで花を預けても良いと思い、正門前に着く途中で車を待たせ、花束を抱えて歩き出した。
白百合の花が外気に触れ、豊潤で濃厚な香りが溢れ出す。その花香に鼻腔を刺激されながらも、総司は椿を抱き寄せた時に感じる、

あの清らかな香りを思い出し心が熱くなった。
明日は夕方から渡米の予定が入っている。いっそそれをキャンセルしてデートにでも誘ってしまおうかと、秘書達が聞いたら青くなってしまいそうな事を考えた。

正門付近に使用人らしき姿は見当たらない。これはインターフォンで呼ぶしかないかと考えていると、門の近くに人影があるのを感じた。
二人いる。それも男女だ。しかもその二人には見覚えがある。
何といっても一人は椿だ。後ろ姿しか見えないが、それは間違いが無い。

居ない筈の椿が、何故屋敷に居るのだろう。
そして何故、幼馴染の青年と一緒なのだろう。

不審な思いを抱いた時、二人が引き合う様に抱き合ったのが目に入った……。

椿姫・55　『誤解』

「お見舞いを終えたら、学校の親友と会う事になっているのです。夜まで戻れないかと思うのですが……」

そう言ったのは彼女だ。

だから今日は、温室へ招待するという話を中止にしたのではないか。

葉山の屋敷に、今、椿が居る筈が無い。

いや、居てはいけない。彼女は“居ない”筈なのだから。

――ならば、今、総司の目の前に居るのは誰だ。

門の内側で、幼馴染の青年、大介との抱擁を見せているこの女性は、誰だというのだ？

椿ではないのか。

二人の姿が門の陰に窺える位置で立ち止まったまま、総司はその光景を眼球に映した。

映したが頭の中には入っては来ない。まるで記憶に残す事を彼自身が拒否をしているかのよう。薄っぺらなスクリーンに映っている出来事にさえ感じるのだ。

だが、頭の中に入って来なくても、目には痛いくらい焼き付いている。恐らく瞼を閉じても、この光景は視界から消える事はないだろう。

この場に居る筈の無い椿が、幼馴染の青年と一緒に居る。
それも、抱き合って……。

考えたくはない想像が、総司を襲う。
彼は椿に、騙されたのだ、と。
椿が今日会いたかったのは、幼なじみの青年、大介であって、総司では無かった。
最初は総司と約束をしたものの、大介と会う事になってしまった。だが、他の男性に会う事になったとは言い辛い。そこで、快諾しない訳にはいかない様な理由。――“お見舞い”という嘘を持ち出した。
大介と会う為に、椿は彼を騙したのではないか……。

総司は目の前の光景を、一瞬拒否しようと指先を眉間に当て、軽く目を覆う。しかしそれでも、指の間から二人の姿は目に入ってきた。
見たくないのなら、見なければ良いのに。彼は目が離せないのだ。

(違う、椿さんは、人を騙せるような女性では無い……)
彼女を疑いそうになった総司を、彼女の純真さを信じる総司が庇い立てる。
椿は総司を騙したのではない。お見舞いの後、親友に会う予定がキャンセルになって屋敷へ戻って来たのだ。そこに、大介が居たのだろう。

ならば何故、二人は抱き合っている?

椿を信じようとする彼を陥れようとするかのように、一番の疑問が首をもたげる。
だが総司は、特に意味など無い、二人は幼馴染なのだ。抱き寄せ

るくらいは、挨拶の様なものなのかもしれないではないか……。そうとも思おうとした。

しかし、彼がそう思おうとした時、顔を上げた椿が視界に映った。その表情に、総司は釘づけになる。

「大介さん、ずっと……大好きでいさせて下さいね」

はにかむ笑顔は、可憐な花の様。

美しいというよりは、可愛らしい微笑み。

薄く染まった頬は、どこか女性らしい艶っぽさを漂わせ、まるで愛しい人を心に想う乙女の花恥ずかしささえ感じさせる。

そんな頬笑みを総司では無い他の男性に見せる椿を見た瞬間、彼は腕に抱えた白百合を、毟(むし)り潰してしまいたい衝動に駈られた。

＊＊＊＊＊

「ずっと、……ずっと、大好きですから……」

大介に対して、こんなにも平気で「好き」　という言葉を使える自分に、椿自身が驚く。

辛くて恥かしくて、そんな言葉を彼にかける事など出来なかったというのに。

本当の想いが見えた今、大介に対して素直な気持ちで「好き」という言葉が使えるのだ。この感覚は、まるで一に対してこの言葉を使っているかのよう。

「椿ちゃん、凄く可愛いよ……」

大介はいつも通りの爽やかで明るい笑みを見せ、椿の頭を撫でた。

「凄く綺麗な表情をしてる。恋の力は凄いねぇ」

「……大介さんのお陰です」
からかわれた事に頬を染め、椿は、はにかんで大介を見上げた。

椿の心は今、総司に会いたい気持ちで満たされている。
いつも会いに来てくれるのは彼の方だ。しかし今日は、これから彼に会いに行ってしまおうか。椿らしくない、そんな大胆な事まで考え出してしまったほど。
椿から会いに行ったら、総司はどんな反応を示してくれるだろう。喜んでくれるだろうか。いつか、辻川邸の門前で夜遅くまで待っていた時の様に、感動してくれるだろうか。
――椿さん、どうしたのですか？
不思議そうにしながらも、嬉しそうな頬笑みを、見せてくれるだろうか。
陶磁器の様な冷たい表情を破顔させて……。

「あれ？」
総司を想い、鼓動を高鳴らせ始めた椿だが、彼に会いたいという願いはすぐに成就した。
ふいに顔を上げた大介が声を漏らし、どうしたのだろうと椿も何気なく彼の視線を追ったのだ。
――そこに……。

「――ごきげんよう」

低い声で挨拶をしながら、ゆっくりと門を入って来た総司が居る。

「椿さん。……それと、大介さんでしたね？」

その声が、無感情なほどに冷たい物である事に、椿はすぐには気

付けなかった。

椿姫・５６　『冷淡』

「まさか貴女が屋敷にいらっしゃるとは、思いませんでしたよ」
早足で歩み寄って来た総司は、片腕に抱えていた白百合を椿に手渡した。
「あ……、有難うございます。総司様……」
両手で抱えなければ間に合わない位の白百合を渡された瞬間、強く立ち昇った豊潤な花香に椿は目を丸くし、視界を遮ってしまう白百合達の間から見えた総司の瞳に、鼓動が高鳴る自分を抑えられない。
白百合は綺麗なのだが、これだけ大量だと流石に重い。椿は花束を抱えたまま前へふらついてしまった。
「大丈夫？」
彼女が転んでしまうかと思ったのだろう。後ろに居た大介が、椿の両肩を掴んで転びそうになる彼女を支える。椿は前にふらついた身体を起こして花束を抱え直し、肩越しに大介を振り返った。
「有難う……、大介さん……」
総司がくれる花束は大体重たい物が多いのだが、あまり重そうな物は一度椿の手に渡してからすぐに彼が持ってくれるか、部屋の中ならデスクやテーブルの上に置いてくれる。しかし今は、彼が手を出してくる気配を感じられなかった。
椿の細腕でずっと抱いているのも辛いだろう。大介に預ける事も出来たが、総司に貰った花を誰かに預けるなどという事を、彼女はしたくはなかったのだ。
「椿さんが居ないという事は解かっていたのですが、どうしてもこの花をお届けしたくて、やって来てしまいました」

総司は口角を上げ、椿の後ろで、重たい花束を抱える彼女を心配そうに見ている大介に目を向ける。

「そうすると……この青年と一緒だったので。……少々驚きましたね」

何処か嘲る口調に椿はハッとする。総司が現れた事でつい鼓動を高めてしまったが、彼は怒っているのではないかという事に気付いた。

彼は椿が居ないものと思ってやって来ている。しかし実際彼女は葉山家に居て、それも大介と一緒に居るたのだ。

あれだけ焦がれている椿を目の前にしているというのに、鋭い双眸を見せているというのが何よりの証拠ではないか。

「あの、総司様……、実は今日は……」

椿は真実を彼に告げようとした。本当は大介の結婚を祝う為、お茶会が催されていたのだと。どうしてもその事が言え無くて、恥かしげも無く子供の様な嘘をついてしまったのだと。

しかし総司は急に踵を返し、門の外へ向かって歩き出してしまったのだ。

「総司様?!」

椿は驚いた。彼女の話も半分のまま彼が立ち去ろうとする事など、予想出来る事ではない。

総司を追おうとしたが、白百合が視界を阻む。おまけにその重さと大きさで、普通に歩く事もままならない。

椿はゆっくりと身を屈めながら通路横の芝に花束を置くと、肩越しに振り返り大介を見上げる。彼は「行っておいで」　と彼女を勇気付ける様に微笑んだ。

まずはとにかく謝らなければ。

何だかんだと理由を付けても、結局椿は総司を騙したのだ。

何処か彼の態度が冷たかったのも、どこか軽侮した表情を見せた

のも、騙された事に憤りを感じたからに違いない。
理由を告げて、心を込めて謝ろう。椿はそう思った。そしてその上で、やっと気付く事が出来た自分の気持ちをシッカリと伝えようと、心に決めたのだ。
総司を意識してしまった今、平常心でそれが言えるのか限りなく不安ではある。
だが、総司がいつも通り優しく紳士的な態度で椿に接してくれている時ならば、素直に言える様な気がした。
総司の事が好きだと。

「総司様！」
椿がやっと総司に追い付いたのは、彼が車に乗り込もうとしている時だった。
椿が走って来たのを見て、運転手を務めていたお付きの戸田は後部座席を開いていたドアから手を離し、邪魔をしないようにとその場所から下がろうとする。しかし総司はそれを止め、その場に戸田を残したまま椿が走り寄って来るのを待ったのだ。
「総司様……、あの……今日は、申し訳ありません……」
早く追いつこうと、少々頑張って走ったせいか息が上がる。普段授業でも全力で走るなどという事はないので、これは非常に珍しい事だ。
だが、息を切らせ必死に追い付いてきた椿を見て、総司は優しい言葉をかけるどころか、少し前に見た冷笑を、彼女に対して浮かべた。
「何故、謝るのですか？」
「それは……、今日の事で私が総司様に……嘘を……」
総司はフッと軽く鼻で笑い、椿には見せた事も無い、凍てつくほどの鋭い双眸を彼女へ向ける。
「貴女は今日、あの青年に会いたかったのでしょう？　貴女は正直

な人だ。あの青年の前では、とても素敵な笑顔を見せる」

「……総司様？」

彼の言葉に椿は戸惑った。まるで、大介に会いたいが為に約束を反故にしたと言いたげな内容ではないか。総司は嘘をつかれた事より、“彼に会いたいが為に”という事に憤りを感じている様な気がする。

そして、“とても素敵な笑顔”というのは、総司への気持ちに気付いた椿が心のままに微笑んだ物を、大介に対して笑いかけたものだと総司が誤解をしているのだという事に気付いた。

「違います……、あれは……」

椿は自分の気持ちを今伝えてしまおうと決心を付けた。お付きの人間が傍に居るが、そんな事は気にして居られない。自分の本当の気持ちを告げて、まずこの誤解を解かなければ。

椿は口を開きかけるが、総司は彼女の話を聞こうとはしなかった。

「では、失礼。私は仕事を残してきておりますので」

あまりにも冷たい口調。

あまりにも冷淡な態度で総司は車へと乗り込み、そして、どうしたら良いのか解からず立ち竦む椿を残して、立ち去ったのだ。

――そして翌日、総司の憤りが、冷淡無情な結果となって椿を襲った……。

椿姫・57　『波紋』

「椿！　椿はいるか？！」

先急ぐ声に、最初に反応したのはさくらだった。

なぜならその声の主は一だったのだから。

「一さん……どうしたのかしら……」

不思議そうに呟き、彼女は開きっぱなしになっているリビングのドアに目を向ける。彼女は今、昨日椿が総司に貰った白百合を半分分けて貰って、リビングに飾っていたところだったのだ。

口の大きな花瓶に花を活け、バランスをとりながら形を整えて行く。左端にもう一本入れた方がやはりバランスが良いと感じ、右に詰めた物を寄せるか、椿に頼んでもう一本貰うかどうしようか思案中だったのだ。

さくらが一の声を気にしたが、もちろん当の椿だって気になった。リビングでさくらと一緒に昼食後のお茶を楽しんでいたところに、いきなり玄関から兄の急く声が聞こえて来たのだから。

「ちょっと様子を……」

百合も気になるが、それよりも一が気になる。さくらは一言椿に告げて、ふわりっとしたAラインワンピースの裾を翻し、足早にドアへと駆け寄った。「椿さんはこちらに居ます」　と兄を呼ぶ彼女の声を聞きながら、椿はソファから立ち上がり、今さくらが百合を活けてくれていた、フラワーテーブルへと近付く。花のバランスを見て、彼女が“あともう一本”で悩んでいた事を悟り、自分の部屋に飾ってある百合の花を一本、メイドに持って来させようと考えた。

お茶の時間が済んだら、椿は辻川家へ出向こうと思っていた。

彼女は夏休み中だが、総司は忙しく仕事をしている。彼に自分の

都合で会いたいのなら、まず彼の予定を知らなければならない。
椿に良くしてくれるお付きの水野は執事補佐だ。邸に行けは会えるだろう。椿が「総司様に会いたい」と言えば、至急彼に連絡を取ってくれるに違いない。もしかしたら椿が訊ねて来ていると聞いた総司が、仕事を切り上げて屋敷へ戻って来るかもしれない。
毎日椿の元へ通ってくる総司の事。今日も待っていれば夕方か夜にはやって来るのかもしれないが、椿はどうしても今日は自分から訊ねて行きたかったのだ。
自分から訊ねて行って、自分の中で育ち咲くこの気持ちを総司に伝えたかった。

「総司様……」
白百合の花を眺めながら口元をほころばせ、彼を思う椿の心はとても穏やかなものだった。
昨日怒らせてしまった事を詫びるのが先ではあるが、彼に会えるという事実が、椿はとても嬉しい。

「椿、ここか……？」
総司を想い馳せる彼女の楽しみを、一の声が奪う。椿は兄を振り返り小首を傾げた。
「どうなさいましたの、お兄様？　まだお昼過ぎですわ。それとも、さくらさんが恋しくてもうお帰り？」
ちょっと兄をからかった椿だが、その余裕の頬笑みは、一の深刻な表情を目の前に、徐々に不審げなものへと変わって行った。
「……何か、あったのですか？」
一がこんなにも深刻な表情をしているのだ、ただ事では無い。仕事で何か大変な事態にでも巻き込まれたのだろうか。
しかし彼は椿を呼び、彼女に用が有るようだった。だとすればこの深刻な表情の原因は彼女だという事になるが、いったい何があっ

たというのだろう。
　一は椿の前に立つと、ただならぬ兄の気配に息をひそめる妹を見詰め、口を開いた。

「大介が……、訴えられた」
「え？」
「昨夜、路上で喧嘩をして相手に大怪我をさせたという理由で、今朝訴えを起こされた。ついさっき、大学に居た所を警察に連行され、大学側は早々に彼の退学を決めたそうだ」

　椿の息が止まる。一の後ろでその話を聞いていたさくらなどは、あまりの内容に両手で口を押さえ大きく息を吸い込んだ。
「大学側から、彼の、葉山製薬本社への内定を辞退するという旨の通知が届いて分かったのだ。……大介は今、警察で身柄を拘束されている」
「……そんな……、どうしてそんな事に……」
　椿の声は震え、フラワーテーブルに置いた指が血の気を失い、徐々に冷たくなっていくのを感じる。
　何故いきなりそんな事になっているのかが、椿には解からないのだ。

　大介は優しく、争い事をしない性格だ。男性ではあるが、小さな頃から取っ組み合いの喧嘩などはもちろんした事が無い。路上で喧嘩をして相手に大怪我を負わせるなどという事が、あろうはずがない。
　それに加えて入社の内定を辞退、とは、どういう事か。
　大介は既に葉山製薬本社への入社が決まっていた。薬学部在学中、常に成績はトップで主席卒業も間違いはない人間だ。入社後も勉強を続け、博士号を取得する計画まで立てていた。
　警察で身柄を拘束されているとは、いったいどんな話になっているのかは解からないが、訴えられたという事は、よほど大きな傷害

事件だったのだろうか。
もしも前科などが付いてしまったりしたら……。
――彼の将来は、壊されてしまう……。

「大介さんは、どうなるのですか……？」
事の重大さに気付いた椿が一に詰め寄ると、一は深刻な面持ちで椿の肩を両手で叩く。
「会社の顧問弁護士である田島先生に頼んで、今警察の方へ行って貰っている。父君ではなくご子息の方だ。覚えているか？」
「え……、ええ、とても優秀な弁護士さんなのは存じております……」
「取り敢えずは信悟先生が守ってくれる。彼の事だ、すぐにでも警察から身柄を引き取って来てくれるだろう。大介は傷害事件など起こせる男ではないからな」
「では、大介さんは大丈夫なのですね？」
椿にホッとした笑顔が戻る。こんな話は濡れ衣に決まっているのだ。きっとすぐに大介の疑いは晴れ、大学側の退学などという処分も、取り消されるだろう。入社辞退、などという話も無くなるに違いない。

そう安堵した椿だが、一はそれを否定した。
「いや……、恐らく解放してもらうだけで精一杯だろう」
「何故ですの？　こんなのは濡れ衣でしょう？　お兄様だって、大介さんはそんな事が出来る人ではないと……」
「――裏で、大きな“力”が動いている」
重い一の口調に、椿の言葉が止まる。彼女は最初、一の言葉の意味が解からなかった。
「……田島も、葉山も、警察権力でさえ敵わない様な、大きな“権力”が動いている。……それが何とかならなければ、大介は……こ

のままだ」

「……権力？」

椿の背筋に、氷の様に冷たい物が走る。そしてその悪感と共に思い出したのは、目の前のものを全て切り裂いてしまいそうに冷たく鋭い、“彼”の目……。

「椿、お前、辻川様と何か有ったのか？」

椿の想像を決定づけるかの様に、一の声が彼女を問い詰める。頬を冷たい汗が流れ落ち、ゆっくりと襲い来る眩暈に、椿は崩れ落ちてしまいそうだ。

「裏で、辻川の力が動いている。辻川の刃（やいば）が何故大介に向けられたのかは解からないが、考えられるのは椿、お前なのだ」

一は責めている訳ではない。

大介の一報が一の元に入った時、彼は、彼が持ち得る全ての手段を使って事の真相を調べた。

そして出た結果は“辻川”だったのだ。

妹の椿が、総司に対して何か重大なミスを犯したのなら、総帥の怒りに触れるほどの出来事があったのなら、辻川側からの制裁を受けるのは椿自身、もしくは“葉山”である筈だ。しかしその刃が向けられたのは、さほど“辻川”とは関係がなさそうな光野大介という青年。

何故大介がこんな目に遭わなければならない？　彼と辻川の間に、大きな接点など無い筈だ。

――ただ一つ考えられるのは……。

彼と椿が、幼馴染であるという事だけだ。

大介に仕掛けられたこの一件には、椿が関係している。一はそう考え、その確認の為に戻って来たのだ。

「総司様が……そんな事を……」
昨日総司が椿に向けた、あの冷淡な態度が蘇って来る。
総司はやはり、彼女がした事に怒りを感じていたのだ。
それはそうだ。誰だって騙されて気分の良い物では無いだろう。
特に彼は、“誰かに騙される”などという、卑下される行為を受けるべき人間ではないのだから。
総司に信じられないほどの愛情を向けられ、彼が“辻川総司”である事を少々忘れていたような気がする。
彼は人一人どころか、ひとつの企業の未来さえ、簡単に握り潰せてしまう人間だ。

「総司様に、お会いしてきます……」
椿は震える声で告げ、一を見上げた。
「総司様にお会いして……、大介さんの件を御伺いしてまいります。いいえ、大介さんに向けた刃を、下げて頂きます」
「私も着いて行こう」
「いいえ。私、一人で参ります」
椿は覚悟を決め、凛然と一の付き添いを断ると、震え出しそうな足に力を入れ、彼の横を通り過ぎた。
あまりにも烈酷な話に、泣きそうな表情をして一の後ろに立つさくらの肩を優しくポンッと叩き、椿はリビングを出ると、良く通る澄み渡った声で叫んだ。
「車を用意して！　辻川邸へ参ります！」

椿には解かっている。
これは、彼女の罪だ。

己の内に芽生え咲き始めた、艶やかな想いにも気付けず。
心を覆い続ける想いにだけ拘って、愚かな嘘をつき、繋ぎ合わせられそうだった手を彼に引かせてしまった。
彼女に向けられていた、彼の零れんばかりの愛情とプライドを、非情なまでに傷つけて。

謝るだけでは済まないかもしれない。
けれど今椿に出来る事は、まず総司に会う事なのだ。
自分の愚かさのせいで大介にあんな仕打ちをされたのはもちろん悲しい。すぐに撤回してほしいと思っている。
だが椿には、それ以上に悲しく辛い事がある。

それは、これが原因で、総司を失ってしまうのではないかという可能性だった。――

椿姫・59　『悔し涙』

「総司様は午前中の内にニューヨークのへ発たれました。お帰りになられるのは水曜日の予定です」

辻川邸へ総司を訊ねた椿に、総司のお付きで辻川家執事補佐の水野は、事務的な態度で彼女に告げた。

「水曜日の、いつ頃お戻りになられるご予定ですか？」

総司が居なかったのは予想外だが、ここで何もせずに帰る訳にはいかない。総司がいつ戻るのかを訊いておかなければ、話をするチャンスを逃してしまう。

こんな事になってしまったのだ。以前のように、彼が椿の元に足繁く通ってくれるのかなど解からないではないか。

「昼過ぎ。夕方近くではないかと御伺いしております。ですが、仕事の加減で何ともハッキリとは……」

水野はいつもより事務的で、椿が訊ねた事に、ただ淡々と答えるだけだ。この件で椿が総司を訊ねて来るだろう事は、総司も解かっていただろうと思われる。恐らく、余計な事は答えぬよう、言い付けて行ったのだろう。

それは、椿が訊ねて来たというのに客間などに通す事も無く、邸の外で立ち話をさせられている事を考えても明白だ。

「水野さん……、あなたなら、知っていますよね？　総司様が、光野大介さんという男性に、何をしたか……」

ハッキリとした答えは貰えないかもしれないが、水野は椿が初めてこの邸へ招待を受けた時から、とても親切にしてくれた人間だ。いつか椿を“奥様”と呼びたい。そうとまで言ってくれた。

何か答えてくれるかもしれない。微かな期待を抱いて、椿は彼に

詰め寄った。
「総司様が指示をなさったのでしょう？　私のした事が原因なのでしたら、何故私をお責めにならないのです？　……何故、あんな酷い事を……」
「椿様」
しかし椿の言葉を、水野は片手を前に出し、掌を立てて制止する。
「何の事を仰っておいででしょう？　何にしろ、お答えは出来ません」
「水野さん」
「例え私が何かを知っていても、お付きには、命に変えても守らねばならない守秘義務が御座います。貴女に何を訊ねられようと、お答えする事は出来ません」
水野の言葉は冷たく、今まで接してくれていた態度とは大違いだ。
これでは何を訊いても答えては貰えないだろう。だが取り敢えず総司が戻って来る日だけは解かったのだから、それだけで充分だ。
「解かりました。日を、改めます……」
椿がそう言うと、早くここから立ち去った方が良いとでも言うように水野が頭を下げる。椿は踵を返し、門へと続く長い通路を待たせている車へ向かって歩き出した。

前庭の噴水側から吹き付ける少し強めの風が、水飛沫を含んだ涼やかな風を椿に当てる。
勢い付いて上気した頬に、それはとても気持ち良く感じられたが、一緒に飛んだ飛沫は彼女の頬を濡らしてしまった。
しかし椿には、この頬が濡れている理由が、噴水の飛沫による物なのか、それとも悔しさと情けなさで一筋流れ落ちてしまった涙による物なのか、どちらとも見当がつかなかったのだ……。

＊＊＊＊＊

椿が邸へ帰った時、一は既に会社へと戻った後だった。
総司には会えなかった旨を伝える為に会社へ電話をすると、一が仕事場にしている専務室には、既に弁護士の田島が大介を保護し、連れて来ていたようだった。
ひとまず彼が自由の身になれた事に安堵した椿は、一に大介と話をさせてくれと頼んだのだ。

『椿ちゃん？　ごめんね。何だか心配かけちゃったみたいだね』
大介の声は、少しも悲観的なところが無く、いつも通り優しく柔らかい。
『大丈夫だよ。キレモノ御曹司は庇ってくれるし、おっかない弁護士の先生は付いてるし、心強いよ』
一や弁護士を引き合いに少々おどける大介は、間違いなく椿を心配させない為に明るく振舞っているのだろう。
「あの……、大介さん……」
椿は大介に謝ろうとするが、辻川の刃が自分に向いたのだという事を大介は知らないだろう。これは何かの濡れ衣。何か不運な偶然、としか思っていない筈だ。
この件に、総司の思惑や椿の言動が関わっているなど、彼は知らないのだ。
「……元気、出して下さいね……。お兄様や弁護士の先生が、きっと何とかしてくれますから」
『そうだね、一と幼馴染で良かった、って、初めて思ったよ。何だかんだ言っても、持つべきものはお坊ちゃまだなぁ』
大介の笑い声と合わせて、「黙れ、庶民っ」　と茶化す一の声が聞こえる。
しばし笑い声が続いた後、心配そうな口調で大介が訊ねた。
『椿ちゃんこそ、大丈夫？　彼と仲直り出来た？』

椿は目頭が熱くなる。

大介は、今、そんな場合では無いではないか。彼は自分にかけられた濡れ衣の事で頭がいっぱいで、他人の事など気にして居られる精神状態では無いのではないのか？

『幸せになる為なんだからね。ちゃんと素直になるんだよ？　椿ちゃんが幸せになれるのを、皆、待っているんだからね』

それなのに彼は、椿を気にかけてくれる

椿の幸せの為に。彼女の恋の心配をしてくれる。

「……はい、大介さん……」

彼の優しい心遣いに、涙が溢れ、受話器を置いた時、その涙は一気に頬を伝った。

こんなにも優しい人を巻き込み傷付けた自分が、彼女は悔しくて堪らない……。

「椿さん……」

リビングで電話をしていた椿の後ろで、ずっと心配そうに彼女を見詰めていたさくらが、そっと声をかける。

椿は振り返ると、小さな彼女の両肩に腕を回し、その肩を借りて、少しの間、涙を流した……。――

椿姫・60　『決心』

「総司様は、本日の夕方にお戻りになります」
水曜日の午前中、辻川邸へ電話をすると、対応に出た水野は事務的ではあったが丁寧な態度で、椿に総司の帰宅予定を教えてくれた。
大介の件は、弁護士が多いにその手腕を発揮してくれている。
罪が確定しないうちから退学処分にするのは不当と、昨日の内に大学側へ退学処分の取り消しをさせた位だ。
葉山製薬への内定辞退も取り消されるが、しかし新たな問題が起こった。「傷害事件の容疑者になった学生を、本社へ迎えるのか」と、どこからかその情報を耳にした役員や株主、ライバル企業までもが騒ぎ出したのだ。
疑いが晴れれば悪く言われる事も無いが、それでも、一度そんな事件に巻き込まれたという噂は、なかなか消えないだろう。

「大介には、予定通り葉山製薬へ入社してもらう。ただ、最初から本社へは迎えられないだろう。別の……遠方の研究室で、二年か三年、彼の能力を発揮してもらう。――その上で、本社へ迎える形を取る他ない……」
一は父である社長と相談をし、大介にとっても、会社にとっても、最善の策を考え出した。

大学卒業後、エリと結婚をする事になっている大介。
彼は結婚をしてすぐ、見知らぬ土地でしばらくの間暮らす事になるのだ。
「大丈夫だ。大介のレベルなら、本社へ迎える時は研究室の副室長位の待遇で迎えられるかもしれないぞ」
椿を心配させない為、一は明るい未来を示唆してくれるが、彼に

も、そして椿にも、また何と言っても大介自身が解かっている。
彼の身に降りかかった疑惑が全て晴れなければ、その未来さえも叶わないのだと……。

＊＊＊＊＊

昼食も摂らず、椿は自分の部屋へ籠っていた。
大きなクローゼットを開き、椿は奥に仕舞ってある白い衣装箱を取り出すと、それを絨毯の上へ置き、箱の前に座ってゆっくりと蓋を開く。
そこからは、柔らかな白いシルク布に包まれたドレスが現れた。
これは以前、総司が椿にプレゼントをした物だ。
椿の花の様な、真紅のドレス。
ローブデ・コルテ調の襟元や、身体のラインをそのまま出すデザインが刺激的で、くるぶし丈でありながら右側に膝上からのスリットが入っている。
総司は着て欲しがっていたが、椿は着る勇気が出ず、ずっと仕舞い込んであったものだ。
上品ではあるが、女性としての魅力を最大限に引き出し、何か違う意味を想像させそうな怪しい雰囲気がある。
外布を開いて深紅のドレスを手に取ると、椿の口元に自嘲の笑みが浮かんだ。

（私……ズルイ……）

総司に会いに行く事を決めた時、椿は迷わずこのドレスを着て行く事を決めた。
どういう気持ちを込めて、総司が椿にこのドレスをプレゼントし

たのか、もちろん彼女は解かっている。解かっていたからこそ、簡単にこのドレスを着る事は出来なかった。
だが彼女は、このドレスを選んだ。
総司への想いに気付く前は、とても出来なかった決心を、胸に秘めて……。

＊＊＊＊＊

夏の十六時といえば、まだ太陽が明るくその存在感を示している。しかし今日は、正午過ぎからその太陽を薄いグレーの雲が覆い、夕立にでも遭いそうな空模様だ。
それをまるで自分の心の様だと感じながら、渡米から戻って来た総司は邸の前で車を下りた。
使用人やお付きが一列になって彼を迎える中、水野が進み出て来て彼に頭を下げると、既に知らせてある来客を告げる。
「――温室で、お待ちです」
温室と聞いて総司は微かに眉を寄せた。大人しく客間で待っているのかと思っていたのだが、温室と聞かされ意外な物を感じたのだ。
総司が帰って来る一時間ほど前に、辻川邸へ椿がやって来たという話は、既に総司へは報告済だ。

「温室へ行って来る。誰も寄こすな」
総司はそう言い渡し、一人温室へ向かった。
椿が訊ねて来ている理由は、ほぼ見当が付いている。――大介の件だろう。
彼を助けたくて、総司を訊ねて来ているのだろう。
椿が本当に好きな、大介の為に……。

「馬鹿だな……私も……」

椿が大介に向けた、清らかで美しい微笑みを目にした瞬間、悟った。

彼女は、この青年が、好きなのだと。

そんな事実に気付けず、彼女の一挙一動に一喜一憂していた自分が、あまりにも情けなくて愚かしい。

それと同時に、そんなに想う男が居るというのに、自分をこんなにも夢中にさせた椿が、酷く憎く感じた。

――憎く感じただけなら、どんなに良かっただろう……。

その憎しみのままに、椿に、そして葉山に、制裁を加えそれで気は済んでいたはずだ。

しかし、出来なかった……。

総司には、その憎しみをも上回る、椿への想いがあったのだ。

愛しくて、恋しくて、堪らない。

彼女への強く熱い想いが、総司に制裁の刃を、彼女では無く相手の男に向けさせてしまった。

そんな事をすれば、彼女の心はまた余計に離れてしまうかもしれないのに……。

こんな行為に走った自分は、何と愚かなのだろう。

総司は、知らなかったのだ。

自分が、こんなにも一人の女性に身も心も支配されてしまえる男だという事を。――

椿姫・６１　『冷瞳』

「何故……温室に」

つい呟いてしまうほど、総司は不思議だった。待っているのなら客間で待っていれば良いのに。

しかし、温室には十日ほど前の思い出がある。

椿に心を許し、つい口にしてしまった両親の話。そして、つい見せてしまった自分の弱さ。――彼女の、花びらのように柔らかい唇に、触れる事を許してもらった事。

そんな場所の方が、お互いに顔を合わせやすいかもしれない。

巨大な辻川家の温室。その扉を開き、総司は足を進める。

椿が何処の場所で待っているのか、訊かなくとも、彼女を呼ばなくとも想像がつく。一度この温室へ招待した時、ひとつの場所にしか彼女を案内しては居ない。

間違いなく、彼女はそこに居るだろう。

茂みを抜け、その場所へ向かおうとした総司は、目の前に現れた光景に目を瞠った。

目の前に広がるのは“藤棚”

今、総司が向かって行こうとした場所だ。

相変わらず美しく咲き誇る“神様が咲かせる藤”は、薄紫色の群生。

その下に、彼女は立っていた。

――真紅のドレスを、身に纏って……。

それはまるで、藤棚の下にひっそりと咲く、椿の花のように美し

い。

総司は、暫しその光景に見惚れた。

静かな温室の中。送風によってさざめく木々や花々の話し声の他に音は無い。

もちろん総司の足音も、彼が近付いて来る為に掻き分けた芝の音も、椿には聞こえていた。

その足音がすぐ近くで止まるまで、彼女はただ藤を見上げていたのだ。

立ち止まっても総司は声をかけてはくれない。その事を少し寂しく思いながら、椿は振り返り、深く頭を下げた。

「――お帰りなさいませ。長旅、お仕事お疲れ様でございます。……辻川様」

総司の眉がピクリと動く。不快な思いに動いたのではない。椿に「辻川様」と呼ばれた事に悲しさを感じたのだ。

「お待ちしておりました……。貴方様と、お話がしたくて」

頭を上げ、椿は総司を見詰める。

陶磁器の様に端整で冷たい表情。その目は割れた陶器の破片のように鋭い。

ナイフのように、目の前のモノを切り裂いてしまう事を許されている人間の目。

計り知れない巨大組織の全てを掌握し、その貫禄さえ感じさせる青年。

彼は“辻川総司”であり、本来椿が抗って良い人間では無かった。

それを認識していなかったのは、椿の失態。

彼がくれる愛情の全てに甘え、身分を弁える事が出来なかった傲慢さが、彼女を愚かな行動に走らせた。

その許しを貰う為に。

――椿に出来るのは、こんな事だけ……。

「お願いがございます……」

椿は落ち着いた声で、ただ冷たい総司の視線を受け止め、口を開いた。

「辻川様が、私の幼馴染に対しまして下されました一連の件に関して……。どうか、お手をお引き下さい……」

椿はゆっくりと足を進め、総司の真正面で立ち止まる。

「辻川様がご立腹なさったのは、私に対してではありませんか？光野大介さんは、何の関係もありません。私が……身の程知らずにも貴方をたばかる様な……」

「彼を、庇いに来たのですか……」

椿の言葉を、総司は遮る。その声は、決して優しい物では無い。優しくはされないだろうと解かってはいたが、椿は悲しさに身体を固めた。

「葉山には、実に優秀な弁護士が着いていますね。まさか一日で、あそこまで彼の身辺を整え直すとは……。だが、どんな優秀な弁護士でも、出来るのはここまでだ」

「辻川様……」

「そんなに助けたいのですか……。彼を」

「それは……、だって、大介さんは、何の関係も……。全ては私が、辻川様に失礼をしてしまったから……」

総司は口角を上げ、嘲笑の笑みを作る。

「大好きな彼の為に、……私に許しを請いに来たという訳ですか……」

椿は言葉を止める。総司が言っている意味が、彼女にはすぐには解からなかった。

「私も、酷な事をしていたのでしょう。貴女には心から好きな男が居るのに、その彼から奪おうとしていたのですから」

「それは……」

「今でも好きなのでしょう？　だから貴女も、こんなに必死になっている」
「ちがっ……！」
違う、と、椿は大声で否定がしたかった。
確かに大介は椿の初恋の相手で、彼の事がずっと好きだった。
けれど、今、椿の心の中に居るのは総司だ。
ずっと気付けなかった気持ちに、大介が気付かせてくれたのだ。

否定をしようとした椿の顎を、総司はいささか乱暴に掬った。
「――綺麗ですね、椿さん。……貴女は本当に、いつみても花のように美しい……」
悲しげな椿の瞳を見詰め、それから彼女の全身に視線を流す。
総司がプレゼントしてくれた真紅のドレス。彼が思い描いていた通り、このドレスを身に纏った彼女はとても美しく、ドレスの艶やかさを忘れさせてしまうかのような清らかささえ感じる。

「それ相応の覚悟を……、していらっしゃったと、思って良いのですね……」
冷たい口調に、椿の身体が震えた。
間違いなく彼女は今、恐怖を彼から感じたのだ。

椿に言葉を出す間を与えず、ドレスがいきなり彼女の身体から引き剥がされる。
藤棚の下へ投げ込まれ、身体の上に総司の重みと香りを感じた瞬間、思考が着いて行かず真っ白になってしまった彼女の視界に、狂い咲く藤の花だけが飛び込んで来た。

椿姫・６２　『悲涙』＊Ｒ１５（前書き）

＊今回のお話には序盤、“無理矢理な表現”が少々含まれています。
苦手な方は閲覧をお控えくださいますよう、お願い致します。

椿姫・６２　『悲涙』＊Ｒ１５

「……つじ……かわっ、様……」

椿は必死で総司の腕を掴んだ。

とはいえ、指先でスーツを引っかけて掴むのが精一杯だ。あまりの事に身体が震え、手の力も上手く入らない。

藤棚の下。沢山の花びらの中に投げ込まれた椿に身体を重ね、総司は彼女の柔らかな肌に吸い付いた。

「……ぁっ……！」

それはあまりに強く乱暴で、吸い付く度に彼女へ痛みを与える。痛みは耳の裏から首筋を渡り、胸元へと繰り返されるが、椿には何処からやって来る痛みなのかも解からない。

「つ、じ……、んっ！」

椿の唇を塞ぎ強引に侵入を果たす舌は、声も出ない位、彼女を辱めた。

上半身から下げられたドレスは既に身体から抜け、椿が身に纏うのは小さな下着のみだ。その身体の上を総司の両手が走り、その度にピクリピクリと身体中が震える。意識などしなくても、恐怖を感じた彼女の身体は慄く事をやめない。

そして左の胸の膨らみを力一杯鷲掴まれた時、彼女の身体はより一層大きく跳ね上がった。

彼女が驚き怯えていると解かっているはずなのに、彼女が辛いと解かっているはずなのに、総司の行為は止まらない。

自分が悪いのだと解かっていても、椿は辛くて悲しくて堪らなかった。

総司は、椿が大介を好きで、大介を守りたいが為にこの身を彼に

投げ出したと思っている。
そんな誤解をされたまま、このまま純潔を彼に捧げねばならない事が、辛くて辛くて、叫び出したいほどに悲しかったのだ。
そしてその悲しさは、一筋の涙となって、彼女の頬を伝う。

椿の涙を目にして、総司の動きがフッと止まった。
「泣いているのですか……？」
椿は流れ落ちてくる涙を拭う事もせず、涙目のまま総司を見上げる。
そこにあるのは冷たい総司の目。以前の様に、彼女に向けられる温かな眼差しは何処にも無い。
この冷たい眼差しを向けたままの彼に、椿はこれから引き裂かれるのだ。
彼女の、本当の気持ちを伝えられぬまま……。

「……あの青年の為に……、ただ泣いて、……貴女は耐えるのですか……」
一瞬総司の目が悲しみを映す。
彼とて辛いのだ。椿が他の男の為に、大切にし続けていた自分自身を投げ出そうとしているという事が。
「そんなに……、あの青年が、好きなのですか……」
「ちがいます……」
椿が発した声は泣き声だった。
その声は小さく、そして震えていた。
口答えが出来る場合では無い。しかし椿は、これだけは総司に伝えたかったのだ。

「私が……、本当にお慕いしているのは……、総司様です……」
椿の身体をまさぐっていた総司の手が止まる。

悲しい光を放っていた彼の双眸が、大きく見開かれた。

「貴方が、恋しくて愛しくて……堪らないのに……、私はそれに気付けずにいた……。愚かな女です……」

椿はゆっくりと言葉に出し、涙が零れ続ける瞳で、総司を見詰める。

「――大介さんは、私にそれを気付かせてくれただけなのです……。私が……、心から好きなのは……」

椿の言葉が、総司の心に沁み渡る。

潤みを含んだ宝石の様な瞳が、彼を惹き付けて離さない。

柔らかな花びらを思わせるその唇から出たのは、待ち焦がれた言葉。

総司を好きだという、彼女の心からの言葉。

総司は困惑した。

これは、どう取れば良いのだろう。

椿は大介を好きだと思っていたのに、大介を助けようとして、泣く泣く身を投げたのだと思っていたのに……。

彼女が好きなのは、総司なのだと言う。

大介を助ける交換条件として、椿を奪ってしまおうとしていた自分に、総司は激しく羞恥を覚える。

しかしまだ彼女の言葉を受け入れられない彼は、椿の息が止まってしまうような激しい唇付けをすると、彼女を突き放し、背を向けながら立ち上がった。

「……総司、様……」

総司の身体が離れ、自分がほぼ全裸状態である事を急に恥ずかしく感じた椿は、両腕を交差させ胸を隠す。背を向けてしまった総司

を見ながら、ゆっくりと身体を起こした。
我慢しきれず口に出してしまった想いだが、それは総司に伝わったのだろうか。椿はそれが心配だった。
彼の背を見詰めながら、何か言葉をかけてくれるのを待っていた椿だが、総司は何も言わず歩き出した。
「……総司様！」
椿の叫び声に、総司は一度足を止める。しかし両手をグッと握り締め、振り向く事無く再び歩き出したのだ。

「つかさ……さま……」
椿の瞳から、涙がぽろぽろと零れる。
立ち去ってしまったという事は“帰れ”という事なのだろう。彼女の告白は、彼を不快にさせてしまったのだろうか。

「つかさ様……」
両手で顔を押さえ、椿は肩を震わせ泣き続けた。
彼女の哀しい呼びかけは総司に届かず、温室のドアが大きな音を立てて閉まった音だけが椿の耳に響く。

――その音と共に、どこからともなく、小さな雷鳴が響き出した……。

椿姫・６３　『雷鳴』

「申し訳……、ありません……」

両手で顔を覆い、俯いたまま、椿は何度も謝罪の言葉を呟いた。

瞳を覆う指先からは、伏せた瞼から溢れる後悔の雫が零れ出している。それは彼女の細い指先から白い手の甲を幾筋にも流れ、露わになったまま、普段晒される事の無い膝を濡らした。

儚げにも透明な肌を藤棚の下に晒したまま、椿は総司を想い泣き続けた。

彼に嫌われたのかと考えると、この身を引き裂かれてしまうほどに悲しい。

もう以前の様に温かな眼差しで彼女を包んでくれる事が無いのかと思うと、叫び出してしまいたくなるほどに辛い。

血の気が引き、身体中が冷たく、温室の中であるはずなのに椿は凍えてしまいそうだった。

「総司様……」

何て浅はかだったのだろう……。

背を向けられて、やっとこんなにも大切な事に気付いた。

こんなにも……。

総司が好きだという事に。

今やっと、気付くとは……。

ふわりとした風が椿の身体を包む。

藤棚の下に座り込み動けない彼女の長い絹糸の黒髪が、纏う物を持たない身体を隠す様に肩から広がった。

冷たくなっていたはずの肩に温かな物が落ちたのを感じ、それが総司の手である様な気がして、椿は涙で濡れた顔をハッと上げる。
冷え切った彼女に温かみを与えた物は、肩に、そして頬に、そして膝に、次々と舞い落ちて来る。
それは、藤の花びらだった。
「慰めてくれるの……？」
思わず呟いた椿は、自分の言葉に口元を和ませる。
舞い落ちて来る藤の花びらが、自分を慰めてくれている様な気がする。それだけ自分は、心が弱くなっているのだろうか。
「ありがとう……」
しかし何故だろう。
舞い落ちて来る藤は、必要以上に花びらを散らし彼女に話し掛けているようだ。
本当に、慰めるように……。
哀しみで冷えたその身体を、庇い、温めてくれるように。
椿は足元に落ちていた真紅のドレスを手に取ると、ゆっくりと立ち上がり、それを再び身に纏った。
帰るにしても裸では帰れない。ドレスを乱暴に引き裂かれなくて良かったと思う他はない。
椿は今にも崩れてしまいそうな身体を立て、藤に手を伸ばす。
「……有難う……」
薄紫の藤の花に触れ、撫でる様に指先を動かして、彼女は微笑む。
藤の花が、椿と共に微笑んでくれた様なおかしな錯覚が、彼女を襲った。

静かな温室の中に、少々耳障りな雷鳴が響く。あまり天候が良くなかった事を思い出した椿は、雨でも降るのかと察し、それなら早く温室から出て帰らなければと思うが、手に触れた藤の優しさがあまりにも心を和ませてくれる為、ここから立ち去り難い。

その優しさが手放せなくて、彼女はこの場から動けないのだ。

――しかし、先ほどから聞こえる雷鳴は間違いなく大きくなり続け……。

温室の方向へ進んでいた……。

＊＊＊＊＊

「総司様！」

邸へ入った総司に、すぐさま歩み寄って来たのは水野だった。

椿が待つ温室へ総司が向かった事を知っている彼は、総司は椿を連れて邸へと戻って来るだろうと思っていたのだ。

しかし総司は一人で戻って来た。それも、何処か悲壮な表情で。

「総司様、椿様は……」

総司は戸惑う水野の顔を見ると、自らを嘲笑う。

「水野……、私は、また、大切な物を失うかもしれない……」

己の行為の愚かさを、彼は自ら責めた。

手に入りかかった華を、彼は自らの愚かさで突き離し、傷付け、握り潰してしまおうとしたのだ。

「ならば、失わぬよう、御努力下さい……」

自嘲する総司に、水野は真剣に進言する。それは、相談役としての彼だから許される“口答え”だ。

「失わぬよう……離さぬよう……、貴方が努める他、無いではあり

ませんか」
「水野……」
「お願いがございます。総司様」
水野は総司の前に跪き、右手を胸に当てて彼に頭を下げた。
「私やお付き、屋敷の者達に、椿様を『奥様』　と呼ぶ権利をお与えくださ い」

総司は目を瞠る。彼女の存在を求めているのは自分だけでは無い。彼の周囲も、自分達の主人“辻川総司”を今までに無いくらい夢中にさせた“椿”という女性を求めているのだ。
総司は、許されるのだろうか。椿を傷付けようとした事実を、果たして彼女に許してもらう事が出来るだろうか。
総司は両手を握り締め、顔を上げる。

温室へ戻ろう。総司がそう決心を付けた時、邸の中にまで響いて来るような大きな雷鳴と、そして撃音が響いた。
異常な音に水野が立ちあがる。使用人達が騒ぎ出し、何処からか聞こえた叫び声は、総司を蒼白にした。

「温室に、雷が落ちた！！」

その声が耳に入った瞬間、総司は何も考えず邸を飛び出したのだ。

椿姫・６４　『思慕』

「温室に雷が落ちた！」
その言葉は、総司の身体から一気に血の気を奪い、背筋に氷柱を立てさせた。
「総司様！」
水野が叫ぶ声を背に、彼は振り向く事無く邸を飛び出し、今歩いて来た温室へと続く裏庭への通路を走り出したのだ。
恐ろしいほどの胸騒ぎが彼を襲う。
全速力で走っているのとは違う、大きな鼓動が彼の胸を叩き、その息苦しさに倒れてしまいそうだ。
温室に椿を一人残して来てしまった。
ドレスを奪い取った挙句、涙に咽び悲しみに暮れる彼女を、優しい言葉ひとつかけられないままに、落雷が有ったという温室へ一人残して来てしまった。

「椿さん……、椿さん……」
胸に去来する不安から逃げようとするかのように、総司は椿の名を繰り返し呟く。彼女の名を呟き、彼女の存在を自分の中で確認していなければ、彼は“もしかして”の不安に押し潰されてしまいそうだ。
「椿さん……」
今総司の心を支配しているのは、五年前の出来事。
落雷が原因の飛行機事故で他界した両親。突然の天災は、彼から尊敬するべき大切な両親を奪った。
巨大組織の跡を継ぐ、たった一人の跡取りを、厳しくも壮大な愛情で見守り指導してくれた両親は、彼の誇りだったのだ。

その両親を失った時の辛さと悲しみは、言葉では言い表せない。泣いている暇など無かった。弱音を吐く暇など無かった。

例え誰かを傷付けようと、人の人生を踏みつけようと、弱さなど見せられない。そんな物を見せれば、外からの重圧に彼は押し潰されてしまう。

ただ冷徹な自分だけを作り上げて、仕事だけに全てを捧げ過ごした数年。そこには、優しい気持ちも、穏やかな時間も存在などしなかった。

それを打ち破ったのは、葉山椿という女性だったのだ。

初めて出会った時、総司を睨み付ける彼女の瞳に中に、彼は“気が強い女性”という噂以上の、もっと聡明な意思を感じた。

ほんの小さな切り花を、無意識のうちに踏み付けてしまっていた総司を責めた彼女には、小さな命の為に大きな物に立ち向かう勇気と、高尚たる優しさが有った。

彼女から感じた強い慈愛の心に、彼は惹かれていったのだ。

決して、自分に逆らった女性が珍しかった事や、椿の外見が美しかったから、それだけの理由では無い。

椿という女性の全てが、彼を惹きつけて離さなかったのだ。

会えば会うほど、言葉を交わせば交わすほど、その想いは深まるばかり。彼女には、どんなに素っ気無くされようと、不思議と憤りも感じはしなかった。

思い通りにならない人間など居ない筈の総司が、ただ一人、思い通りにならない女性。

それでも、彼女に自分の気持ちが伝わるまで、彼は待ち続けた……。

たかが一企業の娘。思い通りにする手立てはいくらでも有ったのに、それをしなかったのは……。

――彼女を、椿の華を、手折りたくは無かったから……。
それだけ総司は、椿を大切に思っていたのだ。

しかし、彼女へ注ぎ続け圧迫された約二年半の想いは、“裏切りと絶望”の前に、彼を厳酷な行為へと走らせる。
彼女を傷付け……。
彼女の口から零れた、彼が待ち焦がれた言葉を、信じられないまま。

「椿さん！」
目の前に温室が見えて来た。先に駆けつけていたらしい使用人が、警備員二人とドアの前で何かを話している。
総司はいきなり三人を押し退けると、ドアを開いて中へと飛び込んだ。
「御当主様！　お待ち下さい！　まだ安全確認が！！」
驚いた警備員が総司を止めようと手を伸ばすが、それを総司は一喝する。
「下がれ！！」
警備員の動きは止まり、他の二人も動けなかった。そんな三人を残して、総司は藤棚へと走ったのだ。
天井を見上げると、確かに天井の中央辺りとみられるガラスが割れている。温室に落雷が有ったのは間違いが無いようだ。そしてガラスが割れている場所を見て、総司は眩暈を覚える。
あの場所の真下には、総司が目指している場所があるのだ。

――椿は居るはずの、藤棚が……。

「椿さん！」
吐いてしまいそうなくらい苦しい声で彼女の名を叫び、総司は茂みを掻き分ける。そして、ビクッと足を止めた。

彼の目の前に広がった藤棚。
藤棚の上と周辺にはガラスの破片が飛び散り、それはまだパラパラと落ちて来る。またいつ天井からガラスが落ちて来るか解からない、危険な状態だ。
そんな中……。
藤棚の真下に、椿が倒れていた。

真紅のドレスを纏った姿で、うつ伏せに倒れる彼女。
それはさながら、打ち捨てられた一輪の花の様……。

「椿さん！」
総司は何も考えず彼女の傍へと駆け寄った。芝に散ったガラスの破片は、彼が踏み付ける度に大きな音を立てて砕け、彼にこの場所が危険である事を知らしめる。
しかし総司は構わず藤棚の下へと入り、そして不思議な事に気付く。この藤棚の下にだけ、ガラスの破片が落ちてはいないのだ。藤の上に破片は乗っている。藤棚の周囲にも散乱している。しかしこの下には、ひとかけらのガラスも落ちてはいない。
あの天井を見る限り、落雷がこの藤棚へ落ちたのであろう事は明白だ。藤棚周辺の芝が焼け焦げ、地面を荒らしているのを見れば解かる。

だが、藤には何の異常も無い。そしてその下に居た椿にも。

彼女はただ、落雷の衝撃で散ったのであろう花びらの中で、倒れているだけなのだ……。
狂い咲く、藤の中で。

椿姫・65　『無傷』

「……椿さん……」

その花びら達は、まるで彼女を守っているかのようにも見える。

絹糸の髪が彼女の身体の上で広がり、焼け焦げた痕も無い。

そう考えると、椿は落雷を見たショックで失神してしまっているだけなのかもしれない。不安に思っていた雷の直撃などは受けてはいないのだろう。

少々安堵した気持ちで総司は椿の傍らへ屈み、彼女を抱き起こそうとその身体に触れた。――しかし……。

「……つっ……！」

その瞬間、総司の手に電流が流れ、電気ショックを受けたかのような痺れが伝わって来たのだ。総司は前に出した手を瞬時に引いた。

椿の身体は、落雷を受けたショックで微かに放電状態に陥っているのだ。彼女の身体を覆う髪や花びらが、よく見るとふわりふわり浮遊しているのが見て取れるではないか。

「そんな……」

一度安堵した気持ちが再び不安に襲われる。椿は間違いなくこの身に落雷を受けていたのだ。

――このままでは彼女は、両親と同じように落雷に命を奪われてしまう。

「椿さんっ！」

総司は何の躊躇いも無く椿を抱き上げ、その腕の中に収めた。

ビリッと痺れる感覚が彼を襲うが、そんな物、今の彼にはさほど気になる物では無い。こんな痛みよりも、もっと辛い心の痛みを、総司は椿に与えてしまったのだから。

「椿さん……どうか……、どうか……」
総司は哀願するように呟き、椿を腕に抱いたまま立ち上がる。
その時、総司の後を追って来た水野と警備員達が追いついて来て、茂みから姿を現した。
「総司様！　椿様は……」
総司の腕に抱かれた椿を見て、落雷を受けたのかと水野は驚くが、彼に驚き続ける暇は与えられなかった。
総司はシッカリと椿を抱いたまま、厳しい口調で指示を出したのだ。
「医師を呼べ！　辻川の最高のスタッフを集めろ！　辻川家当主の奥方が危機に瀕しているとな！！」
水野は一瞬目を見開くが、口元には知らず笑みが浮かび「はい！」と返事をして踵を返した。
腕に電流の痛みを感じながらも、総司は椿を胸に抱き締める。
彼の視界にふわりふわりと舞い映る藤の花びらを見詰めながら、彼は祈った。
（どうか……この華の命を……散らさないでくれ……）
「椿さん……」
藤の花びらがクルリと大きく舞い、割れた天井から風が吹き込む。
風は、椿を見守る様に花びら達を舞い上がらせ、総司を見送る様に彼の身体にまとわりついた。
「私を……許して下さい……」
椿を抱き締める彼の、悲しげな声を聴いていたのは……。
――藤の花だけ……。

＊＊＊＊＊

「実に不思議な事ではありますが……」

その医師の声は、不思議とは口にするものの、さほど驚いてはいないようだった。

「椿様のお身体に、傷や異常は認められませんでした」

医師の名は斉（さい）という。まだ若い三十代初めの医師だ。

辻川財閥が管理運営をする総合病院で婦人科を担当しているが、優秀で人望も厚く、今日は夜勤明けで休みだったのにも拘らず、水野から直接の連絡を受けすぐさま駆けつけてくれた。

椿の診察は、辻川邸の医療設備を備えた一室で行われ、五人集まった医師がその診察に当たった。そしてその結果はすぐに出たのだ。

「異常はない」　と。

部屋の中には、大きなベッドに寝かされ、まだ意識が戻らない椿と、その傍らに斉医師がカルテを持って立っている。他四人の医師は壁側で待機し、斉医師が代表して報告を行っているという状態だ。

他にも年輩の医師が居るというのに、最終報告を彼がしている辺りから斉医師の優秀性が窺える。

その他に、部屋の中には水野を筆頭に総司のお付き十人が揃い、もちろん総司も椿が横たわるベッドの足元でその話を聞いている。

そしてもう一人。

椿の枕元には、兄である一が、妹の顔を神妙な面持ちで見詰めながら立っていたのだ。

一が呼ばれたのは、椿を辻川邸へ運び込んですぐ。妹が落雷を受けたという信じられない話を聞き、もちろん一はこの日の仕事を全て放り出して辻川邸へ駆けつけた。

「まぁ、不思議に思われるでしょうが、こういった事例は無い訳ではありません。落雷事故に遭いながらも、その身には傷一つ、異常一つ無かったという例は、世界中にあるのです」

斉医師はそう説明しながら、椿の頬にかかった髪を指で梳く一に目を向けた。

「外傷は有りません。火傷の痕一つ付いてはいませんよ。御安心下さい」

一は顔を上げ、斉を見て微笑む。兄の一を安心させようと気を遣って話しかけてくれたのだという事が、一本人にも嬉しい位に伝わった。

「ですが……、ひとつだけ、覚えておいて頂きたい事が……」

斉医師はカルテに視線を落としてから、今度は総司を窺う。心配げに椿を見詰めていた総司だが、斉医師の視線に気付いて彼と目を合わせた。

「このお嬢様は、御当主様の奥方になられる方だと御伺い致しました。――その上で、の、お話です。宜しいですか？」

何か重い意味合いを含ませる斉医師の口調に、総司は眉を寄せる。斉医師に視線を合わせたまま肩の横で片手を一振りすると、水野を残した九人のお付きと、他四人の医師が部屋を出た。人払いをしなければいけない話である事を悟ったのだ。

水野が残ったのは非常時の為。何を耳にしても彼の守秘義務は絶対だ。今のような非常時に残るのは、水野の役目でもある。

人払いを見届け、斉医師は、総司を、そして一を交互に見て、話し出す。

――辻川財閥の未来を。総司と椿の未来を問う話を……。

椿姫・６６　『兄の怒り』

「確かに外的な傷は有りません。ですが、検査では解からない部分に関しては、何とも言えないのです」
「解からない部分、とは？」
よほど心配なのだろう。斉医師の説明に口を挟んだのは一だ。彼が人の話を全て聞く事無く、勢い込んで疑問を投げかけるなど、そうある事では無い。
「遺伝子レベルの問題です」
斉医師は総司へ視線を移し、説明を続ける。
「椿様は、まだ未婚でいらっしゃる。その上でお話をさせて頂きますが、落雷のショックで遺伝子レベルの損傷があるかもしれないという事は、将来お生まれになるお子様に、何らかの不都合が発生する恐れがあるという事です」
椿の髪を梳いていた一の手が止まる。そして総司は、ごくりと乾いた空気を呑み込んだ。
「実際にもあるのです。落雷を受け、何の異常も無かったはずの女性が産んだ子供に、身体的、精神的異常が生じていたという例です。そういった異常は妊娠時の検査である程度解かる物なのですが、異常は全く見受けられなかったにも拘らず、そんな結果になってしまったのです。また、生殖や妊娠機能には何の不都合も無いのに、全く子供が出来ない、という例もございます」
悲しいほどに張り詰めた空気がその場を包んだ。
椿を見詰めた一でさえ、目を見開き、突然妹に掛けられたこの不可解な難問を解きかねている。
斉医師の説明は、女性として最大の試練を椿に与えるものではな

いのか。

子供が出来ないかもしれない。

出来ても、何らかの異常を有しているのかもしれない。

それは女性にとって、そして“葉山家の娘”として嫁がねばならない運命を背負って育った椿にとっての、死刑宣告にも似た言葉ではないのか。

そして総司も同じように、その死刑宣告を、息を呑んだまま聞いたのだ。

「――つまり私は、普通に子供を儲ける事が出来ないのかもしれない、……という事なのですね……」

いきなり発せられた声に、一番驚いたのは一だった。

ずっと瞼を閉じていた椿が、ゆっくりとその瞼を開きながら、言葉を口にしたのだから……。

それは、ごく小さな声ではあったが、沈黙が走る寂とした部屋の中では、一番離れたドアの横に立つ水野にさえ聞こえていた。

どうやら途中から椿の意識は戻っていたようだ。斉医師の話を、彼女もぼんやりと耳に入れていたのだろう。

「必ず、では有りませんよ、椿様。そのような可能性がある、というお話です」

斉医師は、決して断言はしない。ひとつの可能性として話しただけである事を口にするが、その可能性があるという事は、“ない”とハッキリとは言えない、という意味だ。

「解かりました……」

椿は小声で返事をし、礼をする意味で瞼を一度下げる。すると一が、ゆっくりと椿の身体に掛けられた上掛けをはぐった。

「椿、帰ろう」

「……お兄様……」

「葉山の家へ帰ろう。ここではゆっくりと眠れないだろう？」

一は椿の身体の下に腕を入れ、彼女を抱き上げようとした。しかし彼女は、数時間前に落雷を受け、まだ身体が休まってはいない状態なのだ。今動かすのは得策ではない。

「待って下さい、一さん。せめて今夜は、椿さんをここに……」

総司もそう思ったのだろう。慌てて一に歩み寄ろうと足を一歩踏み出した。――その時……。

椿から一旦腕を離した一が、物凄い勢いと力で、総司の胸倉を掴み上げたのだ！

「……お兄……様っ！」

椿は心臓が止まってしまいそうなくらいの衝撃を覚え、悲鳴の様な声で一を呼ぶ。同じく驚いた水野が駆け寄って来ようとしたが、総司は右腕を横に出し、水野を制した。

「こんな所に……、大切な妹を置いておく事は出来ない……」

総司でも一瞬ゾクリと寒気が走るような冷眼で、一は総司を睨み付けた。

「辻川様……。貴方は……、椿に何を……っ」

一は声を詰まらせ、横目で椿を見下ろす。その視線を追い、総司は一の怒りの理由を悟った。

不安げに二人を見上げる椿は、ドレスでは無く、一枚物ワンピース型の検査着を着せられている。前が開襟型になったものだが、その検査着から覗く彼女の首や鎖骨に、通常では付き得ない赤紫の痣が多数見えるのだ。

それは、憤りのままに椿の身体を汚してしまおうとした総司が付けた、罪の痕だ。

椿が総司と話しをすると言って出掛けたのは一も知っていた。しかしいきなりその椿が、辻川家で落雷事故に遭ったと連絡が来たかと思えば、彼女の未来を追い込むような話を聞かされ、あまつさえ大切な妹の身体には、潔癖で貞操を重んじていた彼女が付けているはずの無い情欲の欠片が、その肌に多数刻まれている。

兄としての一が、抑えきれない激憤を覚えるのは、当然の事ではないか……。

椿姫・67　『運命』

「お兄様……、おやめ下さい……。総司様は、何もしてはおりません……」

一らしくない暴挙に驚いた椿は、力の入らない身体を何とか起こそうと身じろぎをする。一人で起き上がろうにも起き上がれない彼女を見かねた斉医師が、彼女の背をゆっくりと押し、起こしてくれた。

椿はひとつ息を吐いて、起こしてくれた礼を言う意味で儚い微笑みを斉医師へ向けると、総司を睨み付ける一を止めにかかったのだ。

「私が……、私が愚かな真似をしただけです。……総司様は、何も……」

辛い身体を騙しながら、総司を庇おうとする椿。その気持ちが一にも伝わったのだろう、彼は総司から手を放し、再び椿の身体に腕を回して、横抱きに彼女を抱き上げた。

「帰ろう。椿」

「……お兄様」

「お前に……、辛い思いをさせたな……。すまなかった……」

「とんでもありません……」

椿を腕に抱き、一は厳しい視線を総司へと向けたまま軽く頭を下げ歩き出す。しかし数歩足を進めた所で、ピタリと立ち止った。

そして、何よりも辛い一言を、彼に投げたのだ。

「……辻川様。……椿の事は諦めて下さい。……貴方の元へ、妹をやる事は出来ません」

一の言葉に総司は息を呑む。いつ顔を合わせても紳士な態度で自分を迎えてくれていた一から受ける、それはとても辛い言葉だった。

「お兄様……」
そして椿も泣きそうな目で一を見上げ、しかし反抗をする事も無く、そのまま兄の胸に顔を埋めたのだ。
総司は何も言わない。そして椿も、何も言えない。
それは二人とも、一が言った言葉の意味が、痛いほど解かっているからだ。

総司は辻川の総帥。
もちろん彼は結婚をして、次の跡取りを儲けなければならない。
それは、総帥としての義務でもある。
しかしそこに、跡取りを作れるのかどうか解からないと疑問を投げられた娘を、迎える訳にはいかない。
もし作れても、何らかの異常を持って生を受けるかもしれない可能性のある子供ではいけない。そんな子供を孕む可能性のある娘では、いけないのだ。
辻川財閥のこれからを担う、優秀な子供を産める娘で無くては、総帥の妻にはなれない。

総司にも、そして椿にも、それが苦しいほど解かった。
一の進言は、正しい。
だから二人とも、何も言えない……。

総司と椿は、辻川の未来の為にも、結ばれてはいけないのだ……。
――

一は部屋を出て、椿をシッカリと抱き抱えたまま、早くここから離れようとするかのように速足で歩いた。
腕の中の椿が震えている。身体全体を震わせ、一のシャツの胸を掴んで、そこに顔を埋めながら。

――彼女は、泣いているのだ。
声が出ない様に下唇を噛み締め、泣き叫びたい気持ちを一のシャツを掴む手に込めて。
今すぐに一の腕を振り払い、飛び降りて総司の元へ走って行きたい衝動を、抑えている。その気持ちの手助けをするかの様に、一は椿の身体を、震えが止まってしまう位に強く抱き締めた。

気丈な妹が泣いている。
美しく気高く、凛とした気の強さで名高い自慢の妹。“葉山の椿姫”が。

一は、総司と関わる様になってから、どんどんと変わって行った椿を思い出していた。
可愛らしく、美しく、艶やかに変化していった妹。
女性として変化していく妹を見ていて、どれだけ嬉しく思ったか。
否定しながらも、幸せそうな笑顔を見せる妹を見ていて、どれだけ彼も幸せな気持ちを貰ったか。

こんな事故が無ければ、二人は笑顔のまま手を取り合う事が出来たのに。――

「――総司様……」
椿が発した愛しい人の名は、声になって居なかったのかもしれない。
その悲しげな声は、恐らく一にも聞こえてはいなかっただろう。

藤棚の元で仕掛けられた、運命の悪戯。
それは、手を取り合えそうな二つの想いを無残にも引き裂いた。
この翌日から、総司は椿の元に姿を現さなくなり……。

最初はそれを哀しく感じた椿も、これは仕方が無い事なのだと自分に言い聞かせ……。

それでも納得出来ない、したくない自分を感じながら、自分に科せられたこの運命を恨んだ。

――そうしながら、二週間の時が過ぎたのだ……。

椿姫・67　『運命』（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。
いつも『椿姫純恋華』　お読み頂き、有難うございます。
本作品は、完結まであと5話分を残すのみとなりました。
どうか最後まで、総司と椿、二人の純恋の行方を、見守って頂けると嬉しいです。

宜しくお願いします。

椿姫・68　『諦念』

「お帰りなさい、一さん。今日も早いですね」
玄関ホールへ駈け出して来たさくらの足取りは、軽やかだった。
この二週間、一はほぼ残業無しで帰ってくる。必然的に、彼女が一と一緒に居られる時間も増えているという訳だ。
だが、一が早く帰ってくる理由は、残念ながらさくらの為だけでは無い。
「ただいま、さくら。――椿は、どうして居る？」
「今はお部屋にいらっしゃいます。今日は外商の方がいらっしゃっていて、一緒にお洋服を見ました」
彼はこの二週間、帰ってくると必ず椿の様子をさくらに訊くのだ。
さくらが出した両手に鞄を預けるが、彼女がその重さに少々よろけるのを見て、クスリと微笑みながら再び鞄を彼女の手から取り返す。“帰宅時のお世話”をさせてくれないと、さくらが唇を尖らせる前に、一はスーツの上着を預けた。
「ちょっと、椿に会って来る」
階段を見上げ、歩き始めた一に、さくらは慌てて声をかける。
「あの、一さん……」
彼が振り向くと、彼女は言葉を濁しながら不安そうな表情を見せた。
「椿さんは、このままなの……？」
一と結婚をすれば、年下でありながらも椿の“義姉”となるさくら。葉山家にやって来た時から妹の様に可愛がってくれた椿の事が、さくらは心配でならない。
一は椿を気にするさくらの気持ちを嬉しく思いながら、安心させる為に彼女へ微笑みかけた。

「大丈夫だ。……椿は、幸せにならなければならない娘だよ」

＊＊＊＊＊

ソファに横たわっていた椿は、ドアにノックの音が響いた事に気付き、閉じていただけの瞼を開いた。

「どうぞ」と声をかける前にドアが開き、一が入って来るのが視界に入ると、椿は苦笑いをしながら起き上りソファへ座り直した。

「無作法ですわ、お兄様。こちらが『良い』とも言わないのに、女性の部屋のドアを開けるなんて」

椿らしいお小言ではあるが、その口調に以前のような勢いは無い。無理も無い話かもしれないが、この二週間、椿はずっとこのような感じなのだ。

自分の素直な気持ちに気付いた途端、それを否定しなければならない出来事が起きたのだ。更に想い人には、もう二度と会えない。弱い女性なら、ヒステリー状態に陥ってしまっても不思議ではない。椿だって、そうしたかった。泣き喚いて、総司に会いたいと、一を責めたかった。

――しかし、それをしたところでどうなる？

自分の我侭な想いで、辻川の未来を壊すかもしれないのだ。総司だって、受け入れてはくれないだろう。

彼には、尊敬する両親から受け継いだ、辻川財閥という巨大組織を守り繋いでゆく義務がある。

彼とて、自分の我侭でそれを壊して良い人間ではないのだ。

二週間前の一件の後、大介への容疑は嘘の様に晴れた。

事件は何事も無かったかのように取り消されたのだ。

それでも大介が最初から葉山の本社へ入社出来ない事に変わりは

ないが、大介本人はそれを悲観してはいない。地方研究室で実績と成果を上げて、室長レベルになって帰って来るからと、頼もしい笑顔を見せてくれた。
大介の件を取り消してくれた事に、せめてお礼を言おうと辻川家へ電話をしてみたが、総司の秘書と名乗る男性が伝言を受け取り、結局彼に繋いで貰う事は出来なかった。
それでも仕方が無いと、椿は諦めた。

「今日は、何か買い物をしたのか？　外商が来ていたそうだが？」
一は椿の小事を聞いて聞かない振りをしながら、彼女の傍へ歩み寄った。
「夏物のワンピースを二枚ほど。……とても綺麗な、赤いワンピースだったので……」
「赤？　お前が赤とは、珍しいな」
「……はい。……ちょっと、変わったものをと……」
言葉が消えかかる椿は、寂しそうに微笑む。赤を選んでしまったのは、二週間前に身に纏った真紅のドレスを思い出してしまったから。あれほど露出は多くは無いが、前がカシュクール型のデザインで、椿が選ぶにしては大胆な物だった。
「お兄様は、今日もお早いのですね。お仕事は大丈夫ですか？」
一を見上げ微笑む椿を見詰めて、彼は妹の頭を撫でた。
兄が早く帰ってくる理由の大部分が、彼女を心配してだという事を椿自身気付いている。早く元気な所を見せなければ、一が今まで通り仕事をして来られないと解かってはいても、なかなかそれが出来ないのが実状だった。

「椿、お前に、客人を連れて来た」
「……お客様？」
椿は首を傾げる。会社帰りに連れて来る客とは誰だろう？　取引

先の人間だろうか？

「大きな薔薇の花束を抱えた、とても立派な紳士だ。――お前に、当家の温室を案内して欲しいと言っている」

何かの予感に鼓動は大きく高鳴り、椿は目を瞠った。

椿姫・６８　『諦念』（後書き）

＊「活動報告」の方に６／２１～７／１まで、ｗｅｂ拍手で頂いたコメントのお返事を掲載させて頂いています。
　この間にコメントを下さった方。覗いてみて下さいませ。
ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２８２５４／ｂｌｏｇｋｅｙ／２２７９３７／

　沢山の拍手を、いつも有難うございます！

椿姫・69　『許可』

「……それは……、どちら様ですか？」
椿の声は震えていた。
それは、その“客”が誰なのか予想がつくからだ。
それは、“大きな薔薇の花束を抱えた紳士”であり、“温室を椿に案内してもらいたがっている”人物だ。それだけで思いつくのは、たった一人しか居ないのだ。
「実はな……。私がこの二週間、残業もせず早く帰って来てしまうのは、その人物のせいでもあるのだ」
一は大きな溜息をつき、腕を組んで椿を見下ろす。
「朝夕に会社へやって来ては、専務室で土下座をして動かない。恐らく、今までお前に会いにくる為に使っていた時間を使って、私の所へ来ているのだろう」
この二週間、“彼”は椿の元を訪れてはいない。
それを椿は、仕方の無い事と諦め、もう“彼”には会えないものだと覚悟を決めていたのだ。
だが、それは違う。“彼”は椿では無く、一の元へ通っていたのだ。朝に夕に、今まで椿の元へ通っていたように。
それは恐らく、――総司の元に、椿をやれないと言った一に、許しを貰う為……。

「正直、仕事がはかどらん。申し訳ないが目障りだ。最初の頃お前が、面倒くさそうな顔をしていた気持ちが良く解かった。お前、よく相手が出来ていたな。下手に残業などしていてまた来られたらと思うと、つい早く帰って来てしまう」
一は驚きに茫然とする椿を見詰めながら、ゆっくりと彼女の前に

片膝をついて屈んだ。
「二年半以上、……ほぼ毎日じゃないか。朝に夕に、お前の元に足繁く通って来た男だ。……うるさく無かったか？　嫌じゃ無かったか？　いつものお前ならば、『女性の気持ちをお考えなさい』　と、怒ってしまうところではないのか？」

椿は茫然とした表情のまま、首を左右に振った。
「……いいえ……、怒るなんて、とんでもない……。私は、いつの間にか……、“彼”を待っていました……」
時間が遅いと“今日は来られないのだろうか？”と気になった。仕事で来られない時は、何故か物足りない気持ちでいっぱいになった。
「会いたかったのは……、私も同じだったのです……」

“彼”の姿を思い出し、椿の目に涙が浮かぶ。
目の前で優しく微笑む一の顔が滲んでいくが、彼女は涙を拭おうとはしなかった。

「『椿さんに会う事を許して下さい』　そう言って土下座をするのだぞ。あの“彼”が、たかだか一企業の専務に。毎日毎日。――私はいい加減、お手上げだ」
「お兄様……」
一は椿の両肩に手を置くと、涙を溜めた彼女の瞳を真っ直ぐに見詰めた。
「椿、お前は、会いたいか？」
「私は……」
「“彼”に、会いたいか？　“彼”と、手を取り合いたいか？」
「私は……」
全身から強い感情が込み上げてくる。激しい嗚咽感は、彼女から言葉を奪った。

聡明な瞳に溜まった雫が頬を伝い、止まる事無く流れ落ちる。
嗚咽感に耐え切れなくなり両手で口元を押さえるが、椿はその言葉を、シッカリと一に伝えた。

「私は……、総司様が好きです。……総司様に、会わせて下さい……」

椿の言葉を聞いて、一は指で彼女の涙を拭った。一度拭っても拭い切れない涙を、何度も何度も拭ってやりながら、彼は真剣な眼差しを椿に向ける。

「……“彼”と手を取り合うという事は、幸せな事ばかりじゃない。巨大組織には、それに見合うだけの苦労も問題もある。……お前だって、今までの様に“お嬢様”として座っているだけの立場では居られなくなるぞ」

「――解かっています。平気です。……“彼”が、居てくれれば……」

妹の口から聞く、愛しい人を慕う気持ち。
今まで何かが有れば、彼女が慕い頼りにしていたのは一であったはずなのに、その役割は心から想う者へと変わっている。
一は少し寂しい物を感じながらも、幸せそうに決意を口にする妹を抱き締めた。

「幸せになりなさい、椿……。お前には、その資格がある……」

「お兄様……」

「お前が幸せになる事は、大切な妹の幸せを願って来た私の……幸せでもある」

椿は一の背に腕を回し、彼のシャツを両手で鷲掴んで強く抱き付く。しかし一は、自分に掴まる椿の手を掴み、ニヤリと口角を上げた。

「抱き付く相手が違うぞ。椿」

椿の両手を掴んだまま、その手を引きながら二人一緒に立ち上がると、一は椿の背に手を当てポンッと押し出す。

「早く行きなさい。客人を待たせてはいけない」

「……はい！」

椿は返事をしながら踵を返し、部屋を飛び出した。

彼女が向かうのは温室。

――総司の元。

椿姫・70『華』

「見事な桜ですね」
先に言葉をかけられ、椿はドキリとして足を止めた。
辻川邸の裏庭にある温室よりは、はるかに規模は小さいが、それでもちょっとした植物園並みの大きさを持つ葉山家の温室。幼い頃は、よくここで兄や大介などと遊んだものだ。
そこに足を踏み入れ、椿は総司を探した。温室で待っているとは聞かされても、総司が何処で待っているかという話は聞いていなかったのだ。
しかし椿は、以前温室の話をした時、さくらが故郷から持って来た桜の話をした事を思い出し、もしかしたらという思いで、温室の中央に壮麗な姿を置く桜の元へやって来たのだ。

そして、思った通り“彼”は居た。
後ろ姿ではあったが、堂々とした立ち姿に、上品な物腰を湛えるスーツ姿。大きな薔薇の花束を抱えているのが解かる。
彼は桜の樹の下で、咲き乱れる花を見詰めていたのだ。
ゆっくりと背後へ近付き声をかけようとしたのだが、先に言葉をかけられてしまった。

「夏にでも花を咲かせているとは……。温室にあるせいでしょうか……。実に素晴らしい。お兄様の奥方は、燦(さん)たる品を嫁入り道具におもちになった様だ」
葉山家の中庭にも桜の樹がある。しかし、花の時期は終わっている為、もちろん花など付けてはいない。しかしこの桜だけは、温室という温かい環境にあるせいか、一度花が散りかかってから再び花

を付け、夏である今でも八分咲きなのだ。
「……辻川家の藤も、素晴らしいですわ。いつ見ても花を付けているなんて、本当に素敵……」
総司の言葉に答えながら、椿は彼の背後に近付く。彼は「そうですね」と言ってから、彼女が近付いて来ている事を知りつつも、振り向かないまま話を続けた。
「私の傍にも、いつも素晴らしく美しい姿を見せてくれている“華”があったのですよ。……二年半前に見付けて、私はその華に夢中になった……」

桜の花びらが、静かに静かに、舞い落ちた。
それはまるで、総司の話を邪魔してはいけないと気を遣いながらも、椿を和ませようとしているかのようだ。
「手に入れたくて、手に入れたくて、夢中になって追いかけた。でも、私は間違った愛情を注ぎ、その結果、その華を失ってしまったのです……」
総司の声は寂しそうだ。二週間前、椿と引き離された時の事を思い出しているのだろう。
「本当に諦めようかと……諦めねばいけないのかと、……でも、そんな事は無理でした。私は、傍にあって手が届きそうにまでなった華が忘れられない。何よりもあの華が愛しくて堪らないのです」

椿は胸が締め付けられる。
苦しくて堪らない。早く総司に振り向いて欲しい。そんな気持ちでいっぱいだ。
振り向いて欲しい。小さな望みをかけて、椿は自分から話しかけた。
「――その為に、兄の元へ通ったのですか？」
「はい。……必死にお願いをしました。……華を、手に入れる為に……」

彼はまだ振り向かない。椿は、一から話を聞いた時から気になっていた事を問いかける。
「あの……、土下座をした、というお話をお伺いしましたが……」
「はい」
「本当にしたのですか？」
「しました」
「土下座の仕方を、ご存じですの？」
椿の疑問に、総司の方が揺れる。どうやら彼は、笑いを堪えているようだ。
だが、素朴な疑問ではるが、これは大きな疑問ではないか。
人に頭を下げるなどという行為とは結び付かない様な彼が、本当に土下座が出来たのだろうか。
「土下座は、他人がやっているのを見て覚えています。……見様見真似でしたので、お兄様には叱責されましたが」
「え？」
兄が怒ったという話は、本人の口からは聞いていない。
総司の立場的に「上に立つ者がそんな無様な真似をするな」とでも叱責したのだろうか。
すると総司は、彼女の思惑とは全く違う事を口にしたのだ。
「頭の下げ方が悪い、と……。頭はもう少し深く下げる物だ、と……」
椿は思わず小さく噴き出してしまった。挨拶などにうるさい兄の事、頭の下げ方が悪いと叱責する姿が目に浮かぶ。

「それでも私は、その華を手に入れたかった。人に頭を下げようと、どんなに見て見ぬ振りをされようと、一言『良い』という言葉を貰うまでは、と……。そして、やっと、承諾を頂けたのです。“華”を迎えに行っても良いと……」
「それは、どんな華ですか……？」
ゆっくりとした椿の問いかけに、ずっと背中を向けていた総司が、

やっと振り返った。
陶磁器の様な冷たい表情。整い過ぎていて冷淡にも見えるその顔を、彼は椿を視界に入れた瞬間、破顔させたのだ。

「貴女です。とても美しい、“椿の華”です」

総司が抱えていた大きな薔薇の花束が足元に落ち、薔薇の花びらが舞い上がる。
今まで抱えていた薔薇を捨てた彼の腕は、目の前にあった椿の華を、力いっぱい抱き締めた。

椿姫・71　『三度目の求婚』

「私と……結婚して下さい。椿さん」
総司に抱き締められた瞬間椿を襲ったのは、男性らしさが漂う胸の硬さと、品の良い彼の香り。
そして、彼女を抱き締める腕の強さ、と……。
三度目の、求婚の言葉。

椿の胸がドキリと高鳴る。
抱き締められただけで、眩暈を起こしそうな悦びに襲われているというのに、それにこんな言葉を付け加えられては、彼女はもうどうしたら良いのか解からない。
「二度目の返事もまだ貰ってはいませんでしたが、改めて、プロポーズさせて下さい」
総司は一度腕の力を緩め、それでも彼女を離さぬよう腰で両手を組んだまま椿を見詰めた。

「私と結婚をして下さい。――“辻川椿”に、なって欲しいのです」
「……総司様」
二人きりの時にしか見た事が無い様な優しい瞳に見詰められて、蕩(とろ)けてしまいそうな甘い感覚が訪れる。
頬に熱みを感じ、彼女が恥ずかしい位に頬を染めている事を悟るが、それを止める事も、その原因である総司から目を逸らす事も、彼女には出来ない。

返事など、もう迷う必要など無いではないか。
心から想う総司に求婚されているのだ。

自分のプライドを捨て、土下座をしてまで彼女を迎えに来てくれた総司が、何度袖にされようと、彼女を妻にしたいと申し出てくれているのだ。

椿は返事をしようと口を開きかける。微笑みの中で良い返事を聞ける予感に、総司も笑顔の色を濃くした。

――しかし……。

「……ですが、総司様……」

何かを考え直した椿は、フッと目を細め、哀しげな表情を作ったのだ。

「私は……、“辻川”の跡取りを、産めないかもしれません……」

それは、結婚を戸惑う最大の原因だ。

“愛”だけで行動してはいけないのがこの社会。辻川や葉山などの立場がおかれた所には、必ず“家”という問題がある。

その“家”が大きければ大きいほど、名家であればあるほど、その柵（しがらみ）は大きく関わって来るのだ。

落雷事故の後遺症を案ずるなら。

椿は自分の気持ちだけで、気安く返事を出来る立場では無い。

もし子供が出来なければ、傷付くのは自分だけでは無いのだ。実家である葉山の名前にまで、傷を付ける事になる。

それを考えると、辛くなるのは当たり前だ。

椿は唇を結んで総司から視線を逸らすが、彼は椿が驚くような言葉をかけた。

「――出来なかったら、……出来ないで良いではありませんか」

椿は驚いて総司を見る。辻川の未来を担わなければならない彼が、言ってはいけない、いや、考えてはいけない言葉ではないか。

澄んだ瞳を大きく見開く椿に、総司は微笑んだまま言葉を続ける。
「私は……、子供が欲しくて、貴女と結婚をしたいのではありません」
結婚後を案じる椿に、それはとても優しい言葉だろう。
しかし総司は、そんな理想を口にして良い人間では無いではない。
「貴女に傍に居て欲しくて、貴女の傍に居たくて、……一生貴女と、手を取り合っていきたくて。だから貴女と、結婚をしたいのです」
「でも……、総司様……」

総司は不安だけを湛える椿の瞳を見詰め、安心して下さいと言わんばかりにニコリと笑う。
「出来たら出来たで、それは素晴らしい事です。その子がもし通常と違う何かを持って生を受けたとしても、私はそれを受け入れます。――もしも、子供が出来なかったら……」
もし出来なかったら。――聞きたいのはここからだ。ゴクリと空気を呑み込む椿に、総司はちょっとおどけた表情をして見せた。
「一お兄様の所から、養子に一人頂きましょう」
「……ぇ？　ええっ？」
一瞬何の事かと考えるが、その意味を悟り、椿は驚きの声を上げてしまった。
自分達に子供が出来なければ、一とさくらの所から、養子として一人引き取らせて貰おうというのだ。
「“あの”一お兄様とさくらさんの子供ですよ？　どんな神童が産まれるのかと、考えただけでもワクワクします。私達に子供が授からなかった時は、是非とも一人、辻川の養子として頂きたい」
それは椿だって、考えると楽しみではある。しかしそんな事を、一とさくらは許すだろうか。
そんな事を考えて目をぱちくりさせていると、総司は「あっ」と声を上げて表情を固めた。
「……だとすると、また土下座をして頼み込まなければなりません

ね。今度は二週間では済まないかもしれない」
「じょっ、冗談が過ぎますっ。総司様っっ」
あまりにも突飛な考えに椿がムキになると、総司はクスッと笑いながら、彼女の唇に触れるだけの唇付けをした。
「私は、私の全てで貴女を愛します。きっと私達の間には、素晴らしい子が出来ますよ」
不安を感じる必要など無いと、力強い総司の言葉ではあるが、深読みして考えてみると少々恥ずかしい言い回しだ。
椿が再び頬を染めると、総司はそれをからかった。
「椿さんは本当に可愛らしい。照れているのですか？」
“恥じらっている”ならともかく、“照れている”と言われると何故かムキになってしまう。
からかわれた話題に対して言い返せない椿は、違う件で反抗をした。
「やっ、約束違反ですっ。総司様っ」
「え？」
「わっ、私は、『触れて良い』とは言っていません……。総司様も、ちゃんと訊ねてくれなくては困ります」
総司を責める彼女は、以前交わした約束の事を言っているのだろう。
――唇に触れる時は、椿が「良い」と言わなければ触れない、という約束だ。
総司もその約束を思い出したが、ムキになる椿に、引くどころか逆に顔を近付けた。
「……まだ、許可を頂かなければならないのですか？」
「でも……、そう約束をしました」
「その約束は、もう終了です」
顔を近付け、唇を寄せて、その吐息がかかる位置で、彼は囁く。

「貴女はもう、私の妻になるのですから」

まだプロポーズの返事はしていない。

一人で勝手に決めてしまう総司の言葉に、反抗をしようとする椿だが……。

「私と、結婚をして下さい。椿さん」

彼の囁きが、彼の香りが、椿の中に沁み込んで来る。

ほわりとした幸せに包まれて、椿は答えを唇から零した。

「――はい……。総司様……」

許可を取る事無く唇同士が重なり、総司の腕は、再び椿を優しく、力強く抱き締める。

唇を重ね、想いを確かめ合う二人を祝福するように、桜の花びらが、舞い踊った……。

椿姫・７１　『三度目の求婚』（後書き）

＊明日完結です。宜しくお願いします！

椿姫・最終話７２　『純恋』

「ご婚約おめでとうございます！」
絶え間なく掛けられる祝福の声。鳴り響くシャンパンを開けるコルクの音と、祝砲。
総司と椿の婚約披露パーティは、まるで結婚式本番かと思わせるような華やかさの中、辻川財閥主催の元、高級ホテルのワンフロアを使用して行われた。

総司としては、今すぐにでも結婚をしたいところだった。
それはそうだろう。彼は二年半も彼女を追いかけ続け、三度目の求婚で、やっとその想いを達成させたのだから。
しかし椿はまだ学生だ。総司の様に留学をして大学卒業資格を持っている訳でも無い。せめて短大は卒業をしたいという椿の希望で、二人の結婚は椿が短大を卒業する来年、六月という事になったのだ。
それは折しも、総司が椿に初めての求婚をしてから三年目に当たる。
最初の求婚から、三年目にして彼はやっと椿と結婚が出来るのだ。

だが、結婚こそまだ先だが、婚約だけならばすぐに出来る。
総司が三度目のプロポーズをし、椿が了解をした日から一週間後、二人は結納を交わし婚約をしたのだ。
それが今日だ。
辻川財閥と老舗大企業の葉山製薬。
この結びつきに、疑問を投げる者も、眉を寄せる者も、一切存在しない。
企業同士、家同士として、これは類を見ない良縁だったからだ。
そして何より、辻川財閥の総帥が選んだ女性が“葉山の椿姫”で

あった事に、誰もが納得をしたのだ。

「疲れたかい？　大丈夫？」

椿の手を取ったまま、総司は彼女を大きなソファへ腰掛けさせた。

疲れているはずなのに背筋を伸ばし控え目に座る彼女を見て、彼は彼女の両肩をポンッと後ろへ押す。

「きゃっ！」

抵抗する事も出来ず、ソファの柔らかさのままに椿は背もたれに深く沈みこむ。体勢を立て直そうとすると、素早く隣に腰を下ろした総司に肩を押さえられた。

「駄目だよ。ゆったりと座って、身体を休めなさい」

「でもっ……、こんなだらしのない……」

「大丈夫。ここには私達しか居ないから」

そう言われ、椿は改めて部屋の中を見回す。豪華な装飾品で飾られた部屋。婚約パーティが行われた、辻川財閥が保有するホテルのスイートルームだ。

椿とてパーティの経験が無い訳ではないのだが、辻川が主催するパーティは、今まで出たどんな物よりも大きく、規模が違う。

パーティは何とか無事に終えたものの、挨拶や人の出入りで疲れ気味の椿を休ませる為に、総司はすぐに部屋を用意させたのだ。

「でも。正直、目が回りそうでしたわ。でもこれからはああいう場が多くなるのですね。……私、大丈夫かしら……」

目が回りそうだったというのに、あれでも規模は抑えているという。

これから先に少しだけ不安を感じつつ、椿は息を吐き、肩からかけたレースのストールを両手でキュッと押さえた。

今日の彼女は、主役の一人として肩が大きく開いたキャミソール型のイブニングドレスを身に纏っている。こんな露出の多い姿で人

前に出た事の無い椿は、あまりにも恥ずかしくて、肩からかけられたレースのストールを外せないままなのだ。

「大丈夫だよ……」

総司は優しく声をかけ、椿がストールを握る両手を、上から握った。

「椿さんは、きっと旨くやって行ける。今日だって、とても旨く客人を捌(さば)いていたじゃないか」

「それは……、総司様が私をフォローしてくれていたからですわ。総司様が助けて下さらなかったら、私……」

ちょっと弱気になる椿の頬に指を当てると、総司はそのまま指で顎を傾かせ、彼女に唇付けた。

「大丈夫だよ。私がいつでも、傍に居るからね」

「総司様……」

優しい言葉に気持ちが安らぎ、椿は総司の唇付けを受け、目を閉じた。

彼女を気遣うように、優しく触れる唇。悪戯をするように動く舌先。それらをくすぐったく感じながらも、それはおかしな陶酔感を椿に与える。

ほわりとした気分で総司の唇付けを受けていた椿は、いつの間にか両手で握り締めていたストールを放し、彼の腕に手を添えていた。いつの間にか、そのストールを身体から外されている事にも気付けぬまま……。

背中に優しく柔らかい感触。

ソファの背凭れに凭れかかっているだけでは得られない安心感に、椿はフッと、いつの間にか背凭れでは無く、ソファ自体に身体を横たわらせている事に気付く。

そして、唇にあった筈の総司の唇が、彼女の耳元で蠢いている事に……。

「つっ……つかささまっ……」

ソファに横たわり、彼女の身体の上には総司が居るという、誰かに見られたら恥ずかしくて堪らない光景。

そして、彼の手はドレスの上から彼女の腰をまさぐり、唇は露わになった肩へ……。

「まっ、待って下さいっ！」

椿は慌てて総司の両腕を掴み、頬を染め困惑した表情で、胸元に到達しようとしていた総司の顔を見下ろす。

「お願いっ、待って！　待ってっ……、駄目っ！」

必死になって停止を求める様子に、総司は顔を上げる。少しくらいは抵抗をされると思っていたので、その時はその時で押し切ってしまおうかとも思っていたのだが、椿の声があまりにも真剣なので利いてあげずにはいられない。

「……駄目？」

椿の顔を見ながら問いかけると、彼女は大きく首を縦に振った。

「せっ……、せめて、結婚するまでお待ちくださいっ！　まだ夫婦では無いのに……、こんな事っ、いけません！」

この意見に、どれだけの賛同者が居るのかは解からないが、椿は本気だ。

久し振りに椿のお小言を聞いた様な気がして総司は可笑しくなるが、笑いよりも文句が先に出て来てしまった。

「せっかく婚約したのに……、かい？」

「こっ、婚約しただけでは、夫婦ではありませんからっ！」

「……来年の六月……結婚式まで、待たされるの？」

「はい！」

何という事だろう。

待たされて待たされて、やっと婚約までこぎつけたというのに、
椿は結婚するまで唇付け以上の行為を許してはくれないらしい。
少々不機嫌な表情を作る総司に、椿は哀しげに眉を寄せた。

「総司様は……、私を大切にしては下さりませんの？」

聡明で儚げな瞳を細めると、少々潤んでいる様にも見えてしまう。
こんな目をされてはお手上げだ。
総司は椿から離れると、彼女の腕を引いて上半身を起こさせ、ソファに座り直す。不安な表情をする彼女にニコリと笑いかけ、優しい目で彼女を見詰めた。

「大切にするよ。一生」

総司の言葉を受けて、椿が微笑む。
艶やかに。優美に。

椿は総司に顔を近付け、自分から彼の唇に唇を触れさせた。

「大好きです。総司様」

愛しい人からの愛を受けて、絢爛たる姿を幸せの元に咲き誇らせるは椿の華。

純恋を謳う、椿姫。――――

『椿姫純恋歌』

――END――

椿姫・最終話７２　『純恋』（後書き）

＊後書き・お礼、に続きます。どうぞご一読下さい。＾＾

●『椿姫純恋華』　後書き・お礼●

こんにちは。玉紀　直です。

『椿姫純恋華』　は２０１０／０５／１４より、自サイトにて連載を開始し、約一年後から投稿サイトでも掲載を開始。

途中同時更新となり、２０１１／０７／２８　完結となりました。

投稿サイトでの掲載は、毎日更新を最初から続けられたのですが、それ以前、自サイトのみで更新をしていた時は、二週間に一度だったり、一カ月放置だったり。……いやいや、申し訳ない更新の仕方をしていたものです……。

それでも、読み続けて下さった皆様。

本当に有難うございました。

沢山の方に読んで頂けて、本当に嬉しかったです。

Ｒ１５表示はあるものの、他のＲ１５作品より“Ｒ度”は格段に低く、「これ、Ｒ表示必要なの？」　と疑問に思われた方もいらっしゃった事と思います。（＾＾ゞ

多くの方々にご期待頂きました、椿さんの初体験は、新婚初夜になりそうです。（笑）

ええ。総司さん、婚約しても許してもらえませんでしたので。

なんというか、こんなんで椿さん、初夜に泣いちゃわなきゃいいんですけど……。（↑いや、要らん心配）

全７２話を通して、最後まで純潔を守ったヒロインは、私の作品では初めてです。（－＿－；）……すいません……。

ですがやっぱり、幸せになった姿は見たいですから。

そのうち是非とも番外編などを書かせて頂きたいと思っています。
お目見えしました時は、是非ともこの二人に会いに来てあげて下さいね。
ですが、ひとまず『完結』　を打たせて頂きます。＾＾

『椿姫純恋華』　お楽しみ頂けましたでしょうか？
少しでも読んでくれた方々の心に残る作品であれたら嬉しいです。
また違う作品で、是非あなたとお会い出来ますように……。

感謝を込めて。

玉紀　直

２０１１／０７／２８

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・1

「愛しているよ、椿」
その言葉を総司から受けた時、椿はとても恥ずかしかった。
何といってもここは人前だ。二人きりの時に言われても恥ずかしいのに、人前でこんな言葉を囁かれてしまうなど、何たることか。
更にその後、彼は唇付けを彼女に施してきたのだ。もちろん“人前”で。
確固なまでに厳粛な貞操教育を受け、その純度は完璧であるはずの彼女。
“葉山の椿姫”と謳われ、その凛とした中にも微かに漂う儚げな美しさに、いったい今までどれだけの男性が恋焦がれた事か。

そんな彼女が、人前で愛の言葉を囁かれ、唇付けまで受けている。
これは、信じられない事だ。
椿とて、通常の状態で考えれば、死んでしまいたいほど恥ずかしい。
しかし何故か、今日の彼女は“恥ずかしい”と感じても、“幸せ”な気持ちのほうが大きくて、そんな羞恥など幸せに隠されてしまっていた。

そして総司の唇が離れた時、椿は彼を見詰め、頑なまでに女性としての恥じらいを身につけているはずの彼女とは思えない言葉を、人前で口にしたのだ。
「私も、愛しています。総司さん」

彼の身を焼き焦がしても足りないほどに恋焦がれた、椿がくれる

言葉。
　これに総司が喜びを感じないはずもなく、彼はその喜びのまま彼女を抱き締めて唇付けた。

　周囲には、総司側の関者はもちろん、椿の父や母、兄や義姉、幼馴染夫妻まで居たのだ。
　しかし、二人の様子に眉をひそめる者も、呆れる者もいない。周囲が二人を見詰める瞳は常に温かく、限りない祝福に満ちている。

「御結婚、おめでとうございます！」
　そう声をかけ、二人を祝福のライスシャワーの中へ送り出したのは、辻川家の執事補佐であり、幼い頃から総司の相談役であり、婚約するまでの二人を見守り続けた人間の一人、水野だった。

「おめでとうございます！　総帥！」
「おめでとうございます、総司様！」
「椿様！　おめでとうございます！」

　口々に叫ばれる祝福を、全身に受ける二人。
　辻川財閥総帥、辻川総司。
　そして、葉山製薬の長女、葉山椿。
　少々暑さも感じるようになった六月吉日。二人の結婚式が執り行われた。
　同時に入籍も行われ、椿は“辻川椿”となったのだ。

　二人が出会って四年。
　最初のプロポーズをしてから三年。
　そして、やっとの事で婚約をして一年。
　二人は、特に総司は、この日をどれだけ待ち望んだ事だろう。
　やっと二人は、名実共に夫婦となれたのだ。

そして今日は、清らかな純泉の中で咲き続けた椿の華を、彼が摘み取っても許される日なのだ。――――

＊＊＊

「椿さん、きれいだったなぁ……」

彼女が溜息をつくのは何度目だろう。

式の興奮が冷めやらぬ様子で白い頬をピンク色に染め、大きな目をキラキラさせて、昼に行われた結婚式の様子を口にする。

式の後は披露宴もあったのだ。生まれて初めて出席した結婚式というものに、本来ならば緊張して疲れてしまっていてもおかしくは無い。

しかし彼女は、疲れるどころか興奮して眠れないようだ。

一（はじめ）の部屋でベッドに腰掛け、脚をパタパタと動かしてハシャグさくらの姿は、流石にまだ十五歳の少女らしく可愛らしい。

「ねぇ？　一さんもそう思うでしょう？」

そんな彼女が声をかけたのは、書棚の前で本を戻していた一だ。

一はさくらへ振り向き、当然のように一言口にする。

「何を言っているのだ。一年後のさくらのほうが、何百倍も綺麗だぞ」

その瞬間、パタパタと動いていた脚が止まり、今まで以上にさくらの頬が染まる。

一年後、ではなく、正確には九ヶ月後、椿の兄である葉山一と、婚約者のさくらは、彼女が十六歳になるその日に入籍し夫婦となる事が決まっているのだ。

その時に結婚式を一緒にやるか、別の日にするか、そろそろちゃ

んと考えておかなくてはならないと考えているところなのだ。

九ヶ月後の姿を想像して、さくらは花恥ずかしそうにはにかんだ。

「椿さんみたいに……、ドレスを着ても、皆に『きれい』って言ってもらえるかな……」

幼い頃から着物主流で生活をしてきたさくらは、今日見たウエディングドレスの華やかさに、すっかり心を奪われてしまったようだ。

一はさくらの傍に歩み寄ると、彼女の横へ腰をおろし、その小さな肩を抱いた。

「当然だろう？　私のさくらは、世界一幸せな花嫁になるのだから」

さくらが両手で一のシャツを掴み、嬉しそうにその胸へ顔を擦りつける。

「一さんっ、嬉しいっ」

あまりにも可愛らしい仕草に心が高まり、このまま一晩中“二人の時間”を謳歌しようかと一が目論んだ瞬間、さくらは彼から離れスッと立ち上がった。

「じゃぁ私、部屋へ帰って寝ます。一さんも疲れが残らないように、今日はしっかり休んでねっ」

（それは無いだろう……。さくら……）

心の中で少々不満を呟く一に、さくらはまたもや彼の失笑を買う発言をした。

「椿さんと総司さんも、もうお休みになられているかしら。今日はきっとお疲れですものね」

（――そんな訳は、絶対に無い！！）

口に出したら笑いがこみ上げてきそうだ。

そう思った一は、心の中でだけ叫んだ。

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・１（後書き）

こんにちは。　玉紀　直です。
番外編≪摘華の夜に祝福を≫　読んでいただき、ありがとうございます。＾＾
そんなに長いお話にはなりませんが、ゆっくりまったり更新していきたいと思っていますので、お付き合い頂けると嬉しいです。
総司さんと椿さんの結婚式から始まりました。
本編のあとがきでもチラッと書いていましたが、これは、その「初夜」　のお話になります。
三年耐え忍んだ総司さん。婚約しても尚、一年焦らされていましたから。その辺りの彼の気持なども交えて、甘いお話に仕上げていきたいと思います。
とはいえ……。相手は“あの”椿さんですからね……。
簡単には進めないと思いますが……。（笑）

どうぞしばし、結婚してもまだ尚焦れる二人を見守ってあげてください……。

＊次回更新　１０月１１日　予定

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・2

「椿、綺麗だった……」

さっきから、何度この言葉を呟いたのだろう。

しかし、しょうがないのだ。心のままに言葉を出してしまうと、この台詞しか出てこない。

更にそう呟いた後、自分らしくないくらいに緩んだ表情を自覚し、軽く己の頬を叩いて引き締め直す。――総司はずっと、それを繰り返していた。

挙式と披露宴の賑やかさから解放され、披露宴を行ったホテルのスイートルームに入ったのは、二十一時も過ぎた頃だった。

朝からずっと慌ただしかった一日。二人とも部屋に入ったらすぐにでもベッドへ倒れ込み、眠ってしまいたいくらい疲れていただろう。

だが、いくら疲れていても、そのまま眠ってしまうとは考えられない。それは、エレベーターの前で親族やお付き達の見送りを受けた後の総司を見ても明らかだ。

エレベーターの中で二人きりになった瞬間、彼は椿を“お姫様だっこ”で抱き上げ、そのまま苦せず部屋まで歩いて行ってしまったのだ。それを考えても、総司の意気込みは目を瞠るものがある。

「つっ……つかささんっ、歩けますからっ……」

抱き上げられ、慌てる椿が愛おしい。

彼女を抱き上げるのは初めてではない。その身体を抱き締め、服の上からではあるが彼女の体温を感じた事だってあるのだ。

それなのに、彼女は抱き上げられた事に酷く羞恥し、花恥ずかしげに頬を染め、身を縮める。

総司としては、それがまた堪らなく愛しさを誘ってしょうがない。

「花婿は花嫁を抱きかかえて初夜を迎える部屋へ入るものだよ。そういう決まりだろう？」

即席の決まりを自ら作り上げ、「そんな決まりは存じ上げません」という椿の反論を却下し、総司は部屋へ入っても、なかなか彼女を腕の中から離さなかった。

しかし、彼とてまさか、この“新婚初夜”という華々しく輝かしい待ちに待った夜を、一晩中ソファで椿を抱きかかえて過ごすつもりなど、もちろん無いのだ……。

「結婚するまでは求めない」　そんな酷な約束を椿にさせられたのは一年前。婚約パーティの日だった。

結婚するまでは、決してキス以上のものを求めない。そんな意味の約束だ。

言っている椿は良いかもしれないが、総司にしてみれば酷な話である事の他何物でもないだろう。さんざん焦らされ待たされて、やっと婚約出来たかと思えば、「結婚するまでは……」　と、更に一年のお預け。

正直、ムードに乗せて、そのまま押し切ってしまおうかとした事も数回有ったのだが、そのたびに、椿は切れ長の美しい瞳を、悲しく儚げに潤めて言うのだ。

「総司さんは、私を大切に思ってはくれていませんの？」　と……。

「はい、すいません」　とばかりに、勢い付いていた昂りも萎えてしまう。

そんな事を繰り返し続けてきた一年間。

そして今日、念願の結婚式を迎え、正式な入籍も済み、椿は、総司の妻になった。

――もう、遠慮は要らないのだ。

これからは、どれだけ椿をこの腕に抱き締めようと、どれだけ唇付けをしようと、咎められる事など無い。椿にだって、彼を制する権利は無いのだ。

総司は椿の夫。

女性としての慎み深い教育を受けてきた彼女の事。主人に求められて拒否をする事など、出来ようはずがない。

そんな椿にも、どこか覚悟のようなものがあったのだろう。

ソファで総司に抱き締められている時、バスルームを先に使ってくれと話を切り出したのは彼女のほうだった。

総司の本心としては、一緒に……。というところだが、椿の立場を考えるとそれはあまりにも可哀想だ。下手をすると、恥ずかしさのあまり泣いてしまうかもしれない。

別々にバスルームを使うにしても、本当は椿を先に入れてあげたかった。

二人ともバスルームから出た後は、正直なところベッドへ直行だろう。“新婚初夜”なのだから当然だ。

そして何といっても、椿は男性にその身を預けるのは初めて。今はまだ、清らかな処女のままなのだ。それなりに緊張もしているだろうし、戸惑いもある事だろう。

そこで総司は、先に彼女を入浴させ、次に彼が入って出てくるまでの時間を、彼女が心を落ち着かせる時間として使ってほしかった。椿が後では、おかしな話、彼女が出てすぐにベッドへ直行という事になってしまい、更なる動揺を誘ってしまうのではないだろうか。

「一緒にいる主人より先に入浴だなんて、あってはいけません。総司さん、先にお入りになって」

しかし総司の気遣いをよそに、椿はいつもの彼女らしさを見せ、

“夫”に先を譲った。

「まだ、五分か……」

何度時計を見てしまっただろう。そのたびに、なかなか進まない時間の流れを思い知るというのに。

結局総司が先に入浴を済ませ、入れ替わりに椿がバスルームへ入って行ってまだ五分。しかし総司としては、もう三十分以上も時間が経ってしまっているのではないかという感覚に襲われている。

（もしかして私も緊張をしているのだろうか）

自分らしくない緊張感を悟り、彼は溜息をつく。少し落ち着こうと思い、立っていた窓辺からソファへと移動した。

彼女をリードして落ち着かせなくてはならない彼が、まさかこんなにも緊張してしまうとは思わなかった。ソファに座った彼の目の前には、渇いた喉を潤す為のワインなども用意されているというのに、今はそれに手を伸ばす気にもなれない。

何気なく腕を組むと、素肌に唯一纏ったバスローブがとても柔らかく心地の良い肌触りをくれている事に気付いた。

しかしもうすぐ、このバスローブよりも柔らかく心地の良いものを、彼はその腕の中へ収める事が出来る……。

はずだが……。――――

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・２（後書き）

＊次回更新・１０月１４日　予定。

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・3

「ああ、もぅ、私ったら、何をやっているのかしら……」
踏ん切りがつかない自分を責め、椿は大きく息を吐いた。
大きく高鳴り続ける鼓動が胸を叩く。息苦しさがなかなか治まらない。何度も深呼吸を繰り返すが、いっこうに役には立たなかった。
総司と入れ替わりにバスルームへ入ってから五分が経過している。
椿はまだ服も脱がず、脱衣室にいた。
胸に抱いているのは純白のネグリジェ。初夜に旦那様をお迎えする際に着るようにと、葉山の母が用意してくれたものだ。
パウダールームのようにエレガントな室内には、その壁側に、同じく白い肌触りの良さそうなバスローブが用意されている。
本来は素肌の上にそれを羽織って出ていくべきなのだろう。ネグリジェの上に羽織っても良いものなのだろうかと考えるが、先に入浴を済ませた総司が、恐らく素肌の上にそれ一枚を羽織っていたのであろう姿を思い出し、一瞬にして頬を熱くした。

（やっぱり、素肌の上、なのね……。下着はつけて良いのかしら……）

初夜についての予備知識は、この一年で溢れるほど頭に入れた。
だが、流石にそこまで書いているものは無かったような気がする。
バスルームを出たら、恐らくそのまま夫婦の時間に入ってしまうのだろうから、わざわざ下着など着用しなくても良いだろうか。しかしそのまま、というのも、何となく慎みがないような気もするのだ。
「今更……、こんな事で悩むなんて……」

傍から見れば「そんな事」　と思うかもしれない。
しかし、金剛石のように硬い貞操観念の中で育った彼女にとっては大問題だ。
そしてまた、このバスルームを出れば夫婦としての時間が待っているという事実も、彼女をこの場から動かせなくしている理由だ。
心の準備は出来ているはずではないか。
総司と結婚をした事によって、彼女は彼の妻となったのだから。
求められればそれに応えなくてはならないし、また、辻川家繁栄の為にも、求めてもらえるように努めなくてはならないのだ。
思えば婚約パーティの日、結婚するまでは求めないと約束をしてくれた総司に、限りない優しさと愛しさを感じたものだ。
それでも数回、その時のムードに乗せてキスより先に進みそうになった事はある。しかしそのたびに、椿が制止すれば彼は無理を強いる事は絶対にしなかったのだ。
「総司さん……、優しい……」
残念そうに苦笑しつつも「申し訳ない。椿を見ていたら、つい……」　と、優しく抱き締めてくれる彼を思い出し、椿の頬は染まる。
「総司さんは、私を大切に思ってくれてはいませんの？」　と効果絶大の言葉を武器に逃げていたが、逃げつつも椿は常に彼の優しさを感じていた。
何といっても、椿が切望した「結婚するまでは……」　という約束を守ってくれたのだ。
婚約をしたのだし、結婚をすることも間違いは無い。拒む必要など無いと押し切られれば、椿が拒否をする事など出来なかっただろう。
――しかし総司は、そんな事はしなかった。
ナイフのように鋭い瞳を、いつも優しく、彼女の為に頬笑みで溶かしてくれた。

――そんな裏で、彼がやり切れない気持ちでいた事を、椿は知らないのだが……。

総司の為に、椿は決心を固めていたのだ。

初夜の日は、みっともなくうろたえたりなどしないよう、キチンと心を決めておこうと。

愛する自分の夫に操を捧げ、名実共に彼のものになれるのに、何を怖がる必要などあるものか。

そう、そんな必要など、全く無いのだ。

（ここまで来て、かえってみっともないわ……）

椿は決意を新たにする。

総司はきっと、椿がいつ出てくるのだろうとソワソワして待っていてくれているに違いない。

これ以上彼を待たせるのは酷というものだ。

思えば婚約前から、総司はずっと待っていてくれたのだから。

椿だって、全て総司のものになるという事が嫌な訳ではないのだ。

結婚までは、と自らが口にしながらも、時折仕掛けられる総司の甘い抱擁に身体を熱くした事もある。

はしたないと思いつつも、もっと彼の手で触れて欲しいと我儘な事を思った事もある。

総司を求めていたのは、椿だって同じなのだ。

椿は意を決して胸に抱えていたネグリジェを手から離すと、着ているワンピースを脱ぎ始めた。

初夜を迎える決心がついたのか……。

いや、彼女は違う事に決心がついたのだ。

彼女は考えた。

今日は朝からとても慌ただしかった。自分もそうだが、総司はもっと疲れているに違いない。

大切な夫が疲れている時に、更に疲れてしまう事をさせるのは酷というものではないか。

たとえそれが、“初夜”という日に行うべき行為だとしても、だ。

総司はこの為に一週間近く仕事を空けている。

時間はあるのだ。今夜はゆっくり休んで、夫婦としての時間は明日でも良いではないか。

（入浴がすんだら、そう総司さんに言おう）

――――総司の気苦労は、続きそうだ……。

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・3（後書き）

＊次回更新・10月18日　予定。

「椿」

バスルームを出た瞬間にかられた声に、椿はドキリと鼓動を高鳴らせた。

そんなに長湯をした覚えは無いが、長い髪を乾かすのに少々時間がかかってしまったのかもしれない。大分待たせてしまったのだろうか。それでも、あまり待たせてはいけないと、半乾き程度でやめて来たのだが。

だが、五分でも長い時間に感じていた総司にしてみれば、とてつもなく長時間に思えた事だろう。

もしかしたらあまりの遅さに、椿がバスルームから逃げ出してしまったのでは？　と疑っていたかもしれない。

総司は速足で椿へと歩み寄り、全身を余すところなく覆う純白のネグリジェに身を包んだ彼女を抱き締めた。

「待っていたよ。あまりにも遅いので椿が逃げ出してしまったのではないかと心配だった」

「そんな……、逃げるなんて……。お待たせしてしまって、ごめんなさい」

本当に疑っていたようだが、ここまで辿り着くのに散々焦らされまくった彼の事だ。そんな気持ちになってしまうのも無理は無い。

「――これは、葉山の母上が持たせてくれたのかい？」

身体を離し、それでも椿の両肩に手を添えたまま、総司は眩いほどに純白を強調したネグリジェを身に纏った彼女の姿を眺めた。

くるぶしを隠すほどの長丈。柔らかなパフスリーブの長袖は、手の甲までも覆い隠す。控えめなレースを施したAラインのネグリジ

ェは、初夜を迎える新妻が着るには少々露出が少なすぎやしないかと、夫の目から見て不満を口にしてしまいそうなほどストイックだ。
脱着は前ボタン。浅目のVネックだが、それでも椿にしては首元が開いている方だろうか。

「ええ。母が、今夜着るようにと用意して下さいました」
「とても素敵だよ。いつかプレゼントした白百合のようだ」
総司は再び椿を抱き締め、唇を重ねる。
湯上りなので当然かもしれないが、抱き締めた身体はとても温かく、ごく薄い布地を一枚だけ通して感じる彼女の身体の柔らかさに、湯冷めしていた総司の身体は体温を上げていった。
「ぁの……、つかさ、さん……」
「ああ、すまない。湯上りなのだから、のどを潤すものが欲しいね？　私としては、このままベッドへ連れて行きたいよ」
「そうではなくて……」
椿は総司の腕の中で戸惑う。もちろん、バスルームで心に決めた事を彼に伝えようとしているのだ。
今日は疲れているだろうし、“初夜”の行為は明日にしましょう、と……。

「何？　どうしたの？」
まさかそんな事を、この待ちわびた夜に、待ち焦がれた新妻から聞かされるとは想定もしていない彼は、椿の肩を抱き身体を密着させたまま、飲み物が用意されているテーブルへと歩いていく。
「アイスティー？　それともジュースがいいかい？　本当は二人でシャンパンを開けたいところなのだけれど。それでも良いかい？」
「え……、ええ」
正直なところ、緊張で疲れた後の身体にアルコールは避けたい。しかし総司に自分の考えを伝えようと必死になっている椿は、その事ばかりを考えてしまい、返事が疎かになってしまっているのだ。

なかなか切り出せずに総司を見詰めていた椿だが、彼が飲み物を用意されたテーブルへ近付き、純正の美しい錫(すず)で作られたシャンパンクーラーから飲みごろに冷やされたシャンパンを取り出したのを見て、その動きに見入った。

ソムリエナイフを巧みに操り、コルクの上を滑らすよう慣れた手つきで開栓する。

ポンッと弾ける音と共に湧き上がった気泡が少々彼の手を濡らしたようだが、総司はそれをスノーホワイトの美しいシェル柄が施されたナフキンで丁寧に拭い、傍に置かれた二個のシャンパングラスへと注いだ。

その一連の仕草に、感嘆の溜息が漏れる。

ソムリエナイフでコルクを抜く仕草が好きになったのは、兄の一がやっているのを見るようになってからだ。

上手くやらなくてはスマートに開栓出来ない。かえって無様にも見えてしまうこの作業を、一は鮮やかにやってのける。流れるような綺麗な手つきは、男性の美しさというものを感じずにはいられなかった。

それと同じ仕草を総司がして見せた時は、本当に息が止まる思いだったものだ。

何といっても椿は、兄を超える男性などこの世には居ないとまで思っていたところがある。本人はあまり自覚をしていないが、男性を見る時は必ず兄と比較をする。そんな彼女は間違いなくブラコンだ。

そんな彼女が、初めて兄より素敵だと感じたのが総司だったのではないだろうか。

シャンパングラスを両手に携えた総司が椿へ近付き、その一つを彼女へ渡す。

グラス同士が心地良い秀麗なる音を響かせると、総司はグラスを目の前に掲げた。

「椿の、花よりも可憐な美しさに」

「有難う……」

グラスに口をつけ、甘く弾ける液体を口に含む。

シャンパングラスを手にする総司の姿に見惚れていると、再びグラスが音を立てた。

「私達のこれからと、辻川財閥の繁栄に」

「はい……」

静かな囁きかける声に、椿はほぅっと聞き入った。彼の声がシャンパンと共に身体の中にまで沁み込んでくるようだ。

もう一口喉に流した直後、再び響く麗音。

何度乾杯をするつもりなのかと、くすぐったい思いに胸が熱くなるが、総司の一言で彼女は現実に帰った。

「初めて迎える、この夜に」

――今日はお疲れでしょうから、やめておきましょう？　――

そう言おうと思っていたのに、すっかり忘れてしまっていた。

呑気に総司の姿に見惚れている場合ではなかったのだ。

「あのっ、総司さん……」

慌てて総司に告げようとした椿だが、言葉を口にする前に彼に肩を抱かれ……。――唇を奪われた。

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・４（後書き）

＊次回更新・１０月２１日　予定＊

「あの、総司さん……、私、お願いがあるのです……」
乾杯の後、ちょっと甘いシャンパンの味を感じる唇付けを楽しんで唇を離すと、椿が困惑した表情で総司を見詰めた。
こんな時に可愛い新妻から懇願される願いとは、いったい何なのだろう。それも新妻は恥ずかしそうに頬を染めている。
たった一つ思いつく事柄を想像して、総司は首を数回縦に振ると、優しく椿の頬を撫で、哀願の用意をする唇に人差し指を当てた。
「良いのだよ椿。解っているから」
「……え？」
「君は何も心配などする事はない。ただ私を信じて、私にその身を預けてくれればいい」
「え？　あの……」
もしかして総司も“初夜は明日にしよう”などと考えていたのだろうか。などと、一瞬でも思ってしまったのは間違いのようだ。
彼は恐らく、椿が“初夜”というものに、その際に行われる行為に、不安を持って怖がっているのだと思っている。
「怖いのは無理もないね、そういう行為を重んじる教育を受けて育ってきたのだから。でも椿、何も心配する事はないのだよ？　私達は夫婦になったのだから」
彼は椿のように“今日は疲れたから、初夜は明日に”などという事は少しも考えていないようだ。それどころか椿が不安がっているのだと思い込んで、彼女を説得までし始めた。
総司は手にしていたグラスの中身を飲み干すと、そのグラスをテーブルへと戻し、椿の肩を抱いた手で彼女の髪を指に絡め頭を撫でる。そして湿り気の残る絹糸の髪に唇をつけた。

「……優しくするよ。……心配しないで……」

総司はすっかり“初夜気分”だ。

この気分を壊すのは申し訳ないが、椿としてはやはり、疲れている旦那様に対して、まるで義務のような初夜を強いるのは気が引ける。

――その前に、椿自身の決意も今一つだという事情もあるのだが……。

総司に合わせて、椿も残っていたシャンパンを一気に身体へ流し込む。なかなか互いの思惑が通じ合わない二人だが、緊張を紛らわす為の一気飲みだと感じた総司は正しいようだ。

「総司さん、今夜なのですけれど……」

椿はシャンパンで勢いをつけ、思い切って口火を切る。

これから何を言われるのか予想もしていない総司は、空になったグラスを彼女の手から取り、テーブルへ置きながら「何だい？」と返事を返した。

「こ、今夜はこのまま休みましょう？　総司さんだってお疲れなのですし、二人で迎える初夜は明日でも良いかと……」

グラスをテーブルに置いた形のまま、総司は固まる。

まさかこの日に、結婚して初めて迎えるこの夜に、待ち焦がれた新妻からこんな話をされるとは、まったくもって思ってはいなかっただろう。

「総司さんは昨日も遅くまでお仕事をして、今朝も仕事を片付けてから式に臨んだと聞いております。結婚式に披露宴、来賓への気遣いも忘れずにこなしていらっしゃったというのに、お疲れではないはずがありません」

シャンパンのおかげで勢いがついたのか、椿は溜めていた言葉を一気に出すかの如く思いの丈をぶつけた。

「総司さんが“初夜”というものの“義務”に捉われて、無理をなさってしまうのが私には辛いのです。お疲れの身だというのに、総司さんは更に私まで気遣って下さって……」

そこまで言って椿は、自分の言葉にポッと頬を染める。

「なんて……お優しい方……」

自分の事は考えず椿を気にかけてくれた事に、改めて感動してしまい、そんな優しい総司への愛しさが増してしまう。

頬を染めた椿は、肩を抱く総司の胸に頬を寄せた。

しかし、自分の事は二の次にしても相手を思いやってくれた、という意味で感動を覚えてしまったのは、総司もまた同じだったのだ。

（椿だって、疲れているはずではないか）

結婚式に緊張をしない花嫁などはいないだろう。おまけに夜になれば、総司と初めて過ごす時間が待っているのだ。

処女である椿にとって、その緊張の度合いは男性から見て計り知れないものがある。

また椿は、常に主人を立てるという、日本女性の伝統のような教育を受けて来た娘だ。その椿が、自分から初夜の中止を申し出ている。それも総司が疲れているだろうから、という理由で。

（椿は、何と優しいのだろう……）

総司の心は舞い上がった。

緊張して心労度が高いであろう彼女が、総司の心配をしてくれている。しかもそれが、主人の意に反するという行為である可能性もあるというのに。彼女が重んじて来た、女性としての慎みを害する発言であるかもしれないのに。

「椿……」

ふわりと椿の身体が浮き上がる。総司が彼女を抱き上げたのだ。
もちろん、部屋へ入る際にもした“お姫様だっこ”だ。
「心配してくれて嬉しいよ。けれど、もしこのまま寝てしまったら、私は余計に疲れてしまうよ？」
「……え？」
「男というものはそういうものだ。覚えておきなさい」
にっこりと微笑み、彼は椿を抱きかかえたまま歩き出す。
「あのっ……、つかささんっっ……」
椿が総司の台詞の意味を良く理解出来ぬまま、彼は寝室のドアをくぐった。

――どうやら“初夜”は、決行されるらしい……。

番外編≪摘華の夜に祝福を≫・５（後書き）

＊次回更新・１０月２５日　予定。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4603t/

椿姫純恋華

2011年10月21日07時00分発行